
カンピオーネ！～赤き蛇の魔王～

Ji3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネー！ 赤き蛇の魔王！

【Nコード】

N4259R

【作者名】

Ji3

【あらすじ】

つまる所、なり変わりでも憑依でも転生でもトリップでもない「Another7人目（護堂は8人目）」タイプで王のキャリアも学生としても一年先輩です。

？ ・赤き蛇 / 01 ・蛇と魔王と朝御飯（前書き）

初めまして。此処でカンピオーネ！ のSSを見ていて唐突に中二魂が燃え上がり書き上げました。本家程神について詳しく書けませんしネタもありますがそれでも良ければ感想等お願いします。

？ ・赤き蛇 / 01 ・蛇と魔王と朝御飯

夢を見る。

「うーん、夏なのに涼しいな倫敦！ 折角親の金で来てるんだ。レ
ッツ時計塔&大英博物館、後、話の種に不味い料理！」

それは高校生の楽しい観光の筈だった。

「危ないですよ。こんな所に日本人の方が何故来ているんです」

金髪の少女との出会い。

「神様だ？ まつろわぬ神だ？ ふざけるな！」

非日常との遭遇

「死ぬだけです。私は此処で終わるだけです。誰にも必要とされ
なかつた代替品が」

生死の境

「ほつといても死ぬし。君、逃げる気ないんだろ。それにあんなのに脅されて逃げるなんて死んでも御免だ」

意地だけで立ち向かう愚者。エヒメテウス

「ばかな、人の子がそんなバカな真似をするか！」

「へ、御利益があつたみたいだな。只の物干竿だと思つてたのに。さて、俺と一緒に地の底に落ちろ！」

愚者と魔女の落とし子を生む暗黒の生誕祭。カンヒオーネ

「さあ、様。私の新たな息子に祝福と呪いを与えて頂戴！
7番目の神殺し、最も若き魔王となる運命を得た子に聖なる言霊を捧げて頂戴！」

全てを与える女。バンドラ

「くく、ははは。喜ぶがいい、ヒトの子よ、高松翼よ！ 貴様はかつて我がヒトの末裔に主の目を盗み禁断の知識を与えたように。私から権能という名の知識を盗み取り王となった最初の人間だ！ ヒ

トを護り、愛し、強く在れ、その果てに破滅するまでな！」

神からの祝福^{のちい}。

目が覚める。時計を見直すと未だ日本の時計は一文字を示している。せつかくの休日が台無しだ。

かつての出来事……まるで映画の様な現実。非日常への入り口。自分が人でなくなった際の物語。ボーイミーツガールな映画版大長編。脳裏に浮かんだ単語の羅列を見直すと一つしか言葉はでてこない。

「なんて…厨二」

全身汗まみれで寝なおす気にも慣れなかった。

カンピオーネー！赤き蛇の魔王！

？・赤き蛇／01・蛇と魔王と朝御飯

高松翼の一日は一杯の卵かけ御飯から始まる。

ある冬の土曜日。正月ボケも治る時分、高校一年である彼も今日は休み。時計の短針は8を指し普段ならば電車に乗っていないといけない時間である。普段なら休みならではの惰眠を貪っているが今日は早々に起床し朝食の準備を始める。

一部、とても異常な肩書を持っていたりはあるが世間的には一高
校生に過ぎないし、自分の知名度はあまり高くない。

そこにはあの美人でお姫様な割に案外食わせ者かつ腹黒なあの巫

女姫の差配や

『撃つて良いのは撃たれる覚悟のある奴だけだ！』

とかいいそうな、策謀家の癖にどこかお人よしの部分を棄てきれない黒の王子の思惑、それと本人の嗜好他が理由としてあるが事実だけ述べると未だ彼はこの国では一学生である。

高松翼が現在住んでいるのは都内の一軒家。一応、父の持ち家である。北区の赤羽なんて実際には埼玉と大差はないが一応都内と言えなくもない。所謂24時間働けますか、の「埼玉にマイホーム買って毎朝通勤電車に揺られてクラウンに乗るのがステイタス」の世代の為、勝ち組と言えなくもないだろう。

と言つても当然の両親は高校入学の前に海外赴任した為、この家の住人は、翼は一人。都内にて大学教授を勤める祖父の所に間借りすると言う手も有ったが元々、共働きで半ば一人暮らしの様な状態だった為、生活に不安はなかった。

「父さん、海外にいつちゃうぞー」

「母さん、父さんについていつちゃうから」

語尾に音符のつきそうな発言と共に渡英した両親。新婚バカップルでこそないもののあの夫婦の熱愛っぷりは見ていて此方が胸やける程だった。有る意味気楽ではある。

真面目な良識人と言つて間違いない祖父の子供と思えないあののつちやけた性格は方向性こそ違えど間違いなく祖父の知り合いを見て形成されたものだろう。自分はあはなるまいと心に誓った物だ。そんな翼の朝は一杯の味噌汁と焼魚にお漬物。白いご飯、そして生卵をかき混ぜ卵かけご飯を食べる事から始まる。

白い卵殻を割ると出てくるプルンとした黄身。それにかけるのは翼にとつての命の水とも言える調味料、醤油。アミノ酸、塩分、ア

ルコールを究極のバランスで組み合わせられた至高の調味料を垂らし
かき混ぜる。白身がメレンゲまではいかずとも完全にちぎれるまで
かき混ぜるのが彼の好みだ。

黄色と黒が混ざりあい濃い茶色となる。炊飯器から炊きたての御
飯をよそい茶碗に盛りつけ卵をかける。

生きていると実感する瞬間。翼にとつては平穩を感じる一時であ
る。前に知り合いに言った所偉く安上がりだ、と言われた事が有る
がそれは大きな間違いだ。安く見えるのは日本だからで外国では幾
ら掛るか判らない。

つまり是は日本人であり己が掴み取った日常を実感する為に不可
欠な儀式なのである。

そんな幸せなひと時を無粋にも邪魔する電子音。携帯電話からの
着信音、テーマはゴッドファーザー。この時点で誰かは決まってい
る為当然ながら放置。液晶を見る事ができるのならばそこには『人
間失格剣士』という文字が光っているだろう。

食事中にかけてくるとはなんと無粋な。流石ヘタリア人。自分
勝手かすぐ逃げるか砂漠でパスタを食っているかしかおらず一割の
まともな人間で国を廻している、と言われるだけの事はある。

当然ながら無視し食後に熱いほうじ茶を啜る。一息ついた所で未
だなっている電話の通話ボタンを押す。

『ツバサ、ずっと待たせるなんて酷いじゃないか!』

「日本は今朝だ。俺の朝食時にかけてくる方が悪い」

予想していたのか気にしないのかいつものごとくのラテンな声が
聞こえる。

『10分も待たせるなんて。勤勉な日本人らしくない』

「ドニ。あなたが殊勝に電話機を持ちっぱなしで待つとは思えんが」
そもそもこの男は携帯電話を持ち歩かない筈だ。どうせ誰かにか
けさせているのだろう。そんな事を思っていると予想通りの返答。

『うん。リベラに任せてたよ』

「あの人も災難だな……」

一割のまともなイタリア人の見本のような彼の姿を思い出す。黒髪をオールバックに撫でつけた勤勉の見本のような人物。ビジネスマンと言っても通じるだろう風貌。きつと横で何時もの通りで眉間に皺を浮かべているのか何時もの事と諦めているのか。そんな事を思いつつ。

“あれ？俺もひよつとして彼の胃潰瘍の原因？”等とシヨックになったりして会話を続ける。

「で、一体何の用だ。暫くそっちに行く予定はないぞ？」

『うん、君は僕の誘いもつれなく断る友達甲斐のない奴だ。だが、僕は君の友達だよ！』

「仲良く殺し愛するのは普通、避けたいと思わないのか」

『愛も友情も何もかも、刃の下で斬り結んでこそ判る。』俺とお前は所詮、戦うしか判りあう道がない！』君達の国の映画でもこんなセリフが有った筈だ』

「どこのロリコンアンデットだよおい」

最後にお互い人間止める羽目になった所には確かに通じる所は有るがあの話では平和の為に二度と出会わない事を選んだはずだ。決して嬉々として死闘を演じる仲ではない。

『ま、僕らの熱い愛の会話はこの辺りで良いとして。何かイギリスで騒ぎが起こってるらしいね』

「どっから仕入れるんだよそんな事……てか、何であんたが動かない」

『んー、僕が行きたいんだけどさ。場所がロンドン近郊だから。あそこは賢人議会の御膝元だしね』

「それだけであんたが遠慮するタマか」

確かにイギリスは賢人議会と王立工廠の縄張りだが。神殺しにしか関心を示さんこの男に関しては割と交渉含め行われる筈だ。

『うん、いきたいのは山々なんだけどさ。これから僕も別件で出かけなくちゃ行けないんだよね』

南米の方だよ。今度御土産でも送ろうか？等と言っているが是

で話は判った。

「アレクさんの方も別件って事が」

「そ、だから君に話が持っていかれるんじゃない？　その後、逢いたいなと思って」

「殺し愛は体力が持てばな。ま、確約は期待してないだろうし」

「うん、話が早くて好きだよ。流石は我が好敵手！　じゃあ無事の再開を祈ってるよ！」

と、腐れ縁との会話を終えた後、再度電話が鳴る。表示を見て即座に通話ボタンを押し耳にあてた。電話から流れる滑らかなキングスイングリッシュの女性の声。先程までとは打って変わって和やかな声音。暫くすると通話が終わったのか電話機を耳元から離す。

さつと食器を片づけ自分の部屋へ向かう。冬用の服装に着替えその上から仕立ての上等そうなトレンチコートを羽織る。アクセントなのか左胸部にS字を反転させ横に倒し一方の先端の先に点のあるデザインの刺繍。移動用に誂えたバックパックにパスポートや財布、装備を放り込むと暫くの後、家から人の気配は消えていた。

イギリスはロンドン、ハムステッド住宅街。ヒースロー空港から車で3時間は掛るこのロンドン屈指の住宅街のある敷地内に翼の姿はあった。現地時間で23時すぎ、時差は-9時間、電話を終えてから1時間と立っていない計算になる。日本からイギリスだけで本来ならば半日はかかるというのに、だ。

その一角、古城じみた外観の邸宅に足を向ける。兔小屋、と称される事の多い日本の邸宅どころかこの高級住宅街の中でも一線を画す品の良さと資産家である事を主張する豪華さだった。

扉に近づいた時点で中から扉が開き人が出てくる。腰まで伸びたストレートのプラチナブロンドに碧い瞳。夜更けだけあって部屋着の上にコートを羽織っている。

「お待たせしました。待ちました？」

「いや、今来た所」

太陽のような自己を主張する類の輝きではないが儂げなそれが逆に周囲から目立つ。例えるなら夜空の月、高原のエーデルワイスと言ったところか。何気に女性らしくたくましいのは確かだが。自身の言葉を脳内から消去しつつ手を挙げて声をかける。

「久しぶり……という程でもないか」

「呼びつけたのはこちらですから。お久しぶりです翼さん」

「こういう用件オンリーで会うとあんまり嬉しくないけどね」

「女性に会うのにそういう事は失礼ですよ？」

「あの腹黒姫はアレクさんと丁々発止続けてれば良いよ……さて、その姫さんは会って大丈夫なの？」

そう聞くと彼女は扉を閉じ、中へ翼を迎え入れる。二人とも勝手しつたる他人の家とばかりに4階に向かう。

彼女 メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァール この邸

宅の主、白き巫女姫の従姉妹にして頭脳集団である賢人議会所属の実働員。

そして。

高松翼が神殺しになる際の目撃者にして共犯者。アコンテリス

? ・赤き蛇 / 01 ・蛇と魔王と朝御飯(後書き)

後書き：日本人ならTKG。外国旅行から帰って来た時の俺の
実感でした。

後、カンピは割と他の王の行動（ヴォパンやドニ）を諫める事
が多いですがこいつは寧ろそっち側になるかと。なので嫌いな方は
嫌いやもしれません。では近いうちに。感想等頂けると喜びますの
でお願いします（という程書き進んでいないが）。

ちまちまと書いていくつもりなので宜しく願います。先に書
かれている諸兄方と権能かぶらず、かつ護堂と関連性もたせられる
と良いなあ…ウルスラグナ関連でインドラ、ヘラクレスは既に出て
いるし。風神として使い勝手の良いテュポーンは一人メイン、一人
サブで既に登場しているしパズズは流石に最初の神格としては…バ
ツタ人間に変身、黒い飛蝗の群れを召喚して風を操る、という権能
はロマンは感じるが流石にBLACK過ぎて恐れ多い。

余談ですが自分としてはヴォパン侯爵が般。ピーあがりの権能とし
ては一番使い勝手が良いと思う今日この頃（人狼/巨大狼への変化
狼の召喚で使用制限なし）。

権能のコンセプトはカンピオーネオーズ（またはディケイド）で
しょうか（謎）。

1. オリキャラ（ヒロイン）について。

なるう的にオリカンピ主役は当然として。ヒロインも「公式キャ
ラの縁者」パターンです。ぶっちゃけ、護堂の嫁から掠奪する手も
有りなのですが余り、護堂の手札を減らしたくない（&護堂ヘイト
にしたくない）のでオリです。護堂の立ち位置的にとって問題そ
うなのが恵那とひかり位なんだよね…寧ろ外国勢との交流が増やす
（予定の）為とも言う。

2・神話の史実性について

ある程度調べてはいますが捏造、というか解釈が入りますので本家程には詳しく行いません。只、名詞のみを羅列するような仕方はしたくないので。

？ ・赤き蛇 / 02 ・蛇と英国と白き巫女姫（前書き）

前書

やっと動き出したよおい：翼はカテゴリ：オリ主だから良いとして。完全オリキャラのメアリーのスペックと応答シミュ、原作モデルの呪文作成に時間喰った…

？・赤き蛇 / 02・蛇と英国と白き巫女姫

初めに言っておく。イギリスはカーナーリ 特殊だ！

閑話休題

イギリスは魔術的にやや特殊な立地で、所謂欧州本土に存在するような魔術結社もあるにはあるのだが実質、新オカルト主義に基づいた（と、思うんだが……）所謂現王制の下、大英帝国末期に設立されたサークルに端を発する学級機関の『賢人議会』に統制されている……『王立工廠』を除いて。

こちらは英国在住のカンピオーネ ブラックプリンス “黒王子” アレクことアレクサンドル・ガスコインが立ち上げた魔術結社だ。言ってしまうえば彼の擁する組織と言える。実際には彼の元に集まった寄り合い所帯というのが正確な所なんだろうけどそれでもやはり彼の下にある組織だ。この二つがこの国では緩やかに対立をしている。緩やかに、と言ったのは。

「上の二人が談合に近い感じで共闘する事多いからなあ」

欧州人ならではというか。敵対はしていても普通に交渉は行う。寧ろ交渉で落とし所を探る方が多い。あの二人は最大の政敵であると共に最高のパートナーな訳だ。殲滅戦にはけしてならない。

そう、政敵である。例えばどんなに策謀を巡らせようと、戦力を用意しようと、カンピオーネ バケモノ という存在には敵わない。彼らが癩癩を起せばそれで全ては破滅する。だからこそ欧州魔術結社は付き合い方を熟知し従って来た訳で。

ま、魔術結社は結局の所極道というかそんな感じになる訳で。コーンウォールとロンドンでシノギを削ってるでも言うべきか。時計塔とシャーウッドのケルト系と言い換えても良い訳だが。

結局、カンピオーネは魔術師でどうこうできる存在ではない訳で。

何されても『災害だから仕方がない』で済ませるのが一番被害が少なかったりする。

一度チラッと見ただけだがヴオパンのジイさんなんかその典型だ。人間に対して一々害意を持って接する事はないのでむしろ安全と言える。

ド二も剣以外に興味がないから神殺し以外では呑気なボン程度の迷惑度でむしろ極めて安全だ。両者に共通する点は詰まる所「人間なんぞどうでも良い」という一点だろうか。

自分の身の上に被害が掛ってきたらそうもいえない事も確かだが。怪獣は単体で完結する存在であってそこに理屈を求めな、という話。被害がでかいからどうにかしようと思つのも仕方がないんだが。一方、黒王子アレクはなまじ部下を持って自分の組織を創っている為に政治的な交渉要素を許してしまっている訳だ。神と戦う以外何も興味を示さない前述の二人とは其処が違う訳で。良くも悪くも緊張状態ながら均衡状態がとれていた。

其処にボン、と賢人議会よりになった『王おれ』が現れてイギリスは荒れた。上の姫さんが抑えられない位荒れた。俺の高一の夏休みと二学期の休日と出席日数の余裕がなくなる位荒れた。俺を学校に行かせろ。

直接対処できる武力がないから社会戦してたのに対抗できる戦力が転がり込んできたわけだから判らないでもない。わからないでもないが実際に矢面に立たされる側の気持ちも考慮してほしい。

他人事みたいに言いたいが大変だったし正直二度と戦いたくない。なんなんだあの青黒ステイシスかと言いたくなるような戦術は。クロックアップやマクー空間、因果応報は美味しかったけど。

そんな事を考えつつ階段を上っていく。機密保持もあるんだろうがなんで最上階なんだと愚痴りたくもなる。目の前を進むメアリーは勝手知ったる他人の家とばかりに案内されるがそも彼女も歴とし

た上流階級の人間だ。使用人もごく自然と受け入れる。そういう意味では明らかに庶民、かつ純東洋系の俺の方が彼らにとっては不自然だっただろう。最近は何存在を認知されたようで特に何も無いが。階段を上りきり扉を開けると其処には1人の女性が笑顔で二人を待っていた。

「遠路遙々ようこそいらつしやいました、若き王よ。私達の召喚に応じて戴き感謝の念に堪えません。さて、仰々しい挨拶はこの辺りで。メアリー、翼さんもお疲れ様。簡単にだけとお茶を用意してあるので如何かしら」

嫣然と微笑みながら公式の挨拶を述べた後、茶目つけのある笑顔に切り替わる。

アリス「ルイズ」オヴ「ナヴァール。通称アリス姫。プリンセス・アリス俺にしてみればメアリーの従姉妹だが世間的には賢人議会の元議長だったり白き巫女姫などと呼ばれて魔術師に敬慕される存在だったりする。

俺にとっては無茶振りする上にはた迷惑な猫かぶりな年上の美人のお姉さんといった所だがメアリーの従姉妹だし政治的に援助してもらった恩がなくもない。

勧められるままに椅子に座る。質素ながらも品の良さを感じられる彼女のプライベートスペース兼寝室。ティーセットを揃え翼を歓迎するアリス。優雅に座り着席を促すその脇のベッドに横たわるのは椅子に座る人間と鏡映しの様に同じ姿……当然だ、其れは彼女の「本体」なのだから。

類稀なる巫女としての素質が災いして動く事すら憚られるという賢人議会でも極々一部の人間しか知らない極秘事項。トップシークレット

カンピオーネー！赤き蛇の魔王！

？・赤き蛇／02・蛇と英国と白き巫女姫

「自前の姿を晒すのは信頼と誠意の証とみて良いんだろっけど。夜中に呼び出すのはどーかと思う」

「そちらは朝でしょう？ 時間的にも朝食が終わった頃ですし盗んだ『電光石火』の権能で世界各地を好き勝手移動する方に時間なんて問うだけ無駄だと思いましたが」

翼の挨拶ににこやかに言葉を返すアリス。御尤もな話でぐうの音も出ない。

「だって便利だし」

しかしカンピオーネは悪びれない。至上の権能を便利道具扱い、魔術師が聞けば卒倒するだろうか。カンピオーネの成りを知っているものならば納得するかもしれない。本人にはまた別の言い分があるようだが。

雷の速さで世界を移動できるのだ。只で世界中観光できてかつ言語にも不自由しない。ならば活用せねば勿体ないじゃないか……彼にしてみればそんな感じである。ワンワンと吠えて地球の裏までひとつ飛び。現に王として只今出勤で英国にいるのだし。

「翼、何気に経費削減になると仰ってますから気にしないで結構です」

「最近メアリーが私に敵しい気がしちゃいます。男が出来ると従姉妹の絆なんて紙より薄いよね」

「猫の着ぐるミを着こんで生きて来た従姉様と違って素直になっただけです。そのひねくれて遺伝子の二重螺旋構造になっている性根をまっすぐにすればきつと相手が見つかると思います……ああ、そうすると黒王子様との相性が悪くなりますね」

翼に対し笑顔を向けたかと思うと従姉妹に対して冷たい視線を投げかける。その変わり身の早さに芝居掛った口調でざめざめと嘆くアリス。ご丁寧ハンカチまで目にあてている。幽体とはいえ芸が細かい。

高松翼、メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァール、アリス・ルイズ・オヴ・ナヴァール。

ナヴァール邸の最上階にて。神殺しとその従者、賢人議会元顧問。三者のみの会談は始まった……会話のフランクさは日頃の彼らの肩書を知る者ならばあり得ないと言いつつだが。

「で、今回は何ですか。アレクとドニの奴は別件らしいけど」

「一言でいうと。毎度おなじみ世界の危機です」

女の会話に関わりたくないの話を進めようとしたらコレである。世界の危機を女性の世間話ガルストークと同じLvで語らないでほしい。

「いや。そんな週刊誌の発刊みたいにお気楽に言われても困るんですが」

カンピオーネになって早半年を過ぎるが。週刊までは言いすぎにしても月刊世界の危機は確実にいつていると思う翼である。

「そうは言っても今回はなかなか一大事。ロンドンを始め、イギリス全土の5歳以下の子供が現在原因不明の昏睡状態になっています」
最初は只の事故かとも思っていたが年齢の限定、またイギリス全土で、という範囲になった為、霊障こっちの事件だと気づいたそうなので、調べたら魂そのものが抜けていると。同時に幾つかの場所が砂漠化。痩せてはいるももの緑の台地が多いイギリスがそんなになればそれ目立つ。

「いや、世界の危機をそうお気楽に言われても困るんだけど」

「真面目に言っ解決するならいくらでも猫を被りますけれど」

貴方にそんな事しても逆効果でしょう？ そう顔を傾げて微笑む姫君アリス。御尤も、この茶会も俺用の歓待かと嘆息して話の続きを促す。「先程の発言に訂正を加えると。アレクサンドルもこの一件で既に動いています。候補地が絞りきれないので飛びまわっていますね」

自分の御膝元での事件は見過ごせないでしょうし、との事。成程。候補地を賢人議会で絞っていき王様二人でローラー作戦か。贅沢な方法ではある。

「アレクサンドルはあれで貧乏性な働き者ですから。貴方も割と人

間の価値観で動いてくれますからこの手の事件に座して居られるほど人非人ではありませんしね」

「失敬な。割とじゃなくて俺はごく普通の純朴な一般庶民の感覚を持つ日本人です」

「翼……一般人は決して神殺しなんてできません」

そんなコントを終えた後。翼とメアリーは連れだつて車に乗り込んだ。国際免許どころか国内免許も取れる年齢とではないので運転は彼女任せである。

移動速度だけを考えるなら翼1人の方が早いのだが土地勘や魔術師としての基礎知識、現地構成員との顔つなぎ等を見るとどうしても『人間』がいる。そういう意味では『白き巫女姫』の縁者というのは適役なのだろう。

アリスは霊体も飛ばさず此処で情報の確認と連絡に務めるとの事。普段のように飛びまわらないのかと聞いてみたが「今回は下手に霊体を飛ばすと喰べられてしまいそうなので動けません」との事。成程、確かに天の魔女の霊体ならさぞや美味しく頂かれるだろう。魔女の踊り食い。うん、何とも心惹かれる単語である。

そんな訳でハムステッドから車で西に向かいブリストルを目指す。揺れる助手席で残りの資料を読み進める。

「で、ブリストル方面つってたけどその後は？」

「被害対象が子供で人数の母数の関係で大都市になりますからブリストルの後はバーミンガム、マンチェスターの方を渡るかウェールズ方面を当たるかですね」

深夜故か現状故か。自車路線も対向車線にも車の影も形も見えず。辺りに響く音は自分達の車のみ。

「まあ、深夜のドライブつても乙なモノだけどさ」

出来れば自分でハンドル握りたい。女性に乗せて貰うんじゃ男と

してかつこ悪い。

「私は免許を取ってほしくないですよ」

「いや、取らなきゃ運転できないじゃない」

内心を見透かされたか希望と真逆の発言が返ってくる。車とバイクは男の子の夢と理想とライダー魂スベリ魂が詰まってるのに。そんな思いの反論は。

「そうしたら貴方に運転してさしあげる事ができないじゃないですか」

そんな一言で真つ二つに叩き斬られた。男としてそうストレートに言われるとどうしようもない。

「いや、そしたら任せつきりは男として」ですから」

さえない反論をあつさり封じられる。

「ええ。ですから貴方ウチカに乗せてください」

世界の果てまで。微笑を称えて告げられるそれは。

「そういう事は真顔で言う事じゃないと思うんだ」

「それでも言わないと翼は聞こえなかった振りをして誤魔化して翌日にはなかった事にしますもの」

ヘタレと言われているようだが。一介の高校生にはそんな全てを預けられても重すぎると思う。というかそんな愛の告白紛いの発言を真正面から受け止められると思う方がおかしい。

「大丈夫ですよ？ 世間的には既に私、『王』に捧げられた『寵姫』

……生贄ですから肉欲の赴くままに貪られても無問題です」

「俺の社会性ー！？ そして淑女がそんな事いっちゃいけません！

まあそれはさて置いてだ」

「ほら、誤魔化しました」

「それはさて置いてだ！」

大事な事だから弐回言いました。二重の意味で。

「いや、大当たりだね？ 目的地に向かう前なのに」

M4 高速道路を疾走する中急激に感じる神力。是は魔獣とか下僕といったLvじゃない。特徴的な列車のターミナルが見えるし位置

的にはスウィンドン辺りか。

「ブルームゴルフ場があるしそうでしょう。被害も抑えられそうです」

そろそろ降りようか。そう心算した所で車の前に急に牛の姿をした魔獣が現れ突撃してくる。避ける間も無く車ごと転倒、這い出る羽目になった。

「砂漠で幼児の魂で牛？ かなり絞れたけどやーな予感だなあ」

這い出た所で先刻の追突犯と鉢合わせ。牛と言ったが口には犬歯…ぶっちゃけ、牙が並んでるし前脚には鋭い鉤爪。典型的な「怪物」パターンとでも言うべきか。

熊の様に立ち上がって此方に向かってくる牛魔獣（仮称）に向けて右腕を突き出す。距離は5m程、一息で詰められる距離ではあるが“普通ならば”手の届く距離ではない。だが、高松翼は普通の人間ではない。

「邪魔だ、黙っとけ」

そういうと同時に手がうねるかのように伸び魔獣の左胸を貫く。背に貫通した手は人間のそれではない。赤い鱗に覆われ手があるべき部位には蛇の頭が在^あった。胸を貫き更にそのまま伸びると全身に巻きつき締め上げる。長さにして10mを優に超えるか。

ギシギシと嫌な音が響き、数秒もすると苦悶の悲鳴を上げ魔獣は息絶える。巻きつきをほどくとそのまま大顎を開き頭から丸のみにする。長い蛇腹が風船の様に膨らむが直ぐに萎み元の太さに戻ると同時に縮み鱗の生えた手に戻った。

「あんまし魔力の足しにならないね。権能どころか大魔術一回分位？」

「^{カンヒオーネ}翼基準で考えないで下さい。大騎士級でもなければ手も足も出ませんよ？」

「わーってる。後、この下僕には昏睡者の魂は使われてない。遠慮なくぶちのめしてオツケーだ」

喰った際の感触では魔獣は純然たる自然の気が凝ったもの。魂は親玉に一極集中という事らしい。一匹倒せばなんとやら。それとも

倒されたかさつきと同じ魔獣がそこかしこから此方に寄って来た。目的地に行くにはかき分けて進むしかない。

ゴルフ場で良かったと言うべきか。この時間なら人も動物もいないし思いつきりやれる。半壊した車から飛び降り現れた相手に向き合う。所詮、前座だ。時間をかけるわけにもいかない。

「さつて。魂が引き寄せられてる現場だし大体の方向で見つかるか？」

基本的に贄を求める神というのは古代の神と言って良い。正確には人間に対処できない天災に対して『神の祟り』である、と用意したものがカミの在り方だからだ。荒ぶる魂、強大な存在。人間でいうなら生贄の羊か。スケープゴート

「と言つて一々付き合ってもらえんのだよな。魂を弄れるような権能も無し、魔力コストはともかくそんな魔術は使えないし……我、神如き力を誇る存在^{もの}、故にその身を地に墜とされし存在^{もの}」

「我は苦役を受けし存在^{もの} 罪科を背負いし存在^{もの}、平安を得られぬ存在^{もの}」

詔を唱える。是は高松翼が弑した神の罪科を告げる聖句。主の裁きを地に遍く示す言霊。

「我は智慧を齎せし存在^{もの}、我は混乱を齎し存在^{もの}」

天上の神々に対する宣言。それは力を奪い取った存在が此処にいると高らかに告げる叛逆者の雄叫び。

「我は叡智を盗む蛇。我が盗みしは『切り裂く銀の腕』！」

言霊を唱え終わると同時に権能を発動させる。右腕事態が金色に輝く剣に変貌、そのまま横薙ぎに一閃。眩い光が視界を覆ったかと思つとそこにいた牛頭の怪物は全て消えていた。バケモノを文字通り一掃した右腕、刃となったそれを元に戻す。

「流石の切れ味だよ全く」

地上のあらゆる存在を切り裂く剣を作る。言葉にしてしまつと是だけのシンプルな権能だがある程度射程の融通もきき対象を選ばない。自分でさえこうなのだ。あの剣技と合わさる事で無双の強さを

誇る。なにより。この剣こそがあの男に何よりも似合いの権能だと断言できる。

その一方でメアリーは背後から迫る牛を左手に召喚した武装くわくじゆで縛りあげていた。服装はでる時のまま、白いブラウスに青のロングスカート、首にスカーフを巻いたお嬢様然とした恰好。ある意味でシユールではある。

「其は縛りしモノ。其は遮りしモノ、王を、神を、英国を縛りし塔の鎖よ。メアリーの名を持つ者が請い願います。かの者を縛りたまえ」

鎖は生きているかのように巻きつくと魔獣を拘束する。そこに右手に召喚した剣サイベルで首を斬り落とした。

「おー、流石は国宝。大したもんだ」

「是を使っている私の力量も褒めるべき所ですよ。尻尾を振るまで褒めるのが飼い主の責務でしょう」

「偉い偉い。さて、この分じゃちんたらしてられないし本命まで一気に向かうか？」

「了解 つくられしモノよ。息吹を吹き込まれしモノよ。王の名において汝を鑄造します。赤き蛇の名において汝を産み落とします。巨大おおいなるものよ、打ち砕け、貪り喰らえ 滅ぼしたまえ！」

言霊を唱え終わると巨人が生まれた。錬鉄術による巨人ゴレムの作成。身の丈5m程、基本的なフォルムは人型だが背に一对の翼を生やし手に戦棍メイスクと楯を持つている。先程まで乗っていた車スクラップを材料にした為かシリンドーや配線の内部骨格に外装の鎧を纏った機械の天使のような姿。両肩にそれぞれ飛び乗り目的地まで走らせる。

走ってきた魔獣を戦棍メイスクで打ち据え、盾で殴り倒しながらも目的地向け一直線。

「おお、無双無双」

「翼さんの魔力を援用していますから。未熟な魔女でもこの程度の錬鉄はできます」

「うわーい、電源扱いー。羽が生えてるのはそれか」

「私と貴方の仔ならば獣や無機物の姿を取らせるよりそれが一番自然なカタチですの」

「ブランドツリさん家の娘さんは獅子の姿を取らせるらしいけどね」
イタリアは名門、赤銅黒十字の“赤い悪魔”ディアブロロンの称号を持つ欧州最高の騎士、彼の姪っ子は錬鉄術を得意としていた筈だ。まあ、魔女じゃないんで平凡な天才なんだが。

そんな雑談をする間にも黙々と進む巨人。何時の間にもやがて景色が周囲が緑の芝生から黄土色の砂漠に切り替わっている。

「今更ですが『まつろわぬ神』と戦うというのに何時も通りですね」
「それこそ今更だからなあ。あの時と較べたら遙かにマシだし……ほら、見えて来た」

巨人の肩から指差した先には牛頭の巨人が鎮座していた。遠目に見てもお台場のMS位有りそうな巨躯。間違いなく当たりだ。

「さて。今度こそ第二の権能ゲットと行こうかね」

？ ・赤き蛇 / 02 ・蛇と英国と白き巫女姫（後書き）

後書き：やっと話が動き始めたで御座る。なかなか計画停電にならないなあ……被災地の方々に較べれば贅沢だとわかっちゃいます。むしろ逆にクライマックスが先に書き終わったというのは。神格説明の回を割かないで文中だけで済ませられるようにしたいができるかな（苦笑）。権能が今回やっとちみっと登場。メアリに関する諸々は完全オリなのでまあ、その内に。今回したのはエリカというなら「獅子の心」のゴーレム製造と武器の召喚位だろうか。鎖で締め付けは固有能力なのでイルマエストロに近いとも言えなくもない。

エリカを「平凡な天才」評したのは作者。侮辱している訳でも軽んじているわけでもなく本人に言っても笑って受け入れると思う。本人、自分の才能と能力に自覚的だが其処に自慢はないと思うので。

後、9巻を読破。大体是で終わりまでの材料は出揃ったかな？
ネタバレはさけ、神格関連のみを。剣神と雷の関係を何一つ書いてねー！？ その癖、雷と描写される理由の陰鉄（隕石）に関してはそのまま乗っけてるし。其処でのつけるなら7巻で齊天大聖が石に落雷して生まれたって描写が陰鉄の暗喩メタファーと書いておくべきじゃ…。

そして不謹慎だが。スラブにはチエルノボーグといういつの間にかメガテンでは核と習合された冥府の神がおられて…かの神格を弑した神殺しならばきつと今の状況をなんとかしてくるに違いないと思ってしまうた。

？ ・赤き蛇 / 03 ・蛇と砂漠と牛の神（前書き）

うーむ。変身後と後日談のが先に書きあがったというのは……。
さて。やっと書きたいモノを書く為の足場が書きあがりつつあ
る、といった処か。

？・赤き蛇／03・蛇と砂漠と牛の神

ふと、気がつけば『彼』はどこも知れぬ異国の地に在った。

自分の馴染み深き砂塵とも熱風とも縁のない霧と冷気に覆われた小島。何故このような土地に現れたのか。

悩んだのはほんの刹那、まつろわぬ神はそも『存在理由』^{クオ・デイヴァス}に悩むような時代の存在ではない。在るがまま。思うがままに振る舞ってこそ神。原初の神格である彼ならば尚更だ。

まあ良い。湿気た土地ならば乾いた熱砂の土地に。彼の愛する灼熱の大地に変えればよいだけだ。さすれば我が前に再び民共は傅く事となるう！

ならばまずは生贄を差しださせよう。彼が望む贄は若き子の魂。満足できたならば王に呪^{かこ}を与えてやるのも一興か。

そうして眷属を生み出し贄を集めていた折、『彼』の感覚が敵の接近を告げた。間違いない、神殺しの王。^{カンピオーネ}忌むべく愚者共の落として子だ。恐らくは自分の顕現を察し現れたのだろう。

だが、彼の感覚は何か懐かしい物を感じていた。そう、まるで同胞のような熱砂の大地の気配を。

カンピオーネ！〜赤き蛇の魔王！

？・赤き蛇／03・蛇と砂漠と牛の神

見えて来た。巨人^{ゴレム}に揺られて砂漠を駆け抜ける事暫し。青銅の下半身と溶鉱炉となった胴体を備えた牛頭の巨神。此处までくれば特定は簡単だ。

寧ろ翼にとって気になるのはあれが此処に顕れた理由。

「なあメアリー。『アレ』、俺とアレクのどっちに惹かれて出て来たと思う？」

「二人とも類縁を持つ神格を弑し奉っていますからなんとも。只、黒王子様アレクがあれだけ探索して成果が上がっていないのに翼がこうもあっさり発見できた以上は」

「……だよねえ。今のイギリスは二人いるから墮天使系は発生率が倍率ドン！ かあ」

「今は余計な事は考えないで。『まつろわぬ神』を斃す事だけを考えて下さい」

詠嘆を横から囁かれて自嘲した。如何に権能を持っていようと神殺しは余計な事を考えてできる程甘いものではない。気分を戦闘用に切り替える。王としての能力とは別の自己規定マインドセット。

此方の接近に気付いていたが悠然と佇むまつろわぬ神。

「よう！ 短い間だが宜しく。で、あなたが何でこんな所に居るんだ？ まつろわぬモレクさんよ」

「ふむ、私の素状に既に気づいていたか。流石というべきかな？

神殺しよ」

『まつろわぬ神』なら関係ないのか？ そんな軽口にも鷹揚に返答を返す神モレク。

「阿呆か。あんたほどやる事と外見に特徴のある神なんてそういないだろ。それにさつきから俺の権能があんたと共鳴してるんだよ。判るだろ？」

「汝が私の前に顕れたのではなく我が汝に引き寄せられたか。成程、汝もまた熱砂の大地の下生まれた同胞より権能を篡奪したのだな、若き神殺しよ」

「さて。俺のはごちゃごちゃ習合まみれの1人神話デパートで正直わからんよ」

今の物言いで確信した。この神は『牛』や『悪魔』ではなく『砂漠の神』としての色合いを強くして降臨している。成程『牛頭神』ミラタウロス

ではなく俺の元に来るわけだ。

「成程、然り然り。其れ即ち我が再び崇められるのは容易いと言う物。嬉しいものだな」

「悪いがそりゃ無理だ」

モレク。元はアモン人の神であり「青銅の玉座に座る王冠を被る牛頭神」として描かれた。後のソロモン王72魔神の石柱モラクスのルーツでありミノス等とも類縁を持つ「牛」の神。

この神格の残忍さを象徴付けたのは、王に力を与える代償として初子を贄とさせたこと。ヒンノムの谷（ゲー・ヒンノム転じてゲヘナノ煉獄）の聖堂で盛大な音楽の元、我が子を炎に放り込む。

この惨劇と後、ゴミヤ罪人の火葬場となった事により地獄の火「ゲヘナの火、モレクの炎と認識される。

律法学者にもこの惨劇の印象は強かったよう^{ラビ}で地獄の中心に「巨大な真鍮製の両手を広げた牝羊頭の」モロクの神像があると考えこ^{ラビ}う書き残している。

「神像の内部は、灼熱の炎で満たされた七つの小部屋に分かれ、それぞれに贄として小麦粉・キジバト・牝羊・牡山羊・仔牛・牡牛、最後に子供が置かれた。そして、この贄を焼き尽くす神像からは、断末魔の叫びが絶える事は無いのである」

「この世の地獄」、是が彼らの本音だったのだらう。ラダム樹とゾンダープラント、イバリューダーが同時に顕れる位地獄だったに違いない。

「何、畏れられてこそ神、恐れられてこそ魔。神として在れば信者等直ぐに集まるものだ」

「この世に神は^{ガンダム}いない、いないんだ……！」もとい、現代人に今更神なんて受け入れられんだろ。日本ならモレクノミコトとか言^{ラビ}て捏造するのも有りかもしれんが」

そんな翼は一神教ラスボス症候群に罹患済である。曰く「真1、2と旧約こそ至高、3以降とライドウは知らんとの事」

閑話休題、何より。

「悪いが犠牲者を返して貰わにゃあかんだ。悪いな、此処で死んでくれ」

「風情がない、と言いたい所だが我ら神と神殺しがであったならばそうなる事は決まっている、か。良かろう神殺しよ。貴様らを葬ってくれようか！」

「面白い、俺の権能になつておけ！」

会話はこれまで、とばかりにお互い戦闘に移行する。巨神から飛び降りる勢いそのまま腕を赤い蛇に変化させ突き出す。5mの距離など無きも同然の眷属ならばその分厚い胸板をいとも容易く貫く一撃。「成程、竜蛇の神格より権能を篡奪したか」

貫く筈の一撃は神の胴体を貫けずそのままむんずと屈強な腕に掴まれた。同時に神の体表が赤熱化していく。神力　モレクの火
を行使する様だ。

このまま特性を掴まなければ事後処理がキツイ。その程度の熱なら権能を覚えるまで耐えて

「つて、おい何で腕が焼けるかな！」

神に掴まれた翼の腕が焦げて行く。熱に強い筈の蛇体が灼かれて頭部は悲鳴を上げるかのように哭いた。例え火神でもそうそう一方的には負けない筈なのに

「つて待て。遊園地のアトラクションじゃないんだ。そんなのは彼女相手にやつとけ！」

「神と神殺し。我らが交わすは愛の抱擁の如く熱き血潮を滾らせる闘いのみ。何も問題はないな！」

「大問題だ馬鹿野郎!？」

伸びた腕を掴まれて振り回される。一昔のバカップルなら可愛げもあるが20m大の巨人にガンダムハンマー宜しく振り回されるなどたまったものではない。

「前略、我、盗みしは『電光石火』！」

咄嗟に稲妻化、振り回される腕から逃れると宙に留まり反転、神に突撃、そのまま背後に抜け化身を解く。

「成程、雷神の権能か。神速の足をもて雷へと化身するのだな」
感心した様子で此方を見やる神。^{モレク}その身にはダメージが入っているように見え、再度突撃してくる。双角の突撃を再度稲妻化してやり過ごすそれだけだ。

「くそ、大地だから避雷針でもしてんのか？ 桑原なのか？ それともあの胴体だから電気属性は効かないとか言わないだろうな！？」
これだから『牛』の神つてのは嫌なんだ！ 悪態をつかざるを得ない。星座カーストで牡牛座なんて蟹と並んで下位だった人間としては尚更だ。神話の牛は強すぎる！

「牛」。蛇と対で狩猟生活と農耕生活の対比として用いられ、地母神の神獣としての側面も持つが彼らは『地母神を下した農耕神』の象徴だ。

有名な所ではギリシャのゼウス、中国の神農、メソポタミアのエンキ。

大地に縁深く、天空の神としての神格は皆そのタフさと主神としての権能を持つ彼らは基礎スペックという点で他の神を突き放している。

モレクは風雷神ではない旧い神だがそれゆえ大地そのものと深く関わる死と再生を司る神格だ。何より旧く在り方に余計な装飾が付いていない分その我欲に揺らぎがない。

「A A A A L a L A L A L A L a L A L A L A L A L A i e !」

一撃離脱にしびれを切らしたかやにわに神が吠える。^{モレク}咆哮が何かの呪文となっていたのか翼の変身が解けた。空中で稲妻化が解けバランスを崩す。

「って、やばっ!?!」

此処暫く移動呪文としてしか使っていなかったので弱点を失念していた。双角を突き刺そうと振り上げ突進する牛神が迫っている。

「ははは、其処ならば逃げようがあるまいよ！」

「そうは行くかい！ 我、盗みしは『鋼の加護』!」
咄嗟に身体鋼化が間に合い致命傷は避けられたが突撃の勢いは殺

せずモ口に喰らった為吹き飛ばされた。

牛の角でカッキー、といった擬音でもつきそうな勢いで吹き飛ばされ地面に激突、クレーターを作って砂の中に半ばめり込む。野球ならば間違いなく場外ホームランだ。

「……あつつつう。やってくれたなああの牛タン野郎」

同時に体内で力が湧きあがり、脳内に咆哮を上げる『神』の姿が浮かぶ。例えるなら気力が一定以上に上がり特殊能力が可能になったかのような。

是は翼の権能が相手の神格を模造出来た、という報せなのだ。つまり是で翼は神の情報を取りきつたと言う事。

被害者の救助を考えるなら是は必須だった。是で気兼ねなく勝ちにいける。

「いよっし、是で様子見は終わりだな」

「そうか。それは良かったな」

目の前には仁王立ちの神。成程、吹き飛ばした勢いのまま疾駆すれば確かにすぐ追いつけるだろう。

「げはあっ！」

再度、腕を叩きつけられる。空中への移動エネルギーに変わった先の一撃と違い逃げ場がない為まともに喰らった。

そのまま滅多打ちに殴られる。気分は暴走した初号機と対峙した第三使徒か。

防御力こそ上がっているものの模造品、ノーダメージとはいかず徐々に体力と呪力が削られていく。

「さて、終わりだ神殺しよ！」

止めとばかりに両手に炎を燈し両腕を振り上げる。このままだとマウントスタイルで殴り殺されるだろう。

そう。『このまま』なら。

大きく腕を振り被った横から黒い影が見えたかと思うと

「援護攻撃のデリバリーお待たせしました」

そんな声と同時に横合いから巨人が呐喊、モレクに全身でぶつか

る。

相方の奇襲、まともによっても通じないが不意を打てば魔導士でもまつろわぬ神に打撃を与える事は可能だ。

例えば聖騎士級の秘術、

例えば王並の呪力を用いた攻撃。

「待ちました？」

「いいや。今来た所！」

5mと20m、身長差15m、大人と子供どころかSSとMサイズ。ウエイトの差は明らかだが王と魔女の魔力を十分に纏い、勢いの乗った一撃。

たたらを踏み転倒するモレクだが直ぐに立ち上がった為、稼げた時間は極僅か。

だが、それで十分だった。

「我、神如き強者を名乗る者、故にその地に墜とされし存在」
モレク
神の隙を作るには。

「我は苦役を受けし存在、我は罪科を背負いし存在平安を得られぬ存在」
カシレオーネ
翼が最強の権能を使う時間を得るには。

「我は世界を示す蛇。我が身が示すは世界の在り様」
先程まではとは聖句が異なる。同時に神殺しの全身から今までとは桁の違う呪力が練り上げられるのを神としての感覚が告げている。
間違いない。是は神殺しの最強の一手！

「我が頭は世界の全てを見渡さん。我が翼は疾く世界を渡らん」

獲物を前に威嚇するかの如き蛇の咆哮が遠くまで響き渡る。同時に視認できる程の呪力が蛇の姿でとぐるを巻くように翼の取り巻き円を為し螺旋を練り上げ卵　世界　を創り上げる。

「我は神話を為す赤き蛇　我は叡智を盗む赤き蛇！」

卵に輝が入り、中から炎が零れ落ちる。割れた卵の欠片は炎となつて燃え盛り篝火の様に周囲に陽炎を立ち上らせる。

最初に見えたのは蛇の頭。

赤い鱗の頭がぬうつと鎌首をもたげる。一本、二本、三本

複数の蛇頭が次々と現れ尻尾が飛び出て大地を踏みしめる。翼が突き出、広がっていく事でついに卵が割れ全体のシルエツトが浮き彫りになった。

一本の尾に支えられた胴体からは12の翼がその身を誇るかのようになり、うねりのたうつ首は7、各々頭が二つ 14の頭がモレクを睥睨している。

全高20m程度、翼長では50mを下るまい。体長では80mはあるだろうか。

その姿は全てを圧倒するかのように存在していた……！

全ての神よ、全ての悪魔よ、我は汝らの敵対者である……！！

それはまるで全ての存在ものに戦慄と断罪と鉄槌を下す、そんな意思に満ち満ちた力ある意思。

国を喪い流浪した民族から生まれた闇と執念と憎悪の結晶。

「そうか。貴様が殺した神は」

原初の悪、世界の卵、智慧を齎しもの、そして蛇。

「アザゼル！ 墮天使か……！！」

？ ・赤き蛇 / 03 ・蛇と砂漠と牛の神（後書き）

後書き：と言う訳で。神格を初披露……バレバレだった気もしますが。アザゼル事態はその内に。モレク、モラク、モラクス。色々ありますがまあ、基本は古い「牛」の神という事で。ソロモン72柱でもありますがバアル神族の方がメインだと思って頂ければ。

才華氏が倒したゼウスなんかが一番有名な口ですかね。牛は基本、蛇の次の流行りですから。

そしてアザゼル。いつてみれば翼の生えたオロチ系デザインなので。大きさの単位をどう差したらよいやら。アーシエラのは蛇だったので「全長」で良いがこっちは頭から尻尾ってどの頭からなのか、と。

いつそ、キングギドラみたいなスタイルだったら良いんでしょうが「脚」がないんですね、アザゼル…デスレックスヘッド死竜王辺りが一番デザインの参考になるというか。

尚、フルの変身バンクは今回だけで今後は省略バンクを使う事になるかと（マテ）。

モレクについても神格説明は粗方是で終わりですが。権能の際に後一回ある感じかな。

今回書いているのは史実だけなので「何故初子を生贄に捧げるようになったか」「何故それが王の力に転化するのか」「この辺りが権能の完全掌握する際に書く機会があると思います……何時だろう。」

是非とも批評、感想宜しくお願いします。

？ ・赤き蛇 / 04 ・蛇と巫女と権能と（前書き）

ようやくと戦闘終わり。次回で締め＆「本編キャラへの関係」が始まります。次はやや遅れるかと（GW頃？）……休みはまだか。

？・赤き蛇 / 04 ・蛇と巫女と権能と

旧約偽典エノク書は紀元前1〜2世紀頃に成立された、とされており当時は評価も高く偽典ではなかったらしい。預言者エノクにより与えられた啓示、という体裁をとった多くの文書の集成であり天使、悪魔、墮天使の記述が多い。

この中でグリゴリと呼ばれる墮天使の一群の長としてアザゼルは登場する。

エデンを追われた人の末裔すえを監視すべく遣わされた彼らはしかし、己が役目を放棄、人の娘を娶り神の智慧を教えた。

結果、人は悪行に耽り彼らの子、巨人ネフィリム『半天使』は地上の全てを貪り喰らい共食いに至った。

地上の平穩は喪われそれを憂いた神によって大洪水がおこされた。人は一組の夫婦を除いて消え、半天使ネフィリムは姿を消し、墮天使達ケリゴリは罰として審判の日まで地の底に幽閉される事となった。

「此処で大事なのは。墮天使アザゼルの神話における立ち位置だ」

アレクサンドル・ガスコインは勤勉な人間だと自任している。

最近生まれたばかりの後輩には『貧乏暇なしを地で言ってるだけじゃね？』等と突っ込まれた事も有るがそれは違う。魔王にして組織の総帥たる自分はそれに相応しき働きと振る舞いをせねばならない。それが彼の美学である。

街ごと破壊するような野蛮人や剣を振る以外何もしない男、中学生の妄念を持つ怪力女や世紀単位の引き籠り、扮装紛いの奇人、女に誑かされて尻尾を振る少年と違い、自分はスマートな美学とスタイルを堅持する人間なのだから！

「人にとって有意義な発明や発見を齎し、人間世界の文化的秩序の

設定に寄与したとされる存在。ギリシャ神話のプロメテウスがその有名な例か」

文化英雄。混乱を齎す者としての側面を持つ場合もあるが凡そは秩序の形成に大きく寄与する存在だ。その結果として彼らは己が身を犠牲とする事になる。

「ギリシャ神話のプロメテウスは人に『火』を与えた罰として山の頂に磔にされ赦されるまで毎日内臓をハゲワシに啄ばまれる事になった。北欧神話のロキは終末まで蛇の毒液が滴る洞窟に幽閉された。さて、何かに似ているな」

禁断の智慧を人に齎したが為にその罪を問われる存在。是が聖書では主客が逆転、神は唆した蛇に、それを『食べてしまった人の罪』が主題となる。

「このエピソードは創世記ではアダムとイヴが蛇に唆されて智慧の実を食べてしまった為に樂園を追い出されてしまった、という話になる。人に智慧を齎した優しき神が蛇＝悪の図式と成った訳だ」

この辺りは兄よりも寧ろ『女に晒され禁断の箱を開ける』という弟の役割の方が強いのだが。

半天使は割愛。物事は順序良く教えて行かねばならない。アザゼルの外観を語るにはもう一手別の視点からの説明が必要となる。

アザゼル。

七つの首に14の頭を備え12の翼を持つ竜にして世界蛇、炎の子とも呼ばれる墮天使。禁断の智慧を人に与えた故に地の底に幽閉されたグリゴリの長。

蛇でありながら地母神の系統よりもゾロアスター教の『この世全ての悪』の要素を持つ「基督教史観の悪竜」の始祖とも言うべき神

格。

アレクにとつてもレミエルがグリゴリ所屬の為、縁がない神格ではない。それを利用されたのは苦い思い出だ。

悪魔、魔王程度の認識しか持たない部下にいつもの講義をしたのは昨年、高松翼との抗争（という配下の暴走）が済んだ後だったか。魔術師は自分を『悪辣なひねくれ者』だの『性格の悪い魔王』だの言っているが美味い汁を吸おうと近寄ってくるだけの愚物は追いついて当然だし、偶然巻き込まれただけの一般人を助ける事も、部下にまつろわぬ神に関わる講義をするのもまた当然だ（アイスマンも最近では諦めて何も言わなくなってきている）。

故に現在イギリスで起きているまつろわぬ神の顕現。この一件に関して宿敵アリスと共闘するのは彼にとつて必然だった。

『まつろわぬ神』の顕現にしてもイギリス全土というのは広すぎる。かの姫と賢人議会の情報網を駆使して自分がめばしい所を当たっていく形にならざるを得ない。

体の良い使い走りになっている感は否めないが『王立工廠』が存在するコーンウォールでも被害がでている。地道に動くしかないだろう。

「此処も外れか。もう5か所だぞ」

第一の権能『ブラックライトニング電光石火』を解き、付近を見回す。ケアンゴームズ国立公園の緑が砂漠となつて砂が吹きすさぶ荒野となっている。これまでに向かったエクセターやストーノウエイ、ベルファストやニユーカッスルと同じ情景だ。

「砂漠。その上で魂を喰らう神というとなればそれに絞れはするがな。幾らか推測を頭に浮かべるが当の『まつろわぬ神』に出会えなければ意味がない。次の手掛かりを訊ねようか、そろそろ自力で動いてみようか、と思案しだした所で携帯に連絡が入る。画面を覗いてみると腹心の友から。

「アイスマン、一体どうした？」

「ああアレク、やっと繋がりましたか。賢人議会からの情報です。」

『まつろわぬ神』が顕現しました。スインドンです。現在、高松翼が応戦しています。同時に各地に眷属が出現。此方は現在、本拠地にて交戦中』

「なんだと？」

大都市は粗方アレク自ら最初に調べた。しかし手掛かりは見つからず宿敵アリスに情報提供を求めにいったのだが。何も無い所に異常が発生した？

「アイスマン、俺もすぐ向かう。保たせられるな？」

『下僕ごときなら私でも十分捌けますとも。貴方はどうされます？』

「神は翼に任せるさ。そちらには今向かう」

『了解しました。到着をお待ちしております』

電話を切ると権能を再度使い本拠地コインウォールに向かう。

今回はあの少年が当たりを引いたようだ。いや、恐らくは翼アザゼルに惹かれて顕現したと見るべきだろう。

骨折り損となったが仕方がない。最大の厄介事かみごころしはあちらが引き受けてくれるのならば自分は部下や本拠地アントを護る事に専念させて貰おう。

他の魔王なら権能や闘いを見逃す事はないが自分に見れば厄介事を引きつけてくれるならそれで良い。万一敗れたのなら改めて手の内の割れた相手と戦うだけだ。

もつとも。女に誑かされて良いように使われるように見えるが歴とした魔王カンピオーネ、自分と渡りあい手の内を盗んでいったのだ。まず負ける事はないだろう。

その程度にはアレクはあの少年の事を知っていたし買っていた。

カンピオーネ！〜赤き蛇の魔王！

？・赤き蛇／04・蛇と巫女と権能と

スインドンで対峙する二つの影。空に聳える鉄の城……もとい赤い竜と大地に構える溶鉱炉の胴体を持つ牛頭の巨人。

「神殺しよ！ 我が遠き同胞にして地縁を持つ、我らをまつろわそうと生まれた蛇よ。それが貴様の真の力か！」

モレクに構わず竜と化した翼は首の一つを向ける。

「アザゼル達……墮天使がヒトに伝えた禁断の智慧は多岐に渡る。魔術、天文学、化粧、薬学、文学……その中で人類の歴史そのものを大きく変えた知識がある。それは」

賢人議会が『混沌の多头蛇』と名付けた権能。その力はアザゼルへの『化身』と相對した権能、神力を頭部に模造し己が物として行使用する。

14の頭の内5つは其々、蛇の頭髪を生やした女性、牛頭、八角垂、頭頂部に角の様に輝く刃を生やした蛇、金属質な質感の鱗に変じた蛇に変わっている。

此処にたつた今、1つの首が牛頭になる。煉獄の権能を盗み模造した証。他者から奪いとり人の力と為すそれは

「武器だ！」

牛頭の双角が赤く輝き火炎放射。直撃するもモレクは平然と胴体から高熱を放ち続ける。

同質の権能では効果がないと接近戦に切り替える。翼と鱗を赤く灼かれながら高熱を意に介さず頭を向け手足に喰らいつき、翼を内臓に突き差さんと腹に向け突き出す。

モレクは筋骨隆々とした四肢で引き千切り翼を無視せんとらんと力を込める。

「喰いすぎだ。とつと吐きやがれ！」

「我が正当なる供物を使って何が悪い！」

「大有りだ不法占拠者！」

蛇と牛の力比べ。肉弾戦をしかけると同時に他の頭部からも『アザゼル』の火炎弾を撃ちだし、呑み込んだモノを吐きださせようと

尻尾^{クリンチ}打撃、腹部への打撃を繰り返す。

20m級の巨体が互いを喰い合わんともんどり打つ合間にもモレクが己が支配地として変えた砂漠の荒野が高熱の余波でガラス化していく。砂漠となつてゐる為周囲の被害こそないものの英国にあるまじき熱砂の死闘が演じられる。

互いに太陽や炎と縁深き神格、高熱に対して高い耐性を持つ為本人達にはなんら影響もない。

『本人達』には。

岩は熔け。蟲は焦げ。木々は枯れ。周囲を死の大地へと変えつつ怪獣同士の格闘戦は続く。

「あーくそ 『鋼』でもないのに金属の体を持つててかつ高熱に強いつてチートだろチート！」

一度体を離し、翼は空へ。モレクは大地で互いにて再び対峙。そのまま打ち合わせたかのように火炎の撃ち合う。

地と空から火線が伸び、空でぶつかる。暫くは拮抗するも徐々に空へと延びて行き翼に達すると爆発した。衝撃で墜落する翼。

「ふむ、やはり所詮は盗んだ付け焼刃。神殺しよ。所詮は真似に過ぎんな！」

先の警戒を解き勝ち誇るモレク。事実を見ればその通り。しかし翼は焦つていなかった。

盗み取った権能は基本的にその神格そのもの。火に火を当てて効果があるか？ 魔術的というなら魔力の質が違う為皆無ではないが同じ権能のぶつけ合いでは削り合いにしかない上、こちらが負ける。その上……

「あつちは自前の火力だけじゃなくて捧げさせた魂を燃料に使つてるのか」

胴体の溶鉱炉には昏睡状態の人間の魂がくべられているらしい。

流星は生贄の儀式を今に残す神。それを使って火力を増強しているならまず敵わないのは明白だ。その上、長引けば長引くほど犠牲者は増える訳で。

「どこの積尸気鬼蒼焰だ畜生。」

「あーもう面倒くさい」

一応こちらら出現地域：英国の王^{カンヒオーネ}なのだ。そうそう犠牲を容認できない。英国から子供が消えるまで時間稼ぎをする訳にもいかないし一気に畳みかけねば。

「では。そろそろ出番ですか？」

「メアリー、制御任せた」

「任せました。エリ エリ レマ サバクタニ 主よ 何故我を見捨て給う」

此方の思惑を悟ってか飛び乗ってきたメアリーに頭を一つ任せる。

俺と同調する事で疑似的に同化、神降ろしの要領で魔力制御を担当させる。俺と化身^{アザゼル}、メアリーの三位一体……日本の創作は裏世界で案外役に立つと言う笑えない話だ。

「主よ、真昼に我が呼べど御身は応え給わず。夜もまた沈黙のみ。されど御身は聖なる御方、イスラエルにて諸々の賛歌をうたわれしものなり」

彼女が詠うのは聖者の絶望の歌。神への賛美と渴望を込めた慟哭の禍歌。

「ふむ。何やら強大な術のようだがさせると思っな！」

「思ってねえよ、押し通す！ 我は叡智を盗む蛇。我は“復讐^{ジャッジ・オブユーリス}の女神”を盗み出さん！……さあ、報復しろ、三女神！」

こちらの詠唱を防ごうとするモレクに対して時間稼ぎに「復讐^{ジャッジ・オブユーリス}の女神^{アレク}」を発動させる。

。黒王子が保有する第二の権能で目の前で行われている破壊を全て加害者に叩き返す一種のカウンター。この場合、周囲の大地に齎された破壊の傷痕が全てモレクに打ち返される。

「ぬう！？ 復讐の三女神か！」

良く判るものだ。連中の脳内にはきつと

「説明しよう！」

とか

「知っているのかXX！」

とか

「パパに聞いた事が有る！」

とかいう脳内説明役が完備されているのだろう。モレクも防戦一方になり動きを止まった。この打撃が収まるまでは此方にちよっかいを出す余裕はない。

並の神なら是でケリがつくのだから辛うじてとは防いでいるモレクを褒めるべきかどれだけ魂喰い散らかしているんだと怒るべきか。かつて魔法について師事を乞うた。その際に

「素質は並より上程度かしら。魔力は多いからなによりはマシですけども」

こう腹黒姫に評された。10年、20年かければ大騎士級には至れるかもしれないが聖騎士級には人の一生を費やして漸く、との事。

クラス：魔王に転職したのは良いが魔王の特技は必要経験点が多すぎる。神や人は待つてくれない　ぶっちゃけ時間がないので、即戦力を求めた。

「我が骨は悉く外れ、我が心は蠟となり、身中に溶けり。御身は我を死の塵の内に捨て給う。狗共が我を取り囲み、悪を為す者の群が我を苛む」

話に聞く羅豪教主は王の魔力と卓越した魔術、武術で『まつろわぬ神』や王を圧倒するらしい。つまり王の魔力を魔術として行使すればそれは権能と同等の威力で戦い得るという事。

「我が力なる御方よ、我を助け給え、急ぎ給え。剣より我が魂魄を救い出し給え。獅子の牙より救い給え。野牛の角より救い給え」

「

しかし、自分にはそんな魔術は使えない。ならば、と翼が考案した有り余る魔力の活用法。

自分は動力源かつ砲弾を打ち出す砲身に徹して制御は他者にやって貰えば良い。人間を乗せられる巨体を持ち、共に歩む相棒がいるからこそその方法。

メアリの乗った首が真つすぐに伸び口を大きく開く。周囲から光が集まって行く様はまるでSFのビーム砲のようだ。

「こーいうのを見てると『是が真なる荷電粒子砲だ!』とか『波動砲発射用意!』とか言いたくなるねえ」

「正真正銘魔王様なんですから次からはなさつては? 止めませんので」

「真面目にやるとそれも寂しいよね……つと」

「いきます。』主よ、何故我を見捨てたもつ!」

メアリの言霊と共に蛇の口腔から吐き出される黒い光の奔流。迸るそれは古の聖者が死の間際に詠んだ叫び。常人ならば聞くだけで視力を喪い体の弱い者は倒れ、人々を呪い殺す死の言霊。

神にすら通ずる秘術。それをカンピオーネの魔力で撃ち放つ。人間どころかカンピオーネですらバラバラになるであろう反動も化身したこの身なら問題にならない。

人間の魔術師が使うものを大口径拳銃とするなら魔王の魔力で撃つそれは対戦車ライフル、化身した上でのそれは戦車の主砲だろうか。

常人どころかカンピオーネですらまともに喰らえば只では済まない死の言霊。

アザゼルの火炎放射、三女神の力場の打撃に加えての三属性の攻撃をも辛うじて防いでいる。

ほこられつつもこちらの攻撃の内容を見抜きに即座に対応、個別に焦熱結界で打撃を防ごうとするのは見事だが燃料を無駄にはさせない。

今の世界はエコで節電だ。貴様の様な無駄遣いはさせない。是で終わりで。

「重ねて! 我は『モレクの火』を盗み出さん!」

4つ目の頭が首をもたげる。先程程手に入れたばかりの牛頭の角が燃え上がるとモレクの動きが鈍った。

化身した後放った火炎放射ではない。勢いよく周囲から吸いこ

まれていた魂の流入が止り逆に外へと出て行く。

目に見えてモレクの火勢が弱まりアザゼルの火炎が女神の力場フィールドが、死の言霊が直撃をいれて行く。

「ぬ、馬鹿な。何故だ、何故この我が魂を操れん」

「同じ権能に同調させて妨害かけてるんだ。当然の結果だよ、是は」
神力の行使を妨害された状態で攻撃を喰らい辛うじて保っていた
均衡を崩されたのならいかにタフさを誇る「牛」の、それも大地の
神であれ無事では済まない。

燃やされ、叩かれ、殺されていき為す術も無くサンドバッグの様
に打撃を喰らうのみとなつて地に伏せる。

鈍色にびいろに輝いていた胴体部はベコベコに凹み、歪み、穴が空き、角
は折れ、四肢は砕け、もげ、全身から血が流れている。それでも尚
生きているのは流石というべきかもしれないが。

アザゼルの姿に化身せずとも権能の行使はできる。呪力の効率で
いえばそちらの方が遥かに消費を抑えられる。移動だけならまだし
も戦闘行動をとるにはそれなりにコストはかかる。

(それでも他の子と較べても格段に低燃費だけどね、と聞いた記憶
もあるが)

翼の権能は一柱アザゼルのみ。他は剣王サルパトールと黒王子アレク 対峙したカンピオ

ーネ から盗み取ったもの。

イソップ童話に「とりの王様えらび」という話がある。鳥の中で
一番美しいモノを王様にしよう。そう決まったものの鴉は己の黒い
羽根では選ばれない為、他の鳥の羽をつけて着飾るも風で吹き飛ん
でしまいほうほうの体で逃げ帰る。

本来の寓意は人の物を妬まず自分を磨こう。そういった意味合い
なのだろうが。その自分に十分な能力があつたなら？

人の物を盗み模造し行使する。権能の多様性と蛇体の戦闘力とで
神をまつろわす。旧約の民が古代神を纏め創り上げた世界蛇その物

とも言える権能。

複数の権能を一つの権能として負荷なく同時に行使する。

これこそが『混沌カオスの多頭蛇ヘッス』の最大の強み。黒王子アレクならば手間のかかる召喚も翼にとっては首一つ維持するだけで手間にもならない。人間体では一つずつしか行使できない権能を頭ごとに一つ保有、アザゼルを除き最大12個まで同時行使マルチタスク、同権能ぬすんだのぶつけ合いには劣るが権能その物への妨害。その能力こそが二人の先達カンレオーネを相手に生き残った一因。

一連の三攻撃が収まった。是で決まればよいがまつろわぬ神という代物はその油断を許さない。

案の定死に体で尚、魂を燃やし己を回復させようと試みている。が、それを許す程甘くはないし是以上の犠牲を許す気も無い。

そのまま勝負をつけるべく第5の力を起動させる。現在保有する最強の手札、全てを切り裂く魔剣の権能を。

「終わりだ！ 我は叡智を盗む蛇。我、盗みしは『切り裂く銀の腕』！」

叫ぶと同時に輝く剣を角の様に額から生やした頭部が大上段に振り下ろされる。

人間時のとは威力が違うその斬撃はブロックしようと試みたモレクの腕ごとあっさり両断。

「神殺しよ、貴様一体幾つ権能を盗み取った！」

「1・2・3 沢山！」

その一言を最後にモレクは真つ二つに両断される。割れた身体は砂と細かな金属片となり砕け塵となって消えていく。

「まさか貴様の様な若き神殺しに負けるとは思わなんだ！ 智慧持つ蛇の戦士よ！ 我が魂炉を喰らいて大地の支配者ドミニオンとなるが良い！ ああ、それほどに神殺しがいるのならば末世を正すべく奴が現れる！ 貴様の破滅もはやるうよ。ああ、我が雪辱を果たしたいがそれは敵うまいな。貴様。いや、高松翼よ、神殺しよ」

身が粉になり滅びつつも称賛と呪いの口上を述べつつ消滅してい

く。と同時に翼は体内にナニカが入ってきたかのような感觸を得た。アザゼルをかつて斃した時に近いソレは恐らく新しい権能を得た、という事だろう。同時に其れは完全にまつろわぬモレクが滅びたという証左でもある。

化身を解き、人の姿に戻ると思わず呟く。

「勝った、か。さて。どんだけこの子らに戻せるんだろね」

周囲には人魂のように魂が舞っている。手に入れた権能、胎の中にもモレクが取りこんだ魂がまだ残っている感觸がする。是をどうこうするだけの気力は流石に残っていないかった。

？・赤き蛇／04・蛇と巫女と権能と（後書き）

後書き：と言う訳で。権能のフル行使を初披露。バレバレだった気もしますが。アザゼル事態の解体は近いうちに物語上で行う為かなりおざなりです。説明で潰すわけにもいかないし『戦士』の権能欲しいなあ（ぼそ）。

そんな訳で二つ目ゲッツ。最近だと「デイスレヴ」というのが一番楽かも。ただ、ゴキトラナガンと違って「人間の魂を燃料にする」というのは実際にはかなり使いづらい。燃料どーやって調達すべ。

その実魂を燃やす、にはもう一つ意味があるのですが……いつ頃書けるかな。

ウルスラグナも何気に本編でロクに語られていないので分解してみたいんですが。この神を紐解こうとするとミトラ教と4巻で軽く流してたヘリオガバルス辺りに絡まんとあかんかったり。ミトラ系はヒツタイト辺りからローマ時代までだから相当に息が長い。バビロニア系と別の源流やから面倒くさい上、今じゃ弥勒教と弥勒菩薩、ゾロアスター位しか残ってない。

いや、宗教として生き残ってる時点で格別ではあるんだが。メタトロンやら習合の系譜を言いだしたらもうAK47並にわけわからぬだし。

そしてもひとつ。ウルスラグナを語ると言う事は護堂とガチる必要がある訳で。ドニヤアレクは既に「戦った」と記述をしている（そういう過去設定）があるしぶつかってもおかしくない立ち位置だから過去編で適当に挿入できるんですけどね。

アレクに冒頭で語らせている智慧の實に関してはバナナ型神話をググって下さい（マテ）。日本人だと「コノハナサクヤヒメとイシコリドメの話」で判るのかな？……筆者の廻りだと。家族は判らず。

祖父母の年代だとわかったという結果が。戦後世代だと神道に絡む
記紀神話を習ってないから。

またこの逸話を語るとこの姉妹の親をネタにして更に語りたくな
りますが省略（爆）。

というかプロメテウスの場合、「生命か智慧か」の問いで人間が
智慧を選んだ後に火を与えている、んですよね。彼の場合は「骨と
肉のどちらを選ばせるか」となっていますが。又、ギリシャ神話で
は「火」とされてますが火だけでなく、数、建築、気象、文字など
の知恵を伝えた、とされています。

要は「火」というのは智慧の象徴な訳で。在る意味カンピオーネ
というのは智慧と生命の実を両方持っているヒト、なんですよね。

更にどうでも良い余談だが。モレクの権能をアリスにかけると普
通に動けるんだよなあ、多分……。あり得ない仮定ではあるが。

？ ・赤き蛇／05 ・蛇と寵姫と日常と（前書き）

と言う訳でエンディングです。1巻終了相当になります。次回から「カンピオーネ！」に参戦予定。そしてアリスのお上品口調がや
りづれええ！？

? ・赤き蛇 / 05 ・蛇と寵姫と日常と

結論から言うと。助けられたのは半分だった。それを多いという
か少ないというかは分からないが。

戦闘時に燃やされた魂は既に次の輪廻に回ってしまっている為戻
しようがないとの事。キリスト教的に輪廻といって良いのかと問い
たいが

「異教の神だし実際に転生があるんだからしかたがないじゃないで
すか」

との事。救いは煉獄モレクを経た事で次の輪廻に回れた事だろうか。彼
らは冥府神への魂の仲介を司っている事が多い。

前世の汚れを浄化して新たな生を得てくれることを祈る……何せ、
5歳児以下の死亡等どう見ても賽の河原直行コースだからして。

カンピオーネ！〜赤き蛇の魔王〜

? ・赤き蛇 / 05 ・蛇と寵姫と日常と

「本日は晴天なり。世は須らく事も無しとはね」

そんな訳で倫敦市街。日本晴れ……ならぬ倫敦晴れ？ 珍しく雲
のない青空の下、街頭TVではニュース謎の砂漠化事件が流れてい
る。扱いとしてはミステリーサークルと同じみみたいだ。

と、いつても大概の それこそ一般人でも 人にはそれ
が『まつろわぬ神』の仕業だと判っているみたいだけれど。

こつとして見ると日本の隠蔽体質はどんなのかな、と思う。まあ、神様だから諦めると言われても困るしあれはあれで有りなんだろうが。

土曜一日で魂の操作は手伝ったが一日明けの今日はお役御免とばかりにほおりだされた。

「神様退治は終わったんだから魔王の御手を煩わせる事はありません。ゆつくりと逢瀬を楽しんでください……其れ位の御褒美はないとメアリーが拗ねるからしつかりご機嫌取って下さいね？」

との事。まあ、体に戻せる魂の操作は終わり後は情報操作とかの事後処理。

無機物を操作する、とか自然を操る、とかの権能持ちならともかくあれ以上翼がいても意味がないのは確かではあるのだが。

そんな権能があつたら破壊された街も楽に直せるのかな。そんな感慨に耽りつつ倫敦の町を歩く翼。

再度言うが権能が只の便利能力扱いの思考に関しては相変わらずである。

と、歩いていると何時もの屋台。ファーストフードというか……

「あ、おっちゃん。何時ものお願い」

「おう、ジャパニーズ。また来たか」

「うん、倫敦に来た時にはやっぱり食べないと来た気にならないんで初めて、倫敦に来た時からなんとなく恒例行事になっている。食べ歩き、というか俺の勝手な思い込み。『イギリスに来たらフィッシュアンドチップス』」。

イギリスでは色々とあり過ぎた所為もあつてか此処では是を買って食べないと落ち着かないのだ。二つ購入、焼き芋の様に新聞紙に包んでもらい近くの公園に。

是もまた高松翼の日常である。

メアリーに一つ手渡し自分の分をシャクシャクとF&Cを齧りつ

つ今回の事件について考える。

「しかしこー、何事もなかった様に済んでるけど。被害がなあ」
砂漠になった跡地の処理や遺族への対応。事件の間どれだけの子供が喰われたかと思うと気が重い。

「デートしているのに女の子以外の事を考えたら駄目ですよ？」

「イタイイタイっ！？ すいません。俺が悪かったから勘弁して下さいー！」

横から頬を掴って顔を自分の方に向かせる彼女メアリに謝り倒す。

「大丈夫ですよ」

不意に声色が代わる。此方を見る目は優しい色を湛えて。

「あそこに居る子供達が助かったのは翼あなたがモレクを斃したからです」
目の前でサッカーにふける子供達。元気なモノだ。

「アレクサンドル様だったらあの子たちは無事では済みませんでした」

実の所被害が少なかったのは最後の一幕、モレクの権能で魂を吸い出したのが大きい。あれがなければ1割残っているか否か程度だったそうだ。

精神ケアで動きまわっているそうだが夢の中で

『牛の悪魔に喰べられた』

『赤い竜がやってきて牛を斃した』

という記憶が残っていると。どう見てもトラウマ形成確定です。ありがとうございます。

「モレクにトドメをさす時、オールヘッズフルファイア全頭部一斉攻撃で魂ごと誘爆させた方が楽だったでしょう？」

確かにあの時のモレクは弾薬を満載した、というか燃料満載の『タンクローリーだっ！』状態だったからあそこで暴走させれば簡単に終えられた。

しかし其れだと満載された燃料たましいごと、という話な訳で。

「そりゃ、助けられるモノを助けられない理由もないしね」

無理なら切り捨てるが助けられるなら幼稚園バスは助けよう、そ

の程度の話だ。

戦隊をきどる気はないが無駄な犠牲は避けたい。

「大丈夫です。イギリスに王が^{カンヒオーネ}。赤い竜がいる。民を護っている。それで十分なんです」

「俺は『レッド・ドラゴン』とも『ペンドラゴン』とも別だけどな」

「どれも赤い竜です。へっぼこ猪將軍^{アーサー}との関係を捏造した歴代イングランド王よりもよっぽどマシですよ」

「うわ、凄い強弁。というかイギリス人としてその発言はどうなんだ」

「貴族なんてはこの子の玄孫程度の血縁でも縁にしますよ？ それに私、アーサリアンではないので」

あんな嫁の面倒も見れず仕事に夢中の積りで足をすくわれる駄目亭主なんてまっぴらごめんです。

アーサリアンが聞いたら喧嘩うってんのか、と思われる事間違いなしの金髪^{メアリー}美少女。

「いや、まあ否定はしないけどさ」

翼にとってアーサー王は史実の原文よりゲームや創作が先、『えくすかりばー』の持ち主ではない。

「だから。胸を張って下さい。王^{ロバート}が守ったモノと貴方^{ロバート}が護ってくれた私は此処に居ます」

そう言っ胸に飛び込んできた。条件反射で抱きとめると彼女の甘い匂いが鼻孔をくすぐり、温かな体温がじんわりと伝わってくる。

彼女の柔らかな体を存分に堪能、自分が護っているものは以上ない確かな証を全身で感じる。

周りからガサゴソという音と共に草陰から除く金色の髪なんて見えない。

「見に来て正解でした。此処まで進んでいるんですね」

なんて聞こえない。聞こえないと思ったら聞こえない。

「昼間でお外だということのとっても大胆……！」

赤く頬を染めている金髪美女なんて俺には見えない！

暫し抱擁を交わしていると不満げに此方を見上げる顔が映る。

「そこで。『ああ、俺も愛しているよ』とか言ってくれないんですね」

あの時みたいにと拗ねた口調で責める。

あんな大発言は一生涯分の勇気を全て使い切ったから後はチキンです。

自分の中で『世界三大恥ずかしい告白』に並べる恥ずかしさなのだ。二度とできないしたくない。

「もう……仕方がない人。私は貴方の巫女モウなんですから。持ち主としてちゃんと可愛がって下さいね？」

「善処します。というかどっちかというと俺が世話される側じゃない？」

民の願いを届ける巫女という意味合いでは。寧ろイギリスに棲みついた動物の世話係？

「つまり紐ですね。では内職で細々と旦那様を養いましょう」「嫌だそんな駄目にんげんー!？」

平穏な学生生活から公務員辺りに就職をするという俺の野望が！「いえ。それは絶対に叶わない夢想ですので諦めて下さい……所で

先程までの甘い声などどこかへ飛んでいったかのような冷たい声。例えるならば欧州の冬に吹きすさぶ極北の北風の如き絶対零度。

「其処の出歯亀おねえさま。仕事は終わったのですか？」

「あら、気がついてました？ 完璧に隠れていた筈なんですけど」

「ええ。御従姉様の気配は隠れてもわかります。その隠す気のない白々しい空気です」

「ふふ、メアリーったら立派になってしまっつて。ここ半年で魔女としてのかなりランクアップしたのね」

睨むメアリーを軽くいなすアリス。

何故だろう。二人の背後ににこやかに笑う九尾の狐とそれに立ち向かう蛇が浮かぶのは。

「そんな事だから婚期を延々と逃して嫁かず後家になるんです……」

ああ、そろそろ嫁けず後家でしたか？ イブを過ぎたクリスマスケーキなんて後は苺を付け替えても売れるか判らないから安売りするしかないというのに」

めありー の こうげき こうかは ばつぐんだ！

「メアリーが本当に容赦ありません！ …… 本当に半年前までは可愛い妹だったのに男で此処まで変わるとは」

例えも殆ど日本風になってますし。と嘆くアリス。確かに慣用表現も聖書引用が減った気はする。

「代替品の人形が人間になっただけ。人形のままかもしれないませんが、自分の全てを捧げる代わりに相手の一部を貰っただけです。

武器であり下僕であり。成り得るのならば地獄の道を共に歩む戦友に」

「其れを後推しした人間としては何も言えませんが。もう少し穏やかにお願いしますね？」

「大丈夫ですよ？ 今の所、イギリス賢人議会に反旗を翻す気も理由も必要性も有りませんから」

平然と叛逆の可能性を口にするのはどうかと思う。流石に口ははさまずには居られなかった。

「大丈夫じゃない？ アリスさんが影響力を保持している間はリベラルでしょ、賢人議会の体制も」

その後は正直、保障はできない。爺さん達は案外話せる人が多いのだがエリクソンのアラフォーはガチガチの融通が利かない人間で面倒くさい。

詰まる所、プリンセス・アリス白巫女姫を年長者として可愛がるでなく、過度に神聖視する連中はアレク黒王子との仲をやっかむ上、おれ翼にも一々煩い。

例えるなら少女漫画の学園物である取り巻きの暴走が近いだろうか。

そんなんだから結婚できないハイミスなのだ。

この一年、腹黒紳士達イギリスと付き合った上での翼の感想である。

「ところで高松翼様。新たに手に入れられた権能はどうですか？」
不意のアリスの問いかけ。知り合いではなく『王と賢人議会』としての問い。

「さて？ 昨日の様な魂の操作はできるけれど。あれはあくまで『
モレクモレク権能が集めた』からだし死霊魔術ネクロマンシーの真似はできないんじゃない？」

先日モレクを斃した事で手に入れた第二の権能。

火炎を操り生物の魂を贅として集める事で火力を上げる。

素の火力も（文字通り）高いがこのブーストを含めると手持ちの手札では『剣』よりも上。

最もそんなものをどうやって集めるんだという話だが。

高松翼は善良な一般人、悪逆非道の『王』として語られたくないのだ。

「恐らくはその煉獄の権能、モレクの火は『煉獄魂炉ゲヘナクリメイション』という名で正式に報告書があがるかと。魔王、高松翼の名と共に」

「うわあ、またすごい名前」

うん。『混沌の世界蛇カオスヘッズ』の時も思ったが寧ろ開き直った方が良いのか。漫画でも今どきないような魔王様な訳だし。

「御従姉様。翼の件に関してはまだ秘匿されているのでは？」

そんな現実逃避をしているとメアリーがアリスの発言に突っ込みを入れている。

メアリーが言うように自分は公的には一般人だ。ド二等と個人的な友誼を結んでいたり今こうして賢人議会と関係を持っているが『高松翼』は一般人である。

ただまあ。

「今回、魔王カンピオーネたる高松翼は二つ目の権能を手に入れました。むしろ存在は有名とあって良いほどに知られていますしそろそろ潮時でしょう」

賢人議会が王を隠しているという噂を建てられても困りますしと
のたまうアリスの言に納得する。

この半年、あれだけ暴れて半年も細かい個人情報隠し通せたと
言うべきだろう。

「そこは翼さんが現代の情報網にひっかからない移動手段を使用し
ていたからですけどね。日本の調査員も大分イギリス入りしていま
すしそろそろ御自宅の廻りでも動きを見せる筈です」

権能でイギリスまで直接向かい事が終われば日本に帰る。『高松
翼』は今、公的機関にとって日本にいるのだ。

魔術師でもない自分を“つばさ”という名前だけで辿る何て不可
能だろう……現地組織である日本以外は。

「正史編纂委員会……だっけ？ 日本の組織は」

「はい。私達やこちらの魔術結社と違い、ある氏族の運営する組織
です。その下、というか同格の家が3つあって緩やかな争いをして
います」

確認の問いに即座に返ってくるメアリーの返答。霊能力をもった
一族が主導権と縄張り争いをしつつ日本の霊的守護を担っている。
どこの陰陽師だと言いたい。

もっとも都市国家なんて物に縁がない翼としては『都市ごとの魔
術結社』等よりそちらの形式の方が思考が馴染みやすいのだが。

「しかし何でそんなに詳しいのさ」

「先代代の沙耶宮当主はこちらに留学していました。私達　　で
きたばかりの　賢人議会　とも親交がありましたから」

その当主、沙耶宮惟道とやらが帰国後、　正史編纂委員会　の創
立者となったそうなの。

正史編纂委員会　を創立したから主導権をとったのか主導権を
とったから創立したのか。どっち道それだけの手腕を持っている。

そしてそいつらがとうとう動き出した、と。

やれやれだ。

「んじゃそろそろ帰るよ。今からなら丁度学校に間に合うと思うし」
「はい、お気をつけて」

7時過ぎ、日は赤く沈んだ夕日となり倫敦は夜の帳を見せ、手に嵌めた腕時計の短針は4を指し示している。

あの後、お邪魔虫を追い返し（霊体なので逆に存在を掴みやすくなった）、再びメアリーと倫敦の街を散策。楽しんだ後、別れの時間がやってきた。

今から帰れば3時間は眠れるだろう、それだけ寝ればカンピオーネなら問題ない、そんな時間。

電話で言葉を交わし週末に直接語らう、そんな極有りふれた遠距離交際。その距離と方法は非常識極まりないが。

「明けの明星が輝く頃、一つの光が空へ飛んで行く。それが僕なんだ」

「翼、『アンヌ』は独逸語読みなので『アン』ですよ？ それに西に飛んで行ったらアメリカ大陸と太平洋を横断する事になりますけれど」

「うおう。最近はずつ込んでくれて嬉しいよ」

「勉強しましたから。貴方の色に染まっています？」

染まり過ぎている。まさか此処まで短期に吸収するとは思わなかったというか明らかに俺の渡していないネタまで知っているよね？ イギリスの貴族令嬢がそれで良いの？ と、DVDをセットで渡した高松翼は述懐するのであった 等と現実逃避をした後。

「さて！ それじゃ又会おう」

「はい。今度はプライベートで会いたいですね」

「仕事の後、とかばっかだったもんな……ああ、そうそう。また呼ぶのは良いけどさ」

「ええ、判ってます」

「神殺しは朝御飯の後で」

声を揃えて同じ言葉を話した後に。お互いに顔を見合わせて笑う。それを最後に夜空へ飛び去っていった。メアリーは東へと飛んで行った彼方を只見つめる。雷光が消えた後もずっと。

イギリスで起きた原因不明の幼児昏睡事件、それを引き起こしたまつろわぬ神の事件はこうして終わった。

是が魔王高松翼の第二の神殺しの顛末。
カンヒオーネ

「……不吉だわ。何かよくないことでも起きなければいいけど」

イギリスにて一つの別れが有った頃。そんな非科学的な事を万理谷祐理は呟いた。

身支度をしている際に唐突に櫛くが折れてしまったのだ。普通ならば気の所為として一蹴するであろう事も彼女の場合は違う。

万理谷祐理。関東は七尾神社に務めている『媛巫女』である。拜謁に向かう最中すれ違った数人の神職に頭を下げて挨拶をされる。祐理も会釈で返すがどちらの立場が上かは明らかだった。

この社では15の小娘に過ぎない万理谷祐理こそが最も格上の存在なのだ。

「やあ媛巫女、お初にお目にかかります。少しお話をさせて頂けますか？」

不意に声をかけられた。声のする方を見やると安物の背広を着込んだ20後半に見える胡散臭い男が向かってくる。敬語を使うもまるで敬意は感じられず、道化じみた男。革靴で玉砂利を踏んでいるのに足音一つ感じさせない事が彼の實力を示していた。

「私、甘粕冬馬と言いました正史編纂委員会の者です」

是は。高松翼が日本で騒動に巻き込まれる序章。プロローグその事を知る者は未だ誰もいなかった。

? ・赤き蛇 / 05 ・蛇と寵姫と日常と（後書き）

後書き：と、言う訳で第一話終了です。詰まる所「こんなオリ主（&ヒロインなんだ）！」神様1柱めつ殺して説明しているだけにすぎないという。レギュラー勢との本格的な絡み、「カンピオーネ」は次回からです。

最後の台詞は電撃文庫の「世界平和は家族団欒の後で」のオマージユといふかなんというか。んで、ラストは1巻から。

尚、現在時刻は3巻開始前（3月初頭）程度を想定しています。

初めにいっておく！ 私がアザゼルの外見を具体的にイメージしたのは妖魔夜行『戦慄のミレニウム』の青木邦夫氏のイラスト。

決して「読んでますよ」の絵ではない……いや、今アザゼルとピクシヴで検索かけると殆どあっちになって……ちくしょう、俺の中のアザゼルを返せ!?

以下オリキャラ勢の軽い解説と作成時の思考。というか本気でどうでも良い駄文なのでスルーするかたはスルーして下さい。

・高松翼 / 分類：

界：二次創作界

門：オリ主門

綱：本編混入綱

目：非トリツパー型

亜目：原作知識未所持亜目

基本、護堂に色々突っ込ませる／対比させる為のキャラとも言つ。権能の構造としては

「竜＝蛇＝大地母神」

という本来の神話（寧ろ原典）的な構図が有るカンピオーネ世界に

「竜＝神への叛逆者／同等の力を持つ種族」

という中世以降やD&Dやフォーセリアの現代ファンタジー的な日本漫画世界の…「ドラゴン」を持ちこみたいと思つた……良いじゃんか。好きなんだよ。竜戦士とか竜機神とか聖竜騎士とか雷竜体系とか黄金神。という私の心の結晶。

公式の9巻を見るともう物語の集束に向けて行つてるしで一神教系は出てこないだろう、という確信もあつたのだが。

私が色んな意味で「アザゼル」という神格が好きというか色々と拘りがあるからというのも有る。能力を決めて行つたら自分好みになつたのは否定しない。

尚、初期構想時は防御膜を展開して攻撃を吸収、模造。コピー権能数に制限はなくアミノヌボコ（丁度9巻で出て来た天之逆鋒？）やマルドゥークではなくエア、伏儀の様な「混沌をかき回して世界を創世した」神格以外の攻撃は吸収というそれ何て「ぼくのかんがえたさいきょうのかんぴおーね」状態だつた……というか。ARM S神卵つてどんだけチートなんだという話。

結果的に神話を整理して「火の寓話（智慧／盗掘）」と「化身」に纏めた結果が本編。

プロメテウス秘笈や天叢雲剣という例からトリックスター、智慧の寓話を持つ神格は相手の能力を盗む／模写するという設定が見て取れた為。

「ぼんぼん権能増やすのみな」「けど、一個だけだとワンパターンだよな」と複数の権能を一つで使え（かつ、コピーの為、今までの公式キャラのを説明なく使える）という理由でああなったとも言える。

尚、個人的にはこの「盗んで（覚えて）再現する」という権能はヒノカグツチ辺りを推したい。

あれは「火の起源／死の起源／鍛鉄の起源」やハイヌヴェレ型だと言えなれば「刀剣の製造過程」「赤く焼けた鋼」だからして。

尚、現状「化身」「盗掘」までは掌握しているが後一つ掌握し有り。本編に近いネタだと持ってきてきやすくして楽ではある。

作者的には是で権能は是で十分、かな。現状の「カンピオーネ！（対グイネヴィア一党、『最強の鋼』）」を乗り切るなら理想を言うなら最低二つ、絞れと言うなら1つ欲しい。この一つもまた墮天使なんで『墮天使コンボなんてなんて中二』と言いたくなるが。

更にどうでも良い余談だが。現状『スーパーカンピオーネ（コラボ）大戦』が起きてても絶対にヒロインと立ち位置が被らない男だったりする。

・メアリー＝ルイズ＝オヴ＝ナヴァール／公式キャラの親類。パターンその2

「王の巫女」「地獄の道歩く相棒」「不幸と闘う」等役割は多々あれど。拙作上でのメイン役割は「竜の宝」。話の構造上は「魔術師としての説明／折衝役」兼ヒロイン。

当初は護堂ヒロインズから調達する予定……というか恵那辺りなら良いかと思っていたがどう見ても「三種の神器コンボ」だし

「ああ、こら欠け（掠奪し）たらあかんわ」

と挫折した（投げた）為に急遽誕生したヒロイン。私自身が「本編に差し障りなく詰め込みたい」という思考も有ったからだが。

名前の出所は境ホラの金髪巨乳と思いきや（それも有るが）人造人間物語作者から。

リリイ（リリウム）という名が既に居る為、というのも有る。因みに当初の案は「フランススカ」だった。はい、BFFです。

と、というか。イギリス人の名前が少なすぎるんじゃない？ ヘンリー8世なんて6人の嫁の半分がキャサリンで二人アンだし！ 今回最後のは「ウルトラセブン」ラスト、パンドン戦と名前にかけて自己満足である。

護堂嫁の四人の要素にアリスの従姉妹（妹）という「優秀な親類の為存在意義を見いだせない」という味を加えた継接令嬢ヒロイン。これはその実、護堂嫁四人全員に通ずるネタだったりするが。

此方もやはり『護堂嫁に問題を提起させる為の存在』だったり。

現状スペック、というかもし公式にでてきたならエリカが乱れ撃ちをつけた魔法剣士とするとメアリーは赤魔導士（れんぞくま未収得）。より正確にはFFTのアグリアス（ネームド）と一般キャラ。素質でいうなら『魔女』で神降ろしの素質もあるし霊視もできるが『平べった』い。

素質が有り過ぎて体に悪影響がでたり素質は全てであるが器用貧乏だったりと今代のナヴァール家は極端である。

赤き蛇くでは魔女の素質とPLユニット（チート要素）によって暗黒騎士になれば無双&和マンチ魔改造が入る。

本編の魔力リンク。是はぶっちゃけ、型月世界であるようなもの。まあ、カンピオーネ属性の魔力を使える範囲で行使できるという

……是だけで鬼っちゃ鬼なのだが。

ゴーレムと鎖に関してはその内詳しく本編で。どっちもネタは振っているの判る人は突っ込んで頂けると嬉しいです。ゴーレムはともかく鎖はアレ本来は国宝なんで恐らく持ちだせなかつたり。

? / 01 忍者と巫女と報告書(前書き)

と、言う訳で二巻(相当の新章)スタートです。宜しくお願います。

どうでもいいけど大学に入ったら「じょうなんだいがく」。本郷って名前の人がOBにいそう!(字が違う)。

以下、帯に書いてある(風の)登場人物説明

後、名前の繋ぎを今回より“||”から“・”に変更。というか訂正。

・高松翼

城楠学園高等部一年生、墮天使アザゼルの権能を有するカンピオ
ーネ。

・メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァール

賢人議会 の『魔女』

通称、『王の寵姫』

・万理谷祐理

霊視の力を持つ媛巫女。

・甘粕冬馬

正史編纂委員会 のエージェント

? / 01 ・忍者と巫女と報告書

【二十一世紀初頭、新たにカンピオーネと確認された日本人についての報告書より抜粋】

アザゼルは旧約偽典に登場する墮天使でグリゴリと呼ばれる天使達のグループの長とされています。「神の如き強者」という意味のヘブライ語に由来し7首14頭12翼を持つ竜ないし、山羊の角を生やした牧神の姿で描かれます。

かの墮天使はアダムに仕えるのを善しとせず追放されたとされ、また別の話では人の子を監視する天使の一群のリーダーだったが人の娘と交わり、神の智慧を与え、彼らとの混血として巨人ネフィリムを生まれ、世に混乱の種を蒔いた為に荒野の穴に放り込まれ、石を置かれたともされます。

後にこれらを地上から消し去る為大洪水を起こす一因となったとも。

また、『アザゼルの山羊』という故事の通り、現代における生贄スケープの山羊ゴートという単語の由来でもあり、かの教えの『贖いの聖者』の原点とも言われます。

ゾロアスター教にて世界の悪を担うとされたミスラ神の盟友アールマンの要素を受け継ぎ『絶対者の為の悪』を担い、後にルシフェルや黙示録の竜、魔王サタンを誕生させるに至ります。

他にも特筆点はありませんが。幾多の古代神話を統合して誕生した7つの首と14の頭で世界の創世を昼夜問わず見護り、世界を12の翼で飛翔する「智慧を人に与え、人の罪を背負った世界蛇」。

彼はこの始原の獣神を殺害し王となった少年なのです。

【グリニッジの賢人議会により作成された、高松翼についての報告書より抜粋】

高松翼がアザゼルから篡奪した権能『混沌の世界蛇（Chaos Head's）』はかの墮天使の出自に由来する権能とされる。

彼が斃した神はまだ一柱のみに関わらず『右手を輝く剣に変え大地を切り裂いた』、『雷に身を変え目にも止まらぬ速度で動いた』、『7首14頭12翼の竜に変身した』等の報告が上がっている事等詳細については判明していない。

恐らくJ・P・スミスの『メタモルフォーゼ超変身』のように複数の能力を持つ権能、ないし既に複数の神格を斃しているであろうと推測されている。未確認だがサルバトーレ卿と互角に戦ったとの報告も上がっており、また我々^{ブラックプリンス}が知るように黒王子との戦いの経緯からもこの説の実証性は高い。

尚、高松翼は現在、魔術・呪術を急速な勢いで学んでいる。未確認だが剣技は既に大騎士に匹敵するとの情報もある。

これがカンピオーネとしての権能なのか彼自身の資質なのかは不明だが、既に彼も魔術師に対して絶対的な力を保有する事は間違いない。若くして絶対的な権威を持つであろう事は確実であろう。

【以下、関係者のみ閲覧可能】

尚、彼には現在メアリー・ルイズ・オブ・ナヴァールが傍に侍っており「王の寵姫」と呼ばれている。是により賢人議会は彼に対し比較的容易く要請を通す事が可能だ。

だが、忘れてはいけない。

彼は神殺しであり、不興を買えばその力を向けることに躊躇いは

ない。

かつて黒王子アレクと戦った際『避けて当たらないから』とコーンウォール全域に対して攻撃を加えようとした事は関係者の間では記憶に新しいだろう。

また『7姉妹か。6姉妹にするのも一興か』と言う発言が冗談でも脅しでもなく選択肢に上げていた事を此処に書き加えておきたい。彼は人間に対して怒りを抱く事のできる王である。力の行使に躊躇いのない暴君である。自らに不幸を齎すモノを消滅させるまで手を緩める事がなく、赦し、という寛容さを持たぬヒトである。

重ねて言わせていただく。彼は確かに首輪を受け入れている。だがそれはいつでも解き放てる不安定な物に過ぎないという事を。

かの姫は首輪ではなく彼に捧げられた供物であり彼に仕える巫女である事を。

もし彼の宝物に、彼の棲処メアリーに手を出すものがあれば彼は埒でのまどろみを止め愚か者を悉くこの地上から消しさるであろう事を。

カンピオーネー！〜赤き蛇の魔王！

？・妖魔夜行 / 01・忍者と巫女と報告書

『我が国に未曾有の災厄となりかねない火種がある』

そう言われて目の前の男に渡された書類。恐らくはグリニッジの賢人議会の写しであろうソレは万理谷祐理を慄かせるに十分だった。目の前が真っ暗になるかのような感覚を覚える。

「まさか日本にカンピオーネ、忌むべき羅刹王の化身が誕生するなんて……！」

祐理の脳裏に浮かぶのはエメラルドの双眸を爛々と光らせた老人。

今尚、恐怖と共に思い出す東欧の狼王。

「あなたを選んだ理由の一つが、もうおわかりですね？ ヴォパン侯爵に幼い頃遭遇した経験をお持ちの貴方なら真贋の鑑定も容易い筈だ。最も、此方は必要ないかもしれませんが」

溜息と共に甘粕は言葉を続ける。かの魔王についての経緯を。

「ええ、我々も今まで掴めていませんでした。その報告書の存在を掴んだのはつい最近です」

この書類は賢人議会に保管されていたものでつい最近、彼甘粕冬馬が所属する正史編纂委員会が入手したもの。

それまでは『在る』事は判っていたが『誰か』は厳重に秘匿されていた。

最近、具体的にはここ数日前に機密レベルが下がったのか閲覧が可能になったのである。

「信じられません。只人が王となるには神を殺める必要があるのですよ？ そんな奇跡を起こせる人間がこの国にいたなんて！」

「正確には半年前には確認され報告書も上がっていたようです。機密資料と言え明らかに流されたものでしょうね」

魔王の位階に上がる。そのような偉業を為すには奇跡どころでは足りない。にも拘わらず甘粕は既に確定事項として扱っている。

普通なら疑ってかかるのに何故落ちついているのか？

「その人物が王だと言つのなら。何故正史編纂委員会は気づかなかつたのですか？」

カンピオーネと言えど人間だ。現代の情報化社会で証拠を残さず動くなど不可能に近い。万理谷祐理、というより万理谷家は欧州との付き合いはそれなりに深い。渡航経験もあるからこそ何故判らないかを不審がってしまう。

パスポートや渡航履歴。記録に残らない筈がない。

「それがですね。この御仁、どうも権能に長距離移動の類があるようでした。直接向かっているようなんですよ」

大ぶりの仕草で肩を竦める。

「件の王様、高松翼がカンピオーネになったのは今年の夏だそうですが。この際、7月末　　夏休み初頭ですな　　に一週間の筈の旅行の日程の筈が夏休み一杯あちらに滞在しているんですよ。是は昨年、英国で起きた　賢人議会　と　王立工廠　の間で起きた騒動の始まりと一致します。あちらに彼の両親が赴任しているしそう不自然ではなかったので気にも止めませんでした」

彼の二学期からの就学状況を調べると休んだ日と騒動がほぼ一致するとの事。

逆に言うと正史編纂委員会は『彼が魔王である』という事実を以て初めてその存在に気づいたと言える。

「RPGの転移呪文宜しく移動できる方なんて直接見張るしかありませんが。それで不興をかう訳にも行きませんしねエ」

向かう先もナヴァール家の邸宅。どっち道下手に干渉どころか見張る訳にも行かなかった。正史編纂委員会としてはここ数日、下手に動いて敵に回す愚も冒せず躊躇していたのだ。

先日のイギリスでの事件が『まつろわぬ神』の仕業である事は確認がとれている。解決したのが英国の二人の『王』である事も。

その後賢人議会に提出された報告書には『高松翼』の名と彼がモレクから新たな権能を手に入れた事まで書かれていた。

「つまりは。公開した所で問題がなくなつたからという事でしょうねえ」

英国は彼を完全に味方として取り込んだ、そう正史編纂委員会は判断している。だからこそ名前を公開したのだと。

件の書類を読む限りでは敵と認識された場合の危険性を半信半疑として考えるにしろ警戒するにこしたことはない。接触は慎重に行う必要があった。

「所で、何故イギリスで旧約の墮天使と戦う事になったのでしょうか？　場違いとは言いませんが不自然な印象を受けるのですが？」

巫女として神話に關してはある程度は諳んじているが。旧約のそれも偽典に出てくる墮天使までには明るくないらしい。

「それに関してはチエンバレンかチャーチル、ジョージ6世辺りの方々に文句を言うべきですかね。あそこは何時もの腹黒外交でイスラエルの建国支援を約束しつつ原住勢力とも同じような二枚舌外交をしてまして。今の中東問題はかの国が原因の一端だと言えますから。それにイギリスにはかのロスチャイルド家もいますしそう変な出現地域とは言えませんよ」

そも旧約といえ聖書。欧州全域から中東、新大陸まで。ヘブライ神群は何処に出てもおかしくないのだ。

そんな結論で纏められた説明を聞きつつ書類を捲っていると賢人議会の『魔王』としての資料から高松翼個人の調査報告書に続いていく。

正史編纂委員会が調べたのだろうそれには彼の個人情報、経歴が書き記されていた。

「呪術を修めている訳でも武芸の心得をお持ちの訳ではないようですね。このような方が神殺しを為されたのですか」

「特に其処らを修めている訳ではありません。強いて言うと野外活動に秀でていて一般人よりも歴史や神話に詳しい点は特筆できますが……ただまあ、神殺しに下手な武術や呪術がどれだけ意味を為すか、という話でもありますがね。媛巫女。貴女、神に立ち向かう事が出来ますか？」

投げやりな意見ではあるが最もだった。如何に剣術を。魔術を究めようと『神』と『王』には敵わない。

その厳然たるこの世の理を覆し奇跡を起こすからこそ彼らは王として畏敬を受けるのだから。

説明を聞きながら書類を捲っていくと金髪の女性の写真が挟み込まれていた。

「所で甘粕さん。この書類に書いてある女性の方は？」

やや色の薄い、豪奢なプラチナブロンドは背中まで緩く波打っており碧眼は柔らかな眼差しをしている。年齢は恐らくは自分と同じか少し上か。

見るからに高貴な家の出だと判る品の良さが写真ごしにも滲み出ている。

『絵に描いたような貴族令嬢』、祐理の語彙からは是以外の単語は出てなかった。

「ああ、彼女はメアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァール。媛巫女には『白き巫女姫の従妹』と言った方がわかりやすいですかね。その報告書に書いてある『王の寵姫』
要するに賢人議会が宛がった愛人ですな」

あいじん【愛人】

？愛する人。恋人

？「情婦・情夫」のえんきよくな表現。

「恐らくは初めに遭遇した 賢人議会 が彼女をあてがったのですな。かの貴人の親類ならば絆を深めるにももってこいでしょう。詳しい事実関係は調査中ですが」

「そ、そんな理由で愛人に！？ ふ、不潔です！ 不道德です！ そんなのまちがってます！ 魔王の力をいいことに、女性を自由にするなんて！ 許せません！」

「自由かどうかはさておくとしまして。続きを宜しいですか？」
恐怖を義憤で塗りつぶす事で薄れさせると甘粕に現実に取り戻された。

「そう言えば、私に事を委ねる理由があるとおっしゃいましたよね。教えていただけませんか」

「ああ、もちろん。完全に偶然だったのですがね」

「では、そういう事で宜しく願います」

「はい。この様な暴君を認めるわけにはいきません。お任せ下さい」

「まあ、彼女が首輪として機能しているかは微妙な所ですがねえ。では媛巫女。宜しく願います」

話を終え立ち去る間際の、そんな呟きも義憤にかられた祐理の耳には入っていない。まあ、良いかとその場を立ち去る。

神社の階段を降りつつ頭に浮かぶ疑念を改めて考えてみる。

関係者以外閲覧禁止と有る割にあっさりと入手できた部分。寧ろ日本への警告のようにも見える文面。

読むだけで読みとれる癩癩持ち、そして意に沿わない事を絶対にしそうにないという気難しそうな面構え。どちらもカンピオーネとして見るなら珍しい事でもないが。

メアリー・ナヴァールもかの姫君の影に隠れ印象は薄かった。

かの惨劇を万理谷祐理共々生き延びたという点では素質は有るのだろうが欧州での知名度は低い。むしろ今までは知名度はないと言つて良い。

正直なところ何故、賢人議会の依頼を受諾していたのか。存在を隠していたのか。其れも含めて直接接触してみよう、というのが彼の上司の考えだった。

「そも、この書類がでた時点で『英国の王様！』と主張しているよ。うなものですからねえ。事実上の既成事実。まったく汚いですよ。さすが英国は汚い」

臣従してこそいないが彼の直臣に 賢人議会 の姫君が侍っているのだ。欧州では名が知られていないだけで存在は既に知れ渡っている。既に入り込む隙間があるのやら。

「折角の日本の王様だというのに。知らない間に生まれて知らない内に取りられてた、なんて笑えない冗談ですよねえ」

他の四家や有力な家々の行動、その際の鎮圧に自分が駆り出される事を考えると頭が痛い。

今後の仕事を考えると嫌な想像しかできなかつた。

城楠学院高等部。中等部から大学まである所謂エスカレーター式の進学校であり人によつては10年間を過ごす学び舎。

魔王カンピオーネたる高松翼も普段は此処に通う高校生である。憂鬱な期末試験も終わり後は春休みを待つばかりといった気楽な毎日。

久々に私室…もとい部室に顔を出そうと放課後足を向けていた。所属は歴史部。祖父を倣つて将来そちらの道に進む為だった。

もつとも、職業：魔王の今現在その夢は絶賛迷走中だが。解錠しドアを開くと現れたのは黒い三連星、もとい。

「先輩！先週金曜発売の『大後悔』のインストールを終えました。さあ、やりこみプレイを始めましょう！」

「それよりも深夜放送の『魔砲少女ウロボチ ほむら』の上映会を！」

「いや、今年の学園祭に向けての『猫耳スク水メイド喫茶計画』の進展を！我らの思想を学園祭にて広めるべきです！」

「……一応、此処は歴史部だと判っているのか？序にお前ら歴史部員じゃないだろ。後、お前ら進学は確定できたのか？」

「何を仰られるかと思えば。去年の学園祭で『萌えと擬人化の歴史』女神イシユタルさんから美少女戦艦ヤマトまで」を発表された方の台詞とは思えません」

「そう。『擬人化？萌え？そんなもの、6000年前に人類は通過している！』と中国人^{れつかいおう}武術家の等身大イラストを入口に配置した上で惑星や動物の擬人化、船舶が女性格である事、タイガー戦車の取説まで含めて説明するとはこの高木、感動しました！」

「そう、妹萌えとは人類共通の夢だったんだ！」
「反町、兄妹の近親相姦は神話と古代王朝位で今では完全無欠に違法だからな」

「そして万事抜き有りません。我ら既に進級の内部試験はクリア済、期末試験も問題なしです」

「聞けよ人の話」

部室から飛びだし一方的な主張を繰り広げる中等部の三人組。

巫女属性にして扇動家アシテーターの素質に富む名波。

義妹萌えにして『二次元に108人の妹がいる男』反町。

剣道部で体育会系の筈が萌えの魔道に足を踏み入れてしまった男、高木。

通称三バカ。尚、この呼称は学園全体に広まっている名称である。女子生徒からの冷たい視線を受け。男共も笑いつつその欲望に消せない憧れを向けるこの学園の名物。

どこの学校もこの手のゲームやTRPGを行う面子の溜まり場は決まっている。文芸部、鉄道部、そして歴史部だ。

この三人、部にこそ所属していない物の昨年、翼が歴史部で出した発表物を見ていらい先輩と慕い部に入り浸っているのである。

……幽霊部員ばかりだが伝統は有る為廃部にもできず。結果として翼の私室と化していたから好き勝手できたという事情もあるのだが。

「メイド喫茶も悪くはないが。今年は『英国正統女中譚・小間使いエイミー』をネタに実際のメイドとゲーム上で語られるメイドの『記号』について書くこうかと思ってる」

幸いというか何と言うか。リアルで本職なメイドを見る機会が増えた為、一度考察してみようと思いついたのだ。

メアリー付のヒルデガルド 通称ヒルダ さん等は何と

言うか年上のやさしいできる女性！ といった感じで思わず身惚れたのは秘密だ。

横からのにこやかな、しかし絶対零度の視線に気がついて思わず謝った……というかその後の悲しみに沈んだ顔を見て罪悪感が湧いた。

「なるほど。メイドについてのより深き思索に耽ろうというのですね」

「ま、それはさておき。折角だから『大後悔』プレイでもしよるか。

高木、TASの準備は？」

「は、万全であります！」

「名波。グラフィックとイベントシーンのぶっこ抜きはできたか？」

「は、先程既に」

「宜しい、ならば攻略だ」

この時。高松翼はなんだかんだ言っただけで日常を謳歌していた。新たな魔王としての事変が待っている事にも気づかずに。

そう。嵐を前にして。未だ彼自身は平和の真ただ中に居た。

学校からの帰り道。翼は赤羽の自宅まで自転車を走らせていた。学園から家までは凡そ半時間。

電車を使うのなら京浜東北線で赤羽から西日暮里まで乗ってから千代田線に乗り換えて根津で降りるのだが、千代田線の区間をまず歩くようになり。やがて電車事態を利用しなくなった。

時間としては大して変わらないし駅から歩く時間を考えると寧ろ早い。雨の日はそももいかないが。

最近雷化なら瞬く間につけるな、等と思いつつ『流石にそれは横着しすぎだろ』という脳内の常識の声はその決断を押しとどめている。

尚、この決意がいつまで持つかは定かではない。

『一度切っ掛けがあればそちらにあっさり転ぶと思いますよ？』というのが我が愛しき姫君の意見だがはてさて。

そんな事を考えていると自宅が目の前に見えて来た。ペダルを漕ぐ足を止め慣性そのまま進む。

自転車から降りて曳いて行くと玄関の前に誰かが佇んでいるのが見えた。

白いシャツにベージュのブレザーを着込んだ
見覚えがないが 女子……中学生だろうか。

あんな制服は

長く伸びた黒髪は艶やかで大和撫子風の顔立ちに良く似合っている。

詰まる所黒髪ロングヘア美少女だ（配点：日々の役得）。

スカウターによると戦闘力は77・52・85……否、スカウターに誤差発生！

着痩せするタイプと推測。実戦闘力は現状測定不能。早急に正確な数値の測定を要す。

訂正、和の真髓。黒髪巨乳ロングヘア美少女だ。

カンピオーネアイは透視力、もとい元から保有していたスカウターの性能が上昇している為の判断。

今の高松翼は例えダツフルコートを着込んでいても容易に戦闘力の割り出しが可能……！！

視線を全身に捉えたまま改めて精査開始、肩に竹刀でも入りそうな細長い袋をかけていゼル不意に全身が戦意に包まれる。否、権能アザが敵意を剥き出しにしている。

何時もの神と、宿敵と戦う際の臨戦態勢とは違う。恐らくはある種の近親憎悪。

あれは敵だと。

不倶戴天の怨敵だと！

ええい、鎮まれ、鎮まるんだ、俺の権能

！！！！

「高松翼さまですね？ はじめまして、清秋院恵那と申します」

? / 01 ・忍者と巫女と報告書（後書き）

後書き：と言う訳で「日本（レギュラー勢）との接触開始」の巻。

定番の正史編纂委員会、というか祐理と甘粕と思いきやいきなり恵那が動いてますが是には歴とした理由が有ります。そちらはその内に。

何処まで原作ルートを崩すやら。実はも一つ先取りできる因子があるっちゃあるんですよ。

護堂は飛行機やら何やらで確認できますが1時間もかからず地球を一周できる人間は飛行機なんぞ使わない、という話。アザゼルの飛行でも「巡航」ならば3時間かからないので。どこぞの羅豪教主辺りもこの類。

この権能の持主であるアレク自身は割と公共機関を利用していますが。此処は社会的な認識の差だと思っただければ……あれ？翼、アレクよりも傍若無人？

尚、この「カンピオーネ、神を殺せる」という祐理と甘粕の定番のやりとりはちと変えてみました。逆に半年も色々暴れた上で確定事項として流されたら疑問を持ちようがないと思うのですよ。

後、他の諸兄のオリピオーネよりうちの翼はぶっちゃけ、『暴君』の色が強くなります。正確には祐理がかなり割を食らうかと。前回とりあえず“はいはい”と依頼を受けていた状況ですので人格その他はこの話で出すことに。

そしてやはりウチでも三バカ登場。こいつら原作からして明らかに日常パート要員なんで使いやすい。

6月に10巻が出る、というかVSアレクがメインになるんだろぅなあ……此処（英国）と繋がりが深いんで様子見したいがそこま

で書き進めてないのでまあ、ボチボチと。情報が変わったら改訂するところもあるかもしれませんが（まずないとは思いますが）。

基本2週に1話ペースだから2-3に手が届くかどうかだし（爆）。

そして。オーズをモデルにタイトルを設定していたのだが。ふとカンピオーネSSを見返すと三毛猫ヤマト氏の『極東の天災の魔王』と命名方式が同じで愕然。パクった気はなかったのだがどこか印象に残っていたのかもしれない。

三題嚙ではないが話の内容を簡潔に乗つけられるので重宝していたのだが。

余談：通学時間は自分が自転車を使った場合の凡その時間。カンピは国内だと何気に具体的な交通描写が多い。祐理の通学路しかり。草薙家、というか根津の情景描写しかり。

余談その2：Maryの相性はPoly、ないしMayだったりする訳だが。日本人的には今一納得できなかつたり。まあ、日本人の愛称のつけ方も外国人からするとさっぱりなんだろうが。

そも日本人だとスペルだけだと「マリー」と呼びそうなんだよね。ヒアリングから入ったからそれは無いだろうが。

余談その3：今書いていてふと気がついたが。恵那のヴィジュアルって東鳩の来栖川妹だよな。

? / 02 ・蛇と刀と幽世と（前書き）

ふと思った事。幽世の仕組みってマンキンのグレートスピリット
じゃね？（爆）。

そして大迷宮が書いていて殆ど固有結界やナイトウィザードの月
匣扱いになっていた（遠い目）

「あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！」

『俺は家に帰ったと思ったら何時の間にか端女と自称する女の子が現れた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが、

俺も何をされたのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうだった……彼女だとか同棲とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……」

「翼さま？ 何を仰られているのですか？」

「いや、まさかこれを言える機会が来るとは。ああ、御免。清秋院……でいいのかな？ とりあえず立ち話もなんだし上がった」

『縁あって、あなたのお近くに控える身となりました端女にございます。わたくしも清秋院の家も、叶うならばあなたさまの御寵愛を末永く賜り、共に霸道と王道を歩ませていただきたく願っております。どうぞ、この御忠義をお受け下さいませ』

いきなりこんな事を言われては困惑するのも当然だと思つて。

ポルポル語を思わず口走った翼を不思議そうに見つめる美少女（清秋院？）を玄関口に誘うと後ろから静々と付いてくる清秋院恵那。実に大和撫子だ。かぶった猫さえなければ。

伊達にイギリスで腹黒魔王や腹黒姫や腹黒紳士と接して居た訳ではない。猫かぶりなら判別できるという自身がある。

さて。今日話をきいたと思ったらまさかいきなり接触してくるとは。日本も流石というべきだが何が目的なのやら。

頭に浮かべた思考を棚上げし扉の鍵を開ける。

この思考、一見すると警戒をしているようだが翼は本質的な意味

で判っていないかった。

神殺し、という偉業の価値を。

魔王カンピオーネという存在の影響力を。

自分がいかに暴君として畏れられているかを。

アレクサンドルとアリスのやり取りを基準にしていたから已む無しともいえるが。

イギリスでの無差別攻撃は十分にヴォバン侯爵に並ぶ暴虐である。

カンピオーネ！〜赤き蛇の魔王！

？・妖魔夜行 / 02・蛇と刀と幽世と

立ち話もなんなので家に招いてリビングに座らせる。それなりにまだ肌寒いしこんな美少女とくっちゃべっぺって近所の噂になりかねない、という理由がメインだが。

薬缶をコンロにかけた後、お茶を出す。しかし不味い。お茶とはこんなに不味い物だったか？

等と思うが理由としては此処暫くイギリスで本職の淹れた最上級の紅茶しか呑んでいなかった為である。

高松翼（魔王）。『イギリス料理は不味い』という事実のみに目を取られ『お菓子は美味し』く『イギリスで食べる料理が不味い訳ではない』という事実気づかずしつかりと餌付されていた事に気づいていなかった。

「はい、御嬢様には物足りないと思うが庶民なんぞでな。勘弁してくれ」

「羅刹の御君に振る舞って頂いてそんな事は申しません。何でした

「私が点てましようか」

茶を点てられるのは流石御嬢様。昔、母親が齧った茶の湯の初心者一揃が台所に眠っていた筈だが

「あー、それは嬉しいが。その堅苦しい口調は止めてくれ。お互いにやりづらいだけだろ？」

「いいの？ それじゃ気軽にさせて貰うね。いやー、恵那はこういうのが苦手でさ。自分から言いださうと思っただけで良かったよ」

良くわかったね、そういつてにやりと笑うとそちらが素なのだろう。纏っていた雰囲気は淑やかな大和撫子から途端に奔放な印象に変わる。

「猫の全身着グルミを着こんだ人と較べりやすく判る」

とはいえ口調こそざつくばらんだが姿勢も綺麗だし仕草も洗練されている為粗野な印象は受けない。寧ろ堅苦しさがないだけ好ましいだろう。話のレスポンスも悪くない。

確りとした躰と教育を受けているのだろう。どちらもが彼女の見える貌。個人的な印象は『血統書付の野生児』か？ 話し相手として悪くない印象を持ったので本題に入る。

「で、一体なんなのさ。君が来た理由は」

特にその刀。指をさしつつ問いかける。落ちついたは良いが未だ体の臨戦態勢は解けないまま。明らかに神の力を帯びた呪具を前にして気が抜ける筈がない。

「この刀は恵那の相棒で天叢雲剣。来た理由は王様のお妾さん、側女として挨拶して来いって」

「いきなりそう来たか、正史編纂委員会!!!」

あまりのストレートな物言いに刀の銘を差し置いてでも翼は突っ込みを入れざるを得ない。まさか此処まで直截に来るとは予想外だった。

「ああ、勘違いしないで。恵那は正史編纂委員会とは別だから。うちのおじいちゃま達が挨拶して来いって言ったからなんだ。今頃、

馨や甘粕さんは大慌てじゃないかな？」

「清秋院……確か沙耶宮とは別の四大氏族だったよな。沙耶宮を無視できるほどの権力があるのか？」

もしそうなら正史編纂委員会を抑えている筈なのだが。それともそんなものは面倒くさいと投げているのか。

「あ、其処まで知ってるんだ？ 恵那は清秋院の跡取りつて事になつてるけど正確にはその後見人、うちのおじいちゃまの依頼なんだな」

“おじいちゃま”

つまりは正史編纂委員会すら無視して動けるだけの権勢を持つているという事だが。日本にそんな存在ものがいるとは知らなかった。

殊にその刀、天叢雲劍の持ち主だというのなら名は十中八九確定できる。と、いうより日本人でその刀と持ち主の名を知らない人間なんぞいないだろう。

「それで今回はおじいちゃま達が恵那の後ろ盾だから。とにかく馨よりも先に挨拶してこいって言われたんだ」

「その“おじいちゃま”というのはナンなんだ。話を聞くに人間じゃないように思えるが」

さつきから聞いていると。正史編纂委員会より上の立ち位置に見える。まるで魔術師に対する俺達カンレオーネのように。名前はわかれど“まつろわぬ神”がおとなしくしていられる筈もない。

『どういった存在か』。その一点で未だその『おじいちゃま』とやらの素状は判らずじまいだ。眼の前の美少女も是以上話す気はないのだろう。

「まあそんな所？ 中々怖いじいさまでさ。委員会の人達もいつもあの人たちの顔色窺ってるよ」

翼の知る限りそういった人外の存在は神祖グイネヴィアとその御供のランスロット位。

ああいった類なのかとそう思案を巡らせていると清秋院恵那からも追及が来る。

「そも王様にも問題はあるよ。日本人なのに外国のお妾さん侍らせ
てるんだから」

「妾つて訳でもないんだけどな」

改めて関係を考える。

メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァール。

俺がこの方面に足を突っ込むきっかけとなった女性。イギリスに
おける俺の代行者であり、忠実な部下であり、愛(?)する女性。

「……ギャルゲ、ないしエロゲヒロインとのシナリオクリア後？」

「甘粕さんみたいな人なんだね、王様つて」

「いや、割と真面目は話なんだが、英雄^{ヘラクレス}辺りに準えると嫁が死ぬし。
日本で君の“おじいちゃま”に例えてもどっちでもオトタチバナや
クシナダが犠牲になるじゃない」

実際、冷静に考えると他に例えようがない。

『旅行した先(英国)で金髪美少女に出会って怪物に出会って不
思議な力を手に入れる』

RPGでも最近はやらない覚醒系主人公としか例えようがない。

白兔に導かれて不思議の国へとどっぷり足を踏み入れている翼だっ
た。

間違つてはいないが。ゲームで例えるならばレベル1でクリア後
の裏ボスに挑むようなムリゲな難易度である事は翼の脳内でなかつ
た事にされたいらしい。

『俺含めて、今7人もクリアしてる人いるじゃない』

だから無理ではない。

この判断は間違っていない。いないが致命的にナニ間違っ
ている。やはり王はマトモな人間ではなれないという証明だった。

そして公式には彼女は『王の寵姫』と呼ばれている。

高松翼(16)。結婚していないが側室は保有していた。

「大体な。自分の娘を送り込んでくるなら直接顔見せくらいしろっ
ての。そも、押しかけ嫁^{フィクション}を物語^{フィクション}の存在と呼ばずどう呼べと」

そんなものは物語の中だけで十分。そう思っているがいきなり冒

険譚の末に金髪令嬢の彼女（翼視点）と愛人が出来た上、怪物退治を行うというのも十分に非日常。ファンタジーその事実は余り認識していない。その辺り、翼の性格を知った上で距離の取り方を絶妙に取っている英国勢の対応の上手さなのだが。

「あー、難しいかな。あの人たちこっちにこられないから」

思わず漏れる愚痴に対する返答。“こっち”。つまりはアストラ界。

供物を供えた事はさておき自分に何か企む事を赦す気はない。行動の指針を決めたならば翼のとる行動は一つだった。

「清秋院。彼らに会った事はあるな？」

「え？ そりゃあるけどどうして？」

「何、嫁入りさせるってんなら顔見せ位しておけ、という話だよ。返事も聞かず送りつけるのはどうかってな」

「え？ 貰ってくれないの？ それは困っちゃうんだけどな」

「その為にも挨拶させろ、という話。是でも嫁（愛人）がいる身なんだな」

我が相方が日本人の愛人を許容するか、という不安もあるが『日本の窓口』として納得するだろう。色々と吹っかけられそうだが。

ハーレムのできる嬉しさよりも浮気の言い訳をまず考える小市民受け入れを拒否する気がない事は本人内では既に正当な事らしい。

「現世から幽世……日本風に言うなら葦原中国から根の国ってところか？ 先人の様に死者の国から嫁を取りかえしに行くわけじゃないしお気楽にいこうかね」
オルフェウスやイザナキ

方針を決めた後、清衆院恵那を表で待たせると先程の件を相談しようとして電話をかけてみる。

「……繋がらんな。いや、通信不能地域なのか？」

あちらは今昼前。時間的に問題はない筈なのだが。ならばとヒル

ダさん　彼女付のメイドの番号にかけてみる。今度は繋がった。
『あら翼様。私の方にかけてるとは珍しいですね。どう言った御用件でしょうか』

御嬢様の方にかけて頂かないと私が嫉妬されてしまいます。そんな冗談を口に出すメイドさんに仲介を頼む。

「いや、その本人に今かけたんだが繋がらなくて。メアリーに変われますか？」

『あら。私交換機扱いですか。酷い王様です』

「いやいや、美人なメイドさんと愛を語らうのも楽しいですが割と真面目な要件なので。てか、何で今繋がらないんですか？」

『御嬢様でしたら本日は賢人議会　の方の用事で外出されておられます。伝言でしたらお伝えしておきますが』

ああ、爺様達と話してるのか。なら電話の電源事態を切っても仕方がない。ならばと秘書兼護衛兼世話係に伝言を頼んでおく。

「あー、どつちかという相談だったんですけど。んじゃ『日本が動いた、連絡乞う』と伝えておいて貰えますか？」

『では後ほど翼様に連絡するよう伝えておきます』

「お願いします。時差は気にせずかけてくれ、と伝えておいて下さい」

『確かに承りました』

「では、失礼します」

伝言は伝えた。しかし生まれた疑問が一つ。

「あれ？　ヒルダさんって護衛も兼ねてるんじゃないかなかったか？」

メイドが護衛というより護衛の『騎士』がメイドをやっている筈だったのだが何故離れているのだろうか。表で待機しているとかか？

まあ、この件が終わったら会いに行けば良い。そう判断し翼はその時の疑念を振り捨てた。

「 我は叡智を盗む蛇。我が盗みしは『大迷宮』」

イギリスへの言い訳…もとい連絡をした後、家を連れ立って出ると人気の無い公園に移動する。

人払いや認識障害の類は未だ使えないので『大迷宮』^{ラベリンス}の権能を行使、異空間に入り込む。

入り込んだ先は新宿都心、初見の人には間違いなく迷う事間違いないの天然の立体大迷宮。具体的に言うとな駅の構内。無人の構内というのはかなりシニールだったりするが。

この権能、初期設定はミノスの大迷宮だったそうだがアレクは変えたし俺も違う。

言うなれば自分が慣れており、かつ迷う道と認識できれば何処でも良いらしい。

翼は主にこの権能は都心ならどこでも再現は可能だった。主に戦場として設定する為に夢の島^{オリジナル}辺りを設定する事が多いが。

俺流にカスタムされたか黒王子とは少し異なり、現世とは少しずれた異空間…：要するに幽世に自分の世界を構築する形式に。

逆に言うとな幽世への入り口として極めて便利な訳で。

「へえ、王様はこんな権能も持つてるんだ」

「こいつはアレクから真似た奴だけだな。さて 我は神話を為

す赤き蛇 我は叡智を盗む赤き蛇！」

聖句を唱え、アザゼルへの化身を終えたと頭を恵那の側に寄せる。

「ほら、乗つかると良い。まだ二人しかいないぞ？ 俺が背中に乗

せた女は」

淫獣^{ニコリオン}の如き条件^{おとめげんてい}をつける気はないが。気安く誰彼乗せる気はない。

「最初じゃないのは残念だけど。まあ、今後、恵那だけにすればいいよね。じゃ、失礼しまーす」

さり気無く物騒な発言が聞こえた気もするが此処は無視。未変化^{フランク}の頭の一つに彼女を乗せるとそのまま幽世へと飛び立った。

幽世に飛んでからは恵那、というより天叢雲剣の反応を頼りに目指す『世界』を探す。

この世界は只、其処に在るだけだ。原初の混沌の如きこの世界は其処に力を持った存在が現れる事で彼らの『世界』を作りだす。悪魔ならば地獄を。隻眼神ならばヴァルハラを。光明神ならば常若国を。

翼はこの世界の在り方をインターネットの様なものと認識していた。

力ある存在が此処に創り上げた世界。行きたいのならキーワードで検索し近い世界を捜し歩く。または知っているアドレスを打ち込んだり、リンクを張る事でその世界への直通路を設定する。

今回、恵那の先導で導かれた『世界』は何処とも知れぬ山の中だった。

まるで緑の山々に轟々と流れる河。むせる程の木と土の匂いの濃さは日本の自然を切り取ったかのような深山。

最も、豪雨で台無しだが。上空を飛んでいるが夏の積乱雲のような雨と風、そして雷で酷い空模様だ。まるで嵐のような。

「ああ、あのじいさまはいつつも雨を降らせるから。下手に連絡をするとびしょ濡れになっちゃうし傍迷惑だよねえ」

言われて首を一つ向けると自分の頭に乗った彼女は全身ぐしょ濡れでもはや服が服としての体をなしていなかった。

体に張り付いている服は彼女のボディラインを浮き彫りにしておりざつと見でも80後半はかたい。鍛え上げられた体と相まって極めて健康的、かつ肉感的な肉体だった。

「すまん。ちと気づかなかつたな」

暫し観賞させて貰った後、焦熱結界を半球状のドームとして張るついでに軽く熱気を送ると服に付いた水分が吹き飛んだ。アイロンの要領だ。盗賊殺魔術師の真似とは言ってはいけない。あれはこういった魔法の実用において極めて実用的な話なのだ。

「うわ、すごい！ これも王様の権能？」

「何、これも権能のちよつとした応用だ」

モレクの権能、『煉獄魂炉』は火炎の権能だ。結界の要領でド-

△状の火炎の幕を張る位簡単な事だったりする。

実際、戦った時にも焦熱結界と言って張っていた。最も、それを神より先に雨除けに使うとは思わなかったが。

「あ、おじいちゃまがいるのはあそこだよ」

恵那が指差したのは今にも壊れそうな掘立小屋。アストラル界だから川辺にあるのが危険、等のつつこみは無粋なのだろう。

近づきつつアゼルの化身を解いて小屋の近くに降り立つ。

幸いというか軒下で雨を防げそうなので焦熱結界を解除、開いた引き戸から中を覗くとそこに居た家主は如何にもな偏屈そうな老人だった。

180cmを超える巨軀に老人とは思えない鍛え上げられた肉体系難しげな顔。簡素な着物と蓬髪が相まって田舎に隠居した親分といった風体。

「おじいちゃま？ 王様を連れて来たから御相手をして差し上げてね」

「全く。会うのはこの件が終わってからだと思ってたのにまさか真つ先に来るとはな。恵那。お前何考えてやがる」

「おじいちゃまもそんな言わないでよ。恵那もまさかいきなりこう来るとは思わなかったし」

傍から見ると孫娘が『つきあってるの！』と男を連れ込んだできたような風景。

だが、翼にはそんな余裕はなかった。自分の中の感覚がこいつは敵だ！ と明確に告げている。

まあ、当然といえば当然だ。この老人は言うなれば俺の天敵。

「来たなら歓迎しないのも何だしな。高松翼、何も無い所だがまあ入れ」

間違いない。この老人こそが恵那の刀の持ち主にしてこの世界の主。ヤマトタケルなんて人間の英雄じゃない。

ハヤササノオノミコト
風雷神、三貴士、蛇殺しの英雄、速須佐之男命

！

? / 02 ・蛇と刀と幽世と（後書き）

後書き：実質、幕間だから短い！　ここ数話はちと動きが鈍くなります。というか。ラスボスを設定したらどう見てもシヨボク（苦笑）。後、恐らくはカンピウスでは珍しいカテゴリの敵が出てくるんじゃないかと思われ。

いきなりスサノオ登場、というか是は前回で予測出来た方もおられるのではないかと。まあ、流利的に学校で祐理、甘粕と会ってからという案も有ったのですが。

安易でつまらん、というのがと翼の行動選択肢的にこうなるなー、という脳内思考の結果こうなりました。

恵那を割とあっさり受け入れていますが其処らの事情（認識）と理由はまたそのうちに。

後、本来ならもう少し本編を進めてから護堂に説教する形で講義（と言う名のJi3的解釈カンピオ・ネ神話体系解説）をする積りだったのですが。其処まで辿りつくにはちと時間がかかる。

と言う訳で番外編（いくなればEf外典）、別枠でなぜなにナデシコ宜しく解説話を外伝で入れようと思うのですがどう思われます？　ぶっちゃけ、返信の際に一々書きこむのも心苦しいのでやっちなおうかな、というのと。

そっちをすると本編のスピードが落ちるの確定なんで自分的に迷っています。

感想の際、どこかこの神について、的なリクエストもあれば私の力の及ぶ範囲で書き記して行きたいと思しますので宜しくお願いします。

書くとなれば神という存在の主流の変転（蛇牛英雄竜）、神話の

形式、シュメール（メソポタミア）、ミトラ系を書いてからギリシヤと並行的に中華。

でもって旧約、新約。日本は別枠で書いてから各神格。南米系は私自身詳しくないので概要のみ。

というかイシュタル、バル、パズズ辺りの古代三大神格（勝手に命名）を触ってから魂の運び手について軽く突っ込んで行こうかな、という感じに。

素人の駄文なので当然不備はありますしそれでよければ、ですが、『鋼』については牛と英雄の辺りで天の系譜と地の系譜と一緒に適当に途中挿入するとして。……うわあい。すっげー長くなるのがこの時点で確定だよおい。

ミトラ系は端折っても実質、人類の宗教史をほぼ全て語る形になるし。

以下、本編に関係ない余談。

どうでも良い余談その1：チート転生。

うちの翼は説明にあるようにトリッパーではありません。ありませんが。ふと此処の小説を見ていて思った事。

転生チートで『カンピオーネの力』とか言うと。権能無しでも鬼だなあ、と。

基礎スペックとして。

・ 人類最強の魔力（なのはでいうならSSSオーバーどころかヴオルテール辺りとタメを張れる。ネギまでいうとナギと同等以上、型月だとキャスターと同等以上）

・ 魔術無効（人類の範疇では最強の魔力の為、人の魔術が効かない）

・ 超直感

・ 戦闘適応

・あらゆる戦闘状態でチャンスをつかむ能力（都筑神、赤松神、負債の補正すら覆す）

がついてくるので。逆になのはかネギマで下さいとかいう定番チートスペック。

カンピオーネでは皆、神とカンピオーネがデフォなので気がつきませんが余所の世界に乗り込むと蹂躪にしかないスペックだったり。修業しないと英雄に勝てるかは微妙ですが。

蹂躪と言っても「フレーザー」なのでどう扱うかは作者によりますが。繰り返しします。作者によりますが。

作中でそう見えないのは護堂が素人で有効に使わないからなんですよ。

なので魔法のある世界ならカンピ能力で磨けば普通に最強できます。これを鍛え上げたのが羅豪教主。

後、基礎Lvが高いので基礎Lv以下のスキルは超効率で上がる（言語はこの一端）。ぶっちゃけるとどの世界の魔術もちょっと見ればすぐ実用域には達します（笑）。

皆さま、チート転生のお共にカンピオーネは如何でしょうか？。

今なら「カンピオーネ」。この一つの括りで権能無しでも最強の戦士であり魔術師になれるスペックがついてきます（マテ）。

尚、私はキーワード一つでチートトリップならば。か英雄の種族、汎用性なら四次サーカーを上げます（笑）。

ま、リリなのは話をまともにする場合、蹂躪せんと話にならないというのもあるんだが…。

どうでも良い余談その2：今回の執筆時BGM/超力戦隊オーレンジャー、緊急発進オーレンジャー、虹色クリスタルスカイ。

超力戦隊オーレンジャーOP、ED、挿入歌。オーレは曲はどれも神曲だからマジ困る。ああいった隊長が大好きなのに俺が書いてる翼はなぜ、こうなったおい（遠い目）。

今の私の書く主人公は基本的にワタリガラスで首輪付な傾向が強い。翼はアライメントでいうと恐らくはC/N。

実際問題として、『ヒーロー』でオリ主を投入すると。護堂と殴り会う羽目になるのが確定なのでそれはそれで困るのだが（苦笑）。

真面目な話、護堂より先に王になっているなら何故護堂となあなあで仲良くなれるのかなかなり真面目に疑問だったりするのだが。

その辺りどうなっているのだろうか。

? / 03 ・蛇と義母と劍神と

「あらあら。いきなり呼び出しくらっちゃったのね」

彼女の子供が幽世に現れた気配を感じたので久々に会ってみようかと思い、周囲を探ってみるとまつろわぬ神と神祖、木乃伊の気配を感じる。

確か彼らは彼が住んでいる東の果ての島の重鎮だった筈だ。

この子供は他の彼女の子供と較べると行動力は変わらないものの好奇心旺盛で色んな所に気の向くまま飛びまわる。他の子から移動の権能を覚えてからはその傾向が益々顕著になっていた。

ならば彼らが態々会つとなれば話はあの件だろう。

「だったら。此処は保護者を交えて三者面談といこうかしら」

良い事を思いついた、とばかりににんまりと笑つと彼女の姿はその場から消え失せた。最初からまるで何もなかったかのように。

カンピオーネー！〜赤き蛇の魔王！

? ・妖魔夜行 / 03 ・蛇と義母と劍神と

スサノオ、ハヤスサノオノミコト速須佐之男命。

三貴士の1人であり、所謂『八岐大蛇』を退治した英雄として日本では最も知名度の高い神格の1柱。

典型的な土地神、暴風神だが習合を繰り返し蛇殺しの鉄剣を獲得する事で鋼の英雄としての側面を獲得。これは同時にまつろわされた神をまつろわす神が取り込んだ結果とも取れる。

また、スサノオにはトリックスター、文化英雄としての側面があ

り、姉たる太陽を天岩戸に追いやった挿話はその好例だ。『太陽を盗む／隠す』神話はトリックスターとしての表現であり自分やプロメテウスが持つ『智慧』に通ずる寓話である

脳内に目の前の神スサノオに關しての知識が湧きあがると同時に蛇頭カオスヘッズに力が宿った事を感じる。6個目、風と雷、嵐の神格、権能アザゼルがスサノオの力を理解し盗み取ったのだ。

「は！ 流石は智慧の蛇を殺した野郎だな。俺の話で即座に権能を真似やがったか」

「どういう事だ。俺はあんたの来歴こそ予想はつけてたが盗めるほど把握してない筈だぞ」

「そりゃア此処が幽世だからよ。現世と違って、此処には宇宙開闢から終焉までの全ての出来事が記載されてるって話だ。俺は無理だがお前みたいならるべき力を持つてる奴はそいつを取ってこれるのさ」

「アカシックレコードって奴か。成程普段、俺も此処から情報を抜き出してる、と」

しかし疑問は残る。何故、彼らが俺にアクションを起こしてきたか、だ。それは今の話とは関係がない。

「それはね？ 貴方が寝る子を起こしかねないからよ」

横合いから唐突に涼やかな声がする。

そちらを見やるとそこに居るのは10代半ば程度の少女。スレンダーな、少女の様な体つきにも関わらず蟲惑的だった。

金髪ツインテールに白い薄布のドレス。是に麦藁帽子でも被せれば男の夢想する『避暑地に来たお嬢様』の出来上がりだろう。

背も低く、印象も幼い。肉感的な魅力とは無縁な、しかし世界のどんな女性よりも女を感じさせるなまめかしい姿。

人の理想の『女』をカタチにしたのなら。否、神が直接理想の「女」を創り上げたのならこうなるのではないか、そう思わせる女神パンドラ。翼達カンピオーネ生誕の呪術を世界に仕込んだ夫婦の片割れ。即ち。

「義母^{かあ}さんじゃないか。なんでまた？」

「お久しぶりね。もく、私の事をそう呼んでくれる子は貴方だけだから嬉しくなっちゃう」

ハートマークでも付きそうな口調で抱きしめられる。と言っても翼の肩までの背丈しかない為、此方が屈む形になるのだが。

そんな母子（？）のやり取りを見て口をはさんでくる老神^{スサノオ}。

「おお、ぱんどらか。仮親のお前まででてくるとはどういう積りだ？」

「この子はどの道、あの御子と関わるもの。スサノオ様の目論みのお陰で折良く幽世に来てくれたから私も接触しにきたといったところかしら」

「いや、自分で飛びこんできたんだがな。目的としては一緒ってえ訳か」

「そついう事、だったら三者面談といきましょう」

「三者面談って学校じゃあるまいし。てかどーいう事さ？」

「普段は貴方達が生まれた時以外は面倒だから現世にはいかないの。幽世だつてそうそう接触しちゃいけないし」

「しかし、こいつは元まつろわぬ神の俺に会いにきているからな。

お前さんが此処に居るのは偶然、つまりはそういつこつたな」

「何、そのすつげー屁理屈」

と、いうか。『元まつろわぬ神』なんて単語は初耳なのだが。そんな翼の疑問に応えてパンドラが解説してくれた。

「今みたいにカンピオーネなんてそうそう生まれる訳ではないから滅ぼされないままの『まつろわぬ神』はその内、生きている事に飽きちゃうのね」

「で、俺は1000年程ほつつき歩いた末に眠るか、この幽世に隠居するかの一択で後者を選んだつて訳だ」

「んで、今は清秋院に刀を授けて巫女にしている、と」

「千年もいれば其れなりにしがらみができちまうからな。俺達は消えるわけにもいかず此処で過ごしてる半端者さ」

「俺達？」

複数形、つまり此処に居るのはスサノオだけではないと。そう考えた瞬間周囲に二つ気配が湧いて出た。唐突に、転移でもしたかと思わざるをえない。

「然様、初にお目見えにかかりますな。羅刹の君」

「突然の来訪故、大したもてなしもできませんが御容赦を頂きたく存じます」

挨拶と共に現れた存在は二つ、一言で言うと即身仏と十二単の西洋美人。

女性の方は絶世の佳人と違って差し支えないだろう。魔王稼業は一年程度だがそれなりに上流階級な面子とも知り合った。

だが、知るなかで最も高貴な女性、という名詞を冠されるであろうアリス姫よりも高貴さで、神祖グイネヴィアよりも神秘的、という意味で較べものにならないほど上だ。

……まあ、あの二人は腹黒さと視野狭窄さで其々マイナス補正入るからな。うん、やっぱりメアリー最高だよメアリー。自分に尽くしてくれる女性っていいよね。

等と思っているが。彼女と出会った時のセメントな会話と他人に対する態度を意図的に忘れている翼だった。

下手をすると懐に入れた悪女に騙されかねない男である。最も、当の懐に入れた令嬢が其れを赦す筈もないが。

「媛に注意を惹かれるとは噂に違わぬ色好みという事ですか？」

「いや、ミイラと憂い顔の十二単の西洋美人さんじゃミイラは無視するに決まってるだろう。男として」

皮肉げな、というより終始一貫した慇懃無礼な即身仏に返答する。この手のタイプは下手な挑発に乗らず普通に対応して居れば良いだけの事だ。

それにそのこの媛と称された女性に関して肉欲じみた欲がどうこうではなく彼女の様な人ならできる事はしたい。差し詰め

『美人の涙が最優先だ』

といったところだろうか。

少なくとも此処に俺が呼ばれる筈で、現れたのならば自分の力で関わられる事なのだから。

「はつきりと仰られますな。成程、寵姫を持つだけあって立派な王であらせられる訳ですな。我らも新たな側女を送り込んだ甲斐があったというもの。御老公の巫女、少々変わり者故、お気に召して頂けるかが心配でしたが」

「清秋院は普通に良い女でしょ。後、女好きとは一言も公言した記憶はない」

彼女無し歴16年で彼女なし歴〃人生からいきなり愛人持ちになった人間がどうやったら女好きと称されるのかと問い詰めたい。

非日常への Boy meets girl で仲良くなった女性と仲良くしているだけなんだが。

今のこの即身仏の言を聞くに側女、つまり清秋院を送り込んだのは此処に居る人(?) 達と言う訳だ。

そういえば、当の彼女は妙に静かだと思つと隣 清秋院恵那の居た所には彼女の姿はなく小柄が一本浮いていた。緻密な細工等が有るわけではない、黒漆の柄と鞘のシンプルな装飾だが自然な美しさを感じる代物。

「恵那は俺達だけならともかくぱんどらが居る所に流石に相席させる訳にはいかないんでな」

「ごめんね? 流石に私が直接会う訳にはいかないもの」

「あんたら相手なら直に会つてたつて事が、清秋院は。まあ、神具を授けられた巫女なら当然なんだろうけど」

逆に言うところの三人組は普通の人間では拝謁できない存在だ、という事だ。

「偏屈爺そつなの元まつろわぬ神に即身仏と平安装束……というか十二単の西洋美人さんつてどうい組み合わせだよおい」

「カカカ、我らは先程御老公が仰られた様な存在ですな。つまりは後見人の古狸と言う訳ですな」

「いや、何処の坊さんかしらんがあんたはどーでも良い。

傳？だろーが弘法だろーが親鸞だろーが法然だろーが日蓮だろーが天海だろーが。

そっちの美人さんはどちらの方であらせられるのだ、という話だ。

神祖じゃあるまいに」

「羅刹の君よ、神祖を既に御存知なのでしょーか」

「知り合いというかグイネヴィアって神祖に雰囲気というか気配がそっくりなんですよ貴女。只、神格、というか気配？ は上に見えます。例えるならグイネヴィアがコピーを繰り返した劣化データで貴女はオリジナル？ みたいな」

あの神祖は何度も転生を繰り返している、と聞いているしそういつた知識も踏まえてなのだが。眼の前の女性は服装も相まって当時からそのまま生きている、という程度の予測はできる。半分以上勘と当てずっぽうだが。

「なんとというか。此処まで裏事情に通じてるとなると話す楽しみが少なくなるなあ、おい」

「そうねえ、スサノオ様。この子、カンピオーネになった国で大概の事情に通じちゃってるから。下手に話を制限しても自力で解答に辿りついちゃうわよ？」

「お前が話すのもあのガキの件だろ？ だったらある程度いっちなうしかないか」

生徒を前にしての二者会話は終わったらしい。正直、とっとと本題に入ってほしいのだが と思っていると当のスサノオから問いかけが来た。

「高松翼。神祖がどうやって生まれるか知ってるか？」

「んにゃ。地母神かなんらかの理由で零落、神格を喪った結果としか知らんけど」

是は魔術師なら誰でも知っている知識だ。そも、今で言う『魔女』や『媛巫女』は彼女等の末裔すえ。つまりは女神をまつろわし娶った男がいるという話だ。なんて羨ましい、もとい英雄だ。

この辺りが翼の個人的な興味の対象だったりする。

『鋼』の英雄、英雄として創造されし神格はそも最初から英雄として作られたのか。実際にそういった事実を元に神話を創造されたのか。はたまたそういったカンピオーネを元に神話として産み出されたのか。

ジークフリートとブリュンヒルデ辺りの逸話は実在したカンピオーネがモデルじゃないか、と思っっていたりするのだが其処はそれ、閑話休題。

「簡単に言つと。地母神をそうしちまったハタ迷惑なガキがこの国に眠ってるって話だ」

「御老公、そうはつきり言うのもどうかと思われませんが」

「こいつが自力で幽世に来れる以上、ぱんどらがこの辺りの事は伝えちまうだろうが。黙ってる意味もねえからな」

ガキと言われても判らない。地母神から力を奪い取るとなると牛系の天候神か鋼の英雄神しか思い浮かばないのだが。

「確かランスロット様とはもう会った事が有ったわね？」

「うん、死にかけた。あの仏蘭西野郎とやりあった時には」

義母の問いに素直に応える。アーサー王伝説最強の騎士にして王国崩壊の原因、そして明らかに後付けの出自不明の鋼の英雄。

そして高松翼にとっては神祖グイネヴィアを守護する不倶戴天の敵にして鋼の神。

彼らの出自と存在について学んだのは当のアレクとの抗争を終え、友好関係を築いた後だった。

霧になって攻撃を回避するは隕石落下、というかジャンプするは何処のFF4だと問いたい。あの竜殺しを相手にした時、^{アサゼル}竜蛇の権能を持つ事を心底後悔した、というかヤバかった。

アレクの加勢がなければ殺されないまでもけして勝てなかっただろうと断言できる。竜と竜殺しの英雄。相性からして最悪で当然ながら権能を盗む余裕等皆無で入手はならず。

霧化と隕石落下。剣製の過程である焼き入れで生じる蒸気と材料

である陰鉄に由来する権能。どちらかでも手に入れたかったのだが
「そう。この島にはそういった鋼の中でも最強の鋼が眠っているの
で、あなたはアザゼル様 竜蛇の神格を最初に殺したからどう
してもその気配が漏れ出ちゃうのね。鋼の人達からは竜蛇として認
識されちゃうのよ」

カンピオーネ事態が最初の神格をベースに生まれ変わるから。
そんな義母ほんごうの言を元にするなら俺は今後どれだけ神を殺しても『
アザゼルの魔王』というフォーマツトと言う事だ。ドニなら『アガ
ートラムの剣王』でアレクなら『レミエルの魔王』という事らし
い。

だからこそ竜蛇という属性は絶対に捨てられない、と。
「寝てる犬の前で肉をぶら下げてるようなもんだな。お前が動く度
にまどろんでる状態でも反応する訳だ」

「なにそれこわい」
「日光の猿王殿も気配を感じておられますからな。言うなればこの
国の竜蛇除けの仕掛けが全て羅刹の君。貴方様を対象にしている訳
ですな」

要するに。その『鋼』とやらを眠らせ続ける為に幾重の仕掛けを
施し。其れは俺が居る所為で色々とマズくなっているという事らし
い。

「その『鋼』に関する事が俺を呼び出した理由と？」

「まあそういう事だな。本当なら先にお前さんの腕っ節をみさせて
もらおうと思ってたんだが」

「何せ先に御老公の巫女を連れてこちらに来るとは予想外でしてな。
手前共も正直、段取りの狂いを感じております」

「それをハッキリ言う辺り良い性格してるよな。坊さん。というか。
絶対、あんたら何か手頃なの用意してたんじゃないか？」

『王の実力を見る』。こういう以上は神は無理にしる眷族ないし
神獣クラスでなければ勝負にならない筈だ。そんなもの並の人間が

用立てできるものではない。

「ふむ、まあその通りで御座います。うまい具合に手頃な核があったのでそちらを元に手前が仕立てさせて頂きました」

「其処でバラすかよおい」

「貴方様の御気性で、其処までお気づきな以上此処は隠すよりも素直に御頼みした方がよさそうなものですからな」

「否定はしない。しないがなんでそこまでわかるんだ、こん畜生。俺がほつとく、というのは考えなかったのか？」

「その場合は我らは我らで現世のものに発破をかけるしかありません。まあ、総出でかかれれば解決はできましょう どれほどの犠牲がでるかは何りませんが」

この坊主、とんでもない強迫に来やがった。俺がじはでばらないなら未曾有の被害になるかも。と自分の失策を逆に手札に使っている。

俺が日本を棄てる気がない限り今回限りでは有効な切り方だ。

「御坊。此処は我らの非礼を詫びる所でしょう。羅刹の君よ。今度の御無礼はお詫びいたします。どうか、民達を助けてやって頂けませんか？」

「貴女みたいな美人に素直に頼まれたなら最優先……まあ、メアリ」と被った場合はそっちを優先しますが」

睨み合っていた膠着状況に割り込んだのは十二単の美人さん。こういう風に状況を認識した上でお願いしてくる人には素直に力になってあげたいと思う。それが美人なら尚更だ。

「ああ、所で受ける代わりに一つ御願いが」

「如何用でしょう？」

「御名前を聞かせて頂けません？ 美人さんとか十二単の美人さんなんて言うのも何ですし」

「玻璃の媛。そう呼ばれております。お好きにお呼びくださいませ」
何を要求されるかと身構えていたようだが拍子抜けし、暖かく笑む気配が伝わってくる。まるで微笑ましい子供を見つめる母親の様な眼差しがどこかくすぐつたいというか、居心地が悪い。

例えるなら近所のお姉さんにあやされるかのような感覚といおうか。そんなこそばゆくも心地よい空気を破壊したのはやはり空気を読まないクソ坊主だった。

「ふむ、やはり色好みの噂違わずであらせられますな」

「黙れ即身仏。腹黒くない綺麗なお姉さんを慕い敬意を示すのは当然だろう」

「ああ。恐らく現世の委員会の方でお前に接触を図る奴がでてくるだろう。その時にそいつの討伐を依頼されるだろうから宜しく頼ま

あ
「こちらの話し合いが終わり、了承の意を示すとぐでぐでになりかけた空気を吹き払い、話はまとまったとばかりにスサノオが詳細を告げてくる。

「へーいへい。で義母さんもそつちの話も終わりとして。こうなった清秋院は戻るの？」

一振りの小柄となった巫女を手に問うと当の犯人が気軽に返答を返してきた。

「ああ、それは一時的な処置だからな。俺の庵、というか棲み処から離れば元に戻るだろうさ」

「気をつけてねー、帰るまで気を抜いちゃだめよ？ 後、鋼の英雄は貴方達のライバルなんだから絶対負けちゃダメ！」

「なんて激励……まあ、義母さんこそ気をつけて。それじゃ今日は失礼しますのでまたその内に」

義母の軽い挨拶を背に受け帰途の旨を告げると翼の姿は一匹の竜へと変わり飛んでいった。

翼が去った後も残された古老とパンドラは今回の会談について軽く話しあっている。

「やれやれ。触り程度の事しか教える積りがなかったのにしっかりと色々と聞きだして行きやがったな、あのガキは」

媛の事やらまで教える気はなかったぞ。他人事めいた独り言に応じるのは当の媛自身。

「大丈夫でしょう。かの羅刹の君が話さないと仰られた以上は。どうこうするでなしに気になったから知りたくなった。それだけのようですし」

「其処で話さなければ動かなかつたでしょうからな。やれやれ、羅刹の君らしい強情さといえますか」

「智慧の蛇を斃した奴だけあつて油断ならねえ野郎だつてのは確かだが。ま、今回の一件でどう動くか様子見といこうじゃねえか」

「スサノオ様達も大変ね。あの人に対して色々気を揉まなきゃいけないんだもの」

「そう思うならもうちょっとあのガキにいつてくてもいいんじゃないか？」

「私が言つて聞く様な子ならそも私の子供にならないもの。あの子だつて聞きわけはよさそうだけど結局、自分ルールでしか生きられない駄目人間だし」

「では。この茶番劇をどう処断なさるか。ぱんどら様も一緒に見物なされては如何です？」

「そーねー。あの子がこの演目をどう解釈するか。御厄介になつて良いかしら？」

「おうよ。じゃ、まあ高みの見物と行かせて貰おうか。見物料は既に前払いしてるからな」

「あれ？ 王様？ なんでこんなとこに居るの？」

三者面談　　面子は魔王と神と神祖と言つた笑えない面々なのだが　　を終え、幽世の海を超え現世に戻る寸前で清秋院の目が覚めた　　というか人間に戻つた。

そのまま化身を解き人間に戻ると同時に清秋院を抱き上げると状況の理解できていないであろう彼女に説明をする。

「ああ、こつちの話は終わった。どうも、清秋院にも聞かせたくない

「い事があつたんだとさ」

「酷いじいちゃまだなあ。確かに今回の一件が終わってから連れてこいとはいわれたけど」

王様が来たのは恵那の所為じゃないよねえ、等と言っているが今回、彼女が小柄あんなすがたになったのはどちらかと言つとこつちの所為なので申し訳なく思つたりする。話す訳にはいかないが。

「で、清秋院よ。もう夜遅いが帰れるのか？ 送つても良いし危ないようなら客間で泊つて言つて貰つても構わんが」

幽世から戻つて壁時計の時刻を確認すると日付が変わりそうだった。出たのが8時前だから3時間は優に過ぎていた事になる。

何処に寝泊まりしているかは知らないがこのままはい、さよならと送り出すには物騒だ。如何に腕っ節が立つといえ女の子にそうする訳にもいかないだろう。

「いいの？ 恵那としては有難いけど」

「こんな夜更けに女の子1人おん出す程、鬼じゃない積りだ。というか寧ろ清秋院が良いのかという話なんだが」

最も、着替えやらはないから寝巻は母親のを使って貰うにしろ下着の類はコンビニなりで買って来て貰う事になるが。

「それじゃ有難く泊めさせて貰うね。それじゃ買い物にいつてくるから王様も道案内お願いしていい？」

「オーライ。それじゃそのコンビニまで行こうか」

コンビニで雑多な消耗品を一晚分買いこみ家に戻ると夕食の支度を始める。

夕食、というか昨日作った鶏肉のトマト煮の残りを煮詰めてソースにし、スパゲッティを茹でて絡める。後は簡単に生野菜を使ってサラダを作って簡単な夕食の出来上がりだ。

尚、翼はドレッシングは使わない派である。基本、生野菜はバリバリそのまま齧るので知り合いには変だ、と言われているが変える気はなかった。

食卓に料理を載せ向かいに座らせると頂きます、と挨拶をしてか

ら食べ始める。

「ほい、おまつとさん。簡単で悪いな」

「うっん？ 都会だと手が込んだ料理が食べられていいよね！ 山だと木の实とか山菜ばかりだし」

話を聞くと修業というか荒行？ しょっちゅう深山に籠って山籠りをしているらしい。どこの修験者だと問いたい。恐らくはスサノオが居たような霊山に籠って修業をしているであろう事は翼にも想像がついた。

神刀、天叢雲剣を使うにはそうする必要があるらしい。細かい理屈まではわからないが神具をヒトの身で使いこなすにはそれなりの準備が必要なのだろう。

その後は翼の戦歴、アレクとの戦いやこの間のモレクとの戦闘を簡単に話したりしながら食事を終わるとお互い何を言うでなく其々の寝室へ向かう。

何の前準備も無しに幽世に赴く等と言った無茶をこなしたのだ。カンピオーネである翼はともかく清秋院には疲労が溜まっているのだろう。

お互い、体が睡眠を欲しているのは確かなので布団に入り眠りに就いた。

翌日。

「お初にお目にかかります。カンピオーネたる御身を御呼び立てた無礼、お許し下さいませ」

放課後、七雄神社という閑静な神域に呼び出された翼を待っていたのは巫女装束の後輩だった。

眼の前に佇む万理谷祐理。城楠学院中等部美少女コンテスト（有志調べ）においてダントツの一位を獲得した美少女。

「万理谷祐理と申します。本日は、突然の来訪、失礼いたしました」

清秋院に確認した所、彼女の同僚でこの神社もかなり立派な神域らしい。序に言つと眼の前の少女が奉職する場所でもある、との事。しかしまあ、態々学校で目立つ接触をしないで欲しかった。三バ力を宥めるのが大変だったんだけどなー。翼の脳裏によぎる感想はこんなもんである。

『ああ、あれが正史編纂委員会の使いつぱか』

前もつてスサノオに言われていた為、驚きはなかった。というか昨夜も似たような展開に出くわした気がする。

どうみても二番煎じだ。そんな感想を抱きつつ眼の前後輩の言葉を聞く。

『なんつつーか。ソフト買う前に攻略本読んでシナリオをしつちま
った感じだよな』

そんな益体も無い事を考えながら。

? / 03 ・蛇と義母と剣神と（後書き）

後書き：てな訳で呼び出された理由解説です。てか、それだけで済んでね？

序盤で此処までネタばれする気はなかったんですが。其処は二次創作の恐ろしい所で。

「幽世に自力で（会いに）いける」

「竜蛇の神格持ち」

「神祖、鋼（グイネヴィア一党）に相对済み」

「パンドラに最強の鋼の話させる」

上記の条件を満たしていると此処まで話すしかなかったという（爆）。寧ろ、イギリスと日本の関係者になった事でカンピオーネ！の核についての情報開示フラグをほぼ全てクリアしてしまったというべきか。

？がなければ護堂と同じように暫くは放置されたと思うんですが。さて、ぶつちやけ、肝心の神獣退治が茶番劇な訳で。どうなるやう。

では、感想、批評その他諸々頂ければ幸いです。

・余談：とあるコメントで「コピーって卑怯じゃね？」（意識）「と

いう意見を頂いた。ふと、割とそう思われている方もいるのかな、等と思い自己の正当化を図る。以下、その際の思考。

認めよう。確かに、権能一個で巨大化と12個権能獲得は卑怯かもしれない。しかし。しかしだ。神話的に

『大丈夫だ、問題ない』

と断言できる組み合わせを既出の公式設定と組み合わせているのだ。『大力金剛神巧』や『貪る群狼』と構成的には同じだし『世界観（神話）的には全く』問題は無い。

どこから突っ込みを入れられても問題なく論破できる構成である。むしろ、大概の相手なら相手の構成の粗を戦士の剣直しく論破して言峰式解体を行いきる自信がある（マテ）

権能に関していうなら。「この神だから是」というのでなく全ての権能に「この神ならば是で翼ならこの方向性だからこうなる」と言った風に持たせている積りだ。

只「問題はないが余りに卑怯な」能力をチョイスしているだけである。是は翼の中の人、つまり私がそういったチョイスをするだけなのだが。

尚、物語スタート時の権能数は1、今ですら2である。是は凡そ全てのオリピオーネよりも少ないのではないだろうか。

個人的には初期から持つている逸般人出身の素ペックチート共に言われたくない、というのが本音だったり。尚、蹂躪系とトリツパー、クロスの要素はカテゴリが違うので除く（OHOR）
こっちは元一般人だから基礎戦闘技能がないのだ（笑）。

恐らく、キャラシーとして作成すれば其処らの戦闘技能と権能を含めてトントーン、むしろこっちのが少ないと思うく総CP。
等とちと愚痴ってみたり。

まあ、ドライト並の和マンチキャラというのを否定する気はない

が。

尚、メアリーも公式嫁達と較べると総CPこそ負けるが和マンチ構成全開スペックで互角、という感じである。

以上、QED 基い脳内思考の垂れ流し。そんな愚痴をふと浮かべた今日この頃。おっさんが何を噛みついてるのかなあ、と自分で書いてて嫌になった(苦笑)。

ぶっちゃけ、コピーってのは「コピー元(王)が山ほどいる」からこそ有用なんであって(神なら出会った時点で斃す(権能ゲット)か死ぬか)、権能単体で見るとそう使い勝手が良い訳ではないんだよな。

尚、を書く前の知人との会話(抜粋)。かなり失礼かつ判る人にしかならないネタが多々ありますがご了承下さい)。

Ji3 あれだ。俺も(絶賛エタリ中の)リリカルProductsでしみじみ思ったが。最初に壮大な目標を掲げすぎると気力が尽きた(爆)

知人 うん、壮大な目標があると何ていうか、気力がガガ。

Ji3 つーか。付与しないで地道に環境整え中なんだろうが……

俺、此処でマークスは力尽きた(苦笑)

知人 普通に環境整えてると、その間に折れる(笑)

Ji3 大変なんだよ！ 最後まで伏線、此処で全部はらんとあかんし！ なのはだから余計に。

知人 ！？(笑)

Ji3 なまじ固定観念があるから。しっかり書いておかないと「其れ違うんじゃない？」というつつこみが来る恐れが棄てきれん。勝つ為の裏技構築設定だから。逆に一から書いて行った方がそういう意味では楽や

知人 確かになー(笑)

J i 3 世界設定がきくたけ氏とか神一郎氏並に「裏技を使えるほどしっかり書きこまれていれば」楽なんやけどな。基本、あの世界「なのは達は無敵です。ランク最強です」しかないから(遠い目)。学生演劇の書き割程度の設定しかねーんだもの。

知人 確かに、それはねえ。

J i 3 そんな訳で。カンピオーネ楽しいです(爆)

知人 (笑)

J i 3 いや、現代世界なのと。「史実に沿った神魔が現れる/斃せば能力が一部入手できる」だから。すごいやりやすい。GURPSで言うと。100 150CPで600CP妖怪斃して。基本セツト(復活削除)と妖力、妖術一部手に入れていきなり350CPにランクアップって感じ(笑)

知人 そりゃそれが出来た時点で色々と凄い事になるわなあ(笑)

J i 3 公式主人公は10個手に入れたけど全部一日一回、他限定できつと10%位にまでマイナスかけて納めてる(笑)……そんな中、こっちは変身(怪力と飛行)と妖術複写(増強、永遠/12Lv)。実際マンチに徹するなら複写はとらんねんけどな。

知人 じゅうぶんひどいはなしだよねそれ!?(があん)

J i 3 神話的には問題ない。公式の設定から問題ないと確定した枯れた設定のみ採用しているのだ(爆)。皆「の神だから」とかの中で神話構造解析、マンチ構成に走ったのは否定せんが。先輩にも「(ルールのにはともかく)コピーはズルいな」と言われた(笑)。

知人 (爆笑)

J i 3 つーてもなあ。カンピって「神話(史実)って下手な現代フィクションより面白い」がコンセプトだから。「単なるヒーロー特性」

になってる二次を見てると思う所はある。それもありっちゃありなんだろうがな。

J i 3 「とりあえず最強」「王様能力」に目がいつて。話を進める為のその辺りを考慮してない話が多いっばいんだよね。魔王の立場からして書きやすそうに「見える」のは確かだが。

知人 と言うか、基本的にあの手の話をもとにSS作ろうとするとよほど話を考えて作ってる人じゃない限りは能力に惹かれて、ですからね。自然に物語より能力に比重が置かれてしまします。

J i 3 そだね。で、能力も「こんなんが良い」と考えて書くのは良いんだが。此処にカンピオーネ最大の落とし穴があつてな？

知人 うむ？

J i 3 公式主人公の最大の武器が。「言霊の剣」でな。「神の来歴を暴く事で神格を切り裂く」という能力なんだ。良くある「秘密を暴かれた神秘は只の事実になり下がる」という。

知人 あー。なんてーか、NWの裁定者能力

J i 3 「あれは神じゃない。だから只の物だ」つって力を奪うと言う意味では同じだわな。で、で書く様な「こんなしゅじんこう」を創造して。主人公の脇に置いた場合。「新たな敵（オリ展開）」を用意できない。

知人 新しい敵を出そうにも、その敵を打ち破るだけの知識（＝元となる神話）が無い、と（笑）

J i 3 うむ。公式でやってるのが。アテナで権力を奪われた地母。太陽を奪い取り出世したアポロン、だから（笑）。下手なモノを書くかつつこみが来るのが確定な訳で

知人 伏線仕込むのがやつぱり面倒よねorz

J i 3 楽しいよね、仕込む最中は（笑）。そしてその道のりに気づいて愕然とするんだorz

知人 うむー……orz

知人 最後の方で読者に「え、これ此処につながってたの!？」と思わせるためとはいえ、なあorz

J i 3 とりあえず俺が学んだ事。二次創作でオリ主投入なら「ヒロインは最初からくつつけておいて筆者のやる気がつきたらいちゃ

いちやさせて行数を稼ぐ！ 関係は過去編で捏造！」（マテ
知人 卑怯な！？気持ち解るけど！（爆）<いちやいちやさせて〜
Ji3 その為の！ 「公式キャラの縁者（従妹）キャラがヒロイ
ン」だ！（爆） てか、既にキャラクターが有る程度完成している
川上都市ヒーロー形式は二次創作だと書いてて楽。オリジナルだと
世界を語る必要がでてくるからなあ
知人 その辺便利よねー。<公式キャラの縁者だと組織利用とか

？／04・蛇と忍者と拝謁と（前書き）

前書き：甘粕が納めた技能は修験道、忍び、陰陽道のコンボとあるが。呪術屋としての忍者って基本、修験道ベースだと思っただが…
…NINJAとの区別用にあえて明記したのかなあ？

「さて、始めましたか」

とある平日の放課後。高松翼カンヒオリーネと万理谷祐理ひめみしが学内で接触、放課後に会談する運びとなった為、双眼鏡と術による視力の強化を使つての遠目からの監視。

境内にある杜の所為で下手に近くでは覗けない。幸い七雄の神社の周辺は高層ビルが多い為、そちらから監視する事になったのだが。境内がそれなりに広いからこそ取れる手段だった。是がもつとこじんまりとした神社ならばこうはいかない。

この役目が廻つて来た今回の監視者　甘粕冬馬は呪術に縁深い家の出である。と言つても清秋院恵那や万理谷祐理の様な良血の血統ではない。在野、流しの拝み屋と言つた方が近い。

所謂呪い屋。符術師や飯綱、管狐使い、天狗法の使い手等が近縁種だろうか。忍びの技と修験道、陰陽道が混淆した呪術。そんな家の末裔だ。

元々、呪術者としての乱波らんぱ自体、熊野山系等の修験者の系譜だ。元が所謂『日本流ごちゃ混ぜ魔改造術』なので同じ様な陰陽道との相性も極めて高い。

故に、技能、心情、共に隠密活動の様な単身での活動にこそ本領を發揮する。こういつた仕事は御手の物の筈なのだが。

「と言つても。流石にこんなのはやりたくないんですがね」

王と媛巫女の会談　否、拝謁というべきか　の監視。視覚を飛ばす類の術も検討されたが呪力に感づかれるとまずい、この事で結局お鉢が廻つてきたのだ。もつとも。

「やだなあ。王様なんてどんな手を持つてるか判りませんし」

本音を独り言でぶつちやけつつ監視を続ける。甘粕としては正直

この一件避けたかった。

賢人議会の報告書入手してから情報の真偽を彼の上司である沙耶宮馨と討議したが、『能力はともかく、性格は話半分』という結論に辿りついた。

けんしんぎかい
英国に実質的な所属と地盤を持つカンピオーネ。ならばある程度恣意的に情報にブラフを混ぜるだろう、と。その点に関しては甘粕自身、異論はなかったが監視を行う事に関しては反対だった。

自分が行う事は確定だったし、権能からしてどんな手を持っているか判らない。何より。

「この手の相手に下手に監視なんてすると怒らせるだけだと思っんですよねえ」

コーンウォールを焼き尽くそうとした一件やイタリアでの逸話が何処まで本当かは確証がないが彼が関わっていた事は確実だ。甘粕の見た所、彼は自分の廻りにちよっかいを出されるのを何よりも嫌うタイプに思える。

「いわゆるアレです。『庭までは入れるが玄関には絶対に上げない』どころか『自分の縄張りに誰かを入れる事すら嫌う』タイプですよ、きっと。独占欲も強そうですし」

世の中にはいるのだ。石橋を叩き壊してから渡るような輩が。

『正史編纂委員会、貴様見ているなっ！』

不意にゾクつとした感覚と共に誰何の声が身を走り抜けた。まるで蛇に睨まれた蛙のような 否、何かに確実にみられている。

そう不意に確信し感覚のみを頼りにその場を飛びのく。刹那、今まで居た場所に火炎 人魂 が発生した。動かなければ燃え尽きていただろう。

「大人しくすれば手は出さんからこっち来やがれ。汚いな流石忍者きたない」

気がつくとも目の前の空間が裂け、そこから赤い蛇の頭が此方を睨んでいた。人間を丸のみできそうな巨大な紅い蛇。

恐らくは話に聞いていた権能、『混沌カオスの世界蛇ヘンズ』だろう。

もし此処で逃げてもどうなるやら。逃げ切る自身もなく逃げたとしてもその場合の被害を考えても最早、甘粕に選択肢はなかった。

カンピオーネー！　赤き蛇の魔王！

？　妖魔夜行 / 04　蛇と忍者と拝謁と

高松翼は高校生である。故に当然ながら学校へと登校する。

「よくいらして下さいました、高松翼様。カンピオーネたる御身を御呼び立てした無礼、お許し下さいませ」

七雄神社にて対峙する眼前の少女。万理谷祐理。恐らくは正史編纂委員会の使者。

昼間で「さあ、昼飯だ」と自作の弁当を開けた所、クラスの外が騒がしいと思っただらこの少女が現れたのだ。

『お昼時に申し訳ありません。此方に高松翼様は居られますでしょうか？』
と。

チラッと視たが美味しそうな匂いがした。恐らくは清秋院同様、媛巫女とやらだろうと当て推量はついたが。ぶつちやけると関わりたくない、というのが本音である。何故に人目のある学校で接触するのだ。

面倒くさそうだ。そんな翼の内心も知らず静々と机の前にやってきた。周囲は「ザワ……」とか「あの男、草食系っぽい歴史オタクの癖に何時の間にも美少女を垂らしこんだ！」とかいう声が聞こえたが無視する。

「高松翼様。御身に不躰な願いをするのは無礼の極みと存じてはおりますが御力をお借りしたい事柄が御座います。どうか放課後に

お時間を頂けないでしょうか」

「なに、一体何様だ！」

「高松の奴、実はエライ人だったりするのか!？」

「くそう、きつと権力を使って美少女を手籠めにしたに違いない！」

万理谷祐理の言葉にクラスメイトが更に騒ぎ出す。確かに誰だつて気になる。俺だつて気になる。

是以上騒がれても困るので了承の意を告げると住所とルートが書かれた紙を渡された。背後で「ラブレター!？」とか「ばっか、祐理ちゃんなら恋文だろうJK」とかいう声は無視する。つか聞かえない。聞きたくない。

その結果、三バカが昼休みも終わらぬうちに。

「先輩、貴方は……貴方は! 我々の同志だと信じていたのに!」
名波、すまんが同志になった記憶はない。

「先輩、何時の間に学舎の違う彼女を口説いていたなんて。下級生、それ即ち年下、義妹! 裏切ったな! 僕達の気持を裏切ったんだ!」

反町、裏切るも何も約束していないだろう。後、彼女は義妹じゃない。

「巫女さん……はあはあ。ころしてでもうばいとる!」

高木、其れは何処のアイスソードだ。彼女は俺の彼女じゃない。俺の所有物にはなるかもしれんが。

こんな暴拳をかけてきた。何時もの暴走だし何時もの通り処理したが。問題は万理谷祐理が学校で接触してきた事だった。

この三バカの行動は極端な一例だが。詰まる所万理谷祐理は美少女である。中等部だけでなく高等部で評判に成程の美少女である。学園で知らない者等居らず現状、学園美少女No.1の地位を保っていると言つて良い。

大事な事だから二度言いました。

即ち、彼女が接触するという事は俺の廻りが騒がしくなるという事と等式で繋がる訳だ。

と、いうか。そも依頼の内容は判り切っている。即身仏が仕立て上げた何かの退治。後は俺の見極めと言ったところだろう。そんな事を思いつつ『電光石火』ブラックライトニングで七雄の神社へと向かったのだった。

結果、万理谷祐理が来るまで一時間近く待ちぼうけを食う事となったが。

因みに。城楠学院からだと普通に向かう場合、根津から大手町まで千代田線を使って後、千代田線に乗り換える。余裕を見ても30分もあれば十分である。

高松翼は魔王カンピオーネである。公式にもそう認められている。と、いうか正式に発表されたのはつい先週だったが。故に彼には神を弑し奉る……要するに神を殺すのがお仕事である。義務は是だけだ。

と、言っても人間生きてる以上は色々としがらみが有る訳でそういう訳にもいかない。

神でなくても神獣やそれに類する怪異の類は王が出張った方が手っ取り早いし王の存在、庇護というのはそれだけで十分な重みを持つ訳で。

ぶっちゃけるとそれ以外の事をするかは完全に魔王次第だ。

サルバトーレ・ドニはそれ以外は好き放題だし（と、言っても彼の執事が色々と仕事をさせているし本人にそういった欲がない）、それすら恐る恐るらしいヴォバン侯爵。

逆に自分の結社を統率していらん事まで引き受けているアレクやアメリカを護って邪術師の結社と日々戦っているJPS（仮面の扮装をした正体不明の人物だ）なんかもいる。

自分こと高松翼はどちらかと言えば後者に属する。この半年、ヒツポカンパスやらアーヴァンクやらブラックハウンドの退治。後、ついでにアレクとの冷戦友好状態構築等かなり精力的に働いている

からだ。

閑話休題。

「で。正史編纂委員会の媛巫女が今更何の様だよ。俺としては君らに特に用はないんだが」

とはいえ、それを選ぶ権利位はある訳で。いきなり言われても従う義理もない。日本人ではあるが日本の組織に従う義理がない。

「其処まで御存知なのですね。私が御身をお呼びたてしたのは真のカンピオーネか見極めよと指示されたからでもあります。同じ学院の生徒だったというご縁もありましたが」

「いや、それ関係ないだろ、思いつきし」

バレないように権能を使って来た。というか今まで現に全く気づかれていなかった。最初の接触がスサノオ達の指示を受けた清秋院恵那な時点で日本は結局、翼の存在に気付けなかったと言って良い。畢竟、翼は日本在住だが彼らの言う事を聞く理由がないのだ。古老 正確には玻璃の媛 達の依頼もあるから今回は受けるが。彼らの話を聞く限り自身が『日本で活動する』事その物が危険視されているようだし。

「王であるならば仁徳を持って民を慈しんで頂きたく存じます。何卒、そのお怒りは私のみに帰するようお願いいたします」

「そんな事を言われる覚えは 無くはないけどそこまで言われる義理はないぞ」

最近では『英国の赤い蛇』^{フレンチ}という二つ名が広まっているらしい。半年程度の短期間で精力的に活動はしているが言うほど活躍した記憶はないのだが。

というか二つ名に地名がつくって何さ。英国がメイン活動地域だが歴とした純血の日本人の筈なのだが。

尚、余談だが既に騎士爵を持っていたりする。『王』にそんなもの畏れ多い、という意見が大勢を占める中、賢人議会の1人、キン

グ卿　　メアリーの後見人　　が押し通したのだ。曰く。

『例え王であろうと。否、だからこそ合法の通行証は必要だろう』
と。知らぬは本人ばかり。

「貴方が黒王子様と戦われた際、コーンウォール一帯を構わず火炎で焼き尽くしたと伺っております。お怒りの発露としてに無辜の民を脚蹴にされるような真似なさるなんて恐ろしい方　　」

「あー、そんな風に伝わってるのか」

王になった後のイギリスでのごたごた。アレクと戦った際に雷化して此方に一撃離脱を繰り返す相手に対して翼が取れた対処法はそれしかなかったのだ。

まともに戦り合っても敵わない。ならばどうするか。あちらから当たりに来て貰えば良い。

そして火力と装甲と耐久力のみが勝敗を決める

『足を止めての殴り合いに無理矢理持ちこむ』

その為にアレクの本拠地諸共攻撃を行ったのだがそう伝わったらしい。そういう俺はどういう風にレポートに書かれているのだろうか。

しかし、説明した所でこの巫女の理解は得られない、その程度の把握はできた。何より魔王と書いてツカドンの奇人変人大集合と読む連中に仁徳を求めるとき点で間違っている。

そんな、翼の日常（へいあん）が引つ掻き回されイラついていた所に忍者が居た。確証はない。しかし、日本の諜報担当ならきつと忍者に違いない。

忍者。NINJA。（きりしゅつつかい　にんじゃせんしとびかけ）全裸首狩。経験値泥棒。

そう、NINJAならば何をしても問題はない。だって忍者だもの。そんな思いを胸に『混沌の世界蛇』を発動、目の前にひっ立て来たのだった。

手順としては『大迷宮』の異空間を介して手を蛇に部分変化。目標地点へと送り込む。

『とある超獣（バキシム）の空間移動』と言った処か。

「甘粕さん！？ 何をなさっていたのですか一体！」

目の前に居た王、高松翼が急に腕を赤い蛇に変えたかと思うと目の前に空間の裂け目、としか形容しようのない物を作りだし手を突っ込むと暫くの後、其処から出て来たのは先日出会ったばかりの正史編纂委員会の人間だった。

蛇に巻きつかれた拘束状態から解放された彼にまず反応したのは万理谷祐理。

「いやあ、王との謁見を遠くから護衛させて貰ってたんですが気づかれてしまいました」

この場に至っては最早開き直るしかない 普段からそんな感じではあるが 為、ヘラヘラと笑いながら監視していた事を告げる甘粕。

「王よ。一体、何をなさっているのですか！？ そのような暴虐な振る舞いは」

「え？ 盗み聞きしてた忍者は『曲者！』つって槍でプスリされるのがお約束じゃないの？」

「日本家屋では火災で燃やされるなんてないですよ」

「そりゃ、江戸の放火は死罪と決まってるからな 八百屋お七宜しく。ルーかオーデインでも倒してたら槍でも持ってたのかもしれないけど」

かつての命綱たる物干竿も既にその手から喪われている。今の翼は武器を持っていなかった。

「高松翼様。では甘粕 此方の方に何かなさったという事ですか？」

「寛容を示せと言うけど。判つて盗み聞きする奴にまでそれは及ばないだろ。まあ、手加減はしたし生きてるから良いじゃん」

「明らかに直撃したら骨までコンガリ焼かれてたでしょうけどね」

「煉獄の権能だからね。だって忍者だから大丈夫だよ」

実際、大丈夫だったし。そんな風にのたまう目の前の王に甘粕は危機感を覚える。この男も忍者という単語で全てを片づける気だ、と。

「私としては寧ろどうやって気づいたを宜しければお聞きしたい所ですが」

何かの権能を使ったか純粹に技術として気づいたのか。仮にも本領といふべき分野であっさり気づかれた事は甘粕にとって一大事。駄目もとの冗談半分の質問。答えは期待して居なかったが予想外にあっさり返答が返ってくる。最も、その答えは甘粕にとっては絶望と同義だったが。

「あー、確かに見事な隠形の術だったよ。イギリスでも見たことない位。只、あんた　　甘粕で良いのかな？　　『美味しそう』だったからね」

「アザゼルにそんな権能まであるんですかね？」

「んにゃ、これはモレク」

つい先日翼が手に入れた第二の権能、『ゲヘナクリメイション煉獄魂炉』。魂喰らいの悪神モレクから篡奪したこの権能で現在判明している事は火炎、そして魂を取り込み炉心にくべる事での権能や身体能力の増幅。

逆に言うと、魂を入手する過程である程度の判別能力は持っていたりする。

燃料補給がてら七雄の神域を起点として広範囲に雑霊を吸引すると二つ程明らかに別格の魂を感じた。一つは眼の前の巫女。もうひとつがこの忍者という訳だ。

リーダーのように探知できる訳ではなく『あ、なんかデカいがあるな』程度のパッシブソー的な感知。是は権能の本義とは異なる副次的な産物だったが術者を相手にするには有効だった。

そんな理由で、翼は甘粕かんぱくの存在に気づき行動を起こした訳だが。もし違えば人間の丸焼きが一つできていたが其処は其れ『監視する奴なんてマトモな人間じゃない』と判断を下していた。

日本での関係者の知り合いなぞ恵那しかいないのだから知り合いではない。故にオツケーと行動に移したのだった。

恵那の知り合いだったら？ とのIfは考えない。だって生きていたんだから良いじゃないか。

この場に居ない英国の面々に聞かせればやはり、彼もカンピオーネだと言うであろう。そんな思考法。

「てーかさ。とりあえずおためごかしと、そう見せかけたこの茶髪巫女の説教は聞きたくないから本題入ってくれない？ ぶっちゃけ、面倒くさいんだが」

同じ学校の後輩かつ容姿に優れ、靈視を持つ万理谷祐理を初期相互接触要員に任じた正史編纂委員会、より正確に言うならば沙耶宮馨の判断は至極当然の物だ。

翼の年代ならばそれで大概通用する。実際、彼が英国に心を砕く理由の一端は愛人の存在故間違っではない。

しかし。

美少女という意味では間違いないだろうが。彼の心には既に金髪メアリー・ルイ美少女が巣食って要塞を築いている為、其方の補正はなかった。

更に言うなら王になる前に知り合ったメアリーと違い、翼にとつて眼の前の少女は『王の力に擦り寄ってくる癖に訳の判らない事を要求する女』だった。

此方の意味……王に接触する人間、という点では前日、清秋院恵那に直接的な訪問、要請を受け、古老達と接触した後では既に茶番にしか見えず。

神秘的かつ年上の憂う美女に切々と訴えられれば（脳内意識）どちらを優先するだろうか？

おまけに翼は基本的に『他人に何か指図、強制されるのが何よりも嫌い』だった。この少女は願うようできて此方に英明な君主である事を要求し、かつ空気を読めない。

その行動の一因として事前に吹きこまれた『愛人』という言葉が為に翼を『非道な人物』という先入観で判断している事もあるが。

だが翼はそう判断、そして『うざったい女』と認識した。

余談だが翼は英国では至極真つ当に民を護り願いを聞き入れている。賢人議会との和解の後、英国で振る舞っているように。モレクと戦った際、犠牲者を減らそうと試みたように。

彼にとつて英国とその地に住む人間は既に魔王として護るべき対象であり民も又、彼を守護を恃むべき存在と認識していた。

其処は女、巫女として翼の懐に入り込んだメアリーメアリーの間の取り方の上手さや彼の扱い方を理解し巫女との交渉を行う賢人議会の老人達、実務を持つていく顧問のアリス姫の手腕なのだが。

高松翼という人間は個我を基準に動く人間だ。その意思を全体の幸せへと拡大していく。イギリスを護るのも結局の所、一個人メアリーの為というのが基点として存在する。

その一方で万理谷祐理は犠牲を当然とされ、全体の幸福を個人へと落とし込んでいく純正の巫女だ。「女ではなく巫女という生き物」と言っても良い。

そも、正反対の思想を有し一方が圧倒的に立場が上。是で相容れる訳がなかった。

いふなれば。万理谷祐理はどこまでも『間が悪かった』。

ある種の冷戦状況、これを変えたの忍者でも王でも巫女でもなく。

「ああ、王様。祐理はこういう人間だからちよつと多めに見てくれると嬉しいかな」

横合いから現れた清秋院恵那だった。昨夜と同じブレザーに天叢雲剣を背負っている。

「恵那さん！？ 何故、此処に居られるのですか」

「え？ 王様。翼さんにお仕えるようになって言われたからかな、後は祐理がちゃんとできてるか見てこようかなって」

「委員会ではまだ接触すらしていないんですよ？」

「うん、おじいちゃま達が独断で動いてるんだもん。珍しいよね、あの人達が此処まで拙速に動くのは」

「御老公達ですか？」

「ああ、彼がこっちの存在を知っていたのはその辺りもあるんですか。では簡潔に説明させて頂きます」

今回のからくりを悟ったか。甘粕は諦め顔に。気を取り直して説明を始める。

詳しい理由までは判らずとも、古老達が既にこの少年と接触している事と巫女　万理谷祐理　との相性が悪い、という事は甘粕にも理解できた　自分への行動が八つ当たりだということ事も含めて。

「まあ、とりあえず。此方の御依頼を受けて頂けると思って宜しいですかね？」

「断る理由もないからな。只、彼女の同伴は避けたいところだけど」「一応、彼女も貴重な能力の持ち主ですので勘弁して頂きたく。役に立ちますから」

気を取り直して改めて実務的に話を進めて行く。先程と違い、極めてトントン拍子に進む内容に逆に甘粕自身があっけなさを覚えたほどだ。

「しゃーないか……で、何時何処に行くの？　是から向かっても構わんけど」

「できれば今直ぐ、と行きたい所ですが。まだ『発生していない』んですよ」

「なら封印するなり気を散らすなりできなかったのか？」

「そっちも試みましたが。どうも、地脈辺りから呪力が流れ込んでいる様で。散らしても意味がないんですよねえ。散らしてもまたすぐ溜まっていくので」

甘粕の説明に即身仏の言葉を思い出す。

『うまい具合に手頃な核があったのでそちらを元に手前が仕立てさ

せて頂きました』

あの人外の仕込みなら相手として流石に分が悪かるう。発生した所を叩くしかない。

「ま、大体事情は判った。つまりは生まれたてをぶったたけ、と。とりあえずな？」

不意に雰囲気が切り替わる。まるで今までの話等どうでも良いかのように。恐らくは彼にとっての本題なのだろう。どんな要求が来る事やら、と身構える。

「出席日数ヤバいんだ。公欠扱いにしてくれ」

「はい、それはもう。そういえば翼さん二学期からの欠席早退遅刻でギリギリですからねえ。そっちもついでに同じ扱いにしときますよ」

「おお、素晴らしいな正史編纂委員会！」

眼の前でガッツポーズを取る翼を生暖かい目で眺めざるをえない。「魔王様は神様退治より出席日数の方が大事ですか」

「当たり前だ。神様退治したって権能が増えるだけだけど出席日数が削れると留年するんだぞ」

苦笑気味に呟く独り言に当たり前の様に返答する翼。まるで林檎が大地に落ちるのが当然、といった感覚だ。

「賢人議会はイギリスにあるから日本のこういった事には頼れなかつたんだよな。まあ、あんときゃ一般人扱いだったし」

「ならとつとと魔王様とカミングアウトしてれば良かったのでは？」

「面倒くさい。てーか、んな余裕なかったしね」

あれで、飛行能力がなかったら間違いない留年してたよなあ、と感慨深げに呟く翼。

「ああ、それじゃ王様も恵那と同じだね」

「清秋院もサボリメインなのか？」

「うん、修業とか山籠りで元々殆ど行っていないんだ。其れ位後でどうとでもしてやるって婆ちゃんが言ってたしね」

「いいなあ、清秋院。なんて権力者だ」

「え？ 王様も家に来れば其れ位簡単だよ？ 清秋院の家はそういうコネと権力幾らでもあるし」

「おお！？ 言われてみれば。ま、其れはおいておいて」

雑談をきりあげ甘粕の方に向き直る。後、最後に聞くべき事が残っているからだ。視線を感じ取ったか彼も居住まいを正す。普段のおちやらけた雰囲気が消えていた。

「王よ、如何なご用命で？」

「さて、騒ぐのはこの程度にしておいて。で、今回の相手は？」

「場所は夢の島、やる事は妖怪退治と言つべきですか」

t o b e c o n t i n u e d . . . < 2 - 5

・次回予告

君達に最新情報を公開しよう！

訪れし演台、現れる演者。

思惑を超え蠢く存在もの

赤き竜と骸の王が踊りし時 妖魔夜行は訪れる。

次回、カンピオーネ〜赤き蛇の魔王〜

蛇と骸と妖魔夜行

次回もこのアドレスでファイナルフュージョン承認！

是が、勝利のカギだ！>東京風水

〈幕間〉

「フーかさ。人選ミスじゃね？　この子」

「いやあ、同じ学校で美少女。普通は適役でしょう。こつまで相性が悪いとは思ってませんで」

「交渉事にコレはねーだろ。怒らせる前提だったのか？　おい」

「いやあ、あつはつは。愛人といったら其処に過剰反応したのは此方の落ち度ですなえ」

「判ってるなら止めろやおい」

? / 04 ・蛇と忍者と拝謁と（後書き）

・後書き：と言う訳で『日本』の交渉開始、古老達は『日本』の代表ではないからなあ……。

祐理と恵那（& 玻璃の媛）。どっちを翼が優先するか、という話筆者として厄介なのは翼が護堂と違って古老の目的（アーサー王関連）を既に知っている為『ぶれる事がない』んですな。

トリッパでないとはいえ、行動指針としては既にそういった介入者に近かったりする。此処まで意図した訳ではなかったんだが……。

冒頭の甘粕の発言ですが、さる読者様に「（2-1の報告書）どうせ腹黒姫の手が掛ってるし話半分位だろうとしか思ってたな」という意見を頂きました。

割と事実を書いていたんだが……と言う訳でこの意見を正史編纂委員会の行動に採用。まあ、言われてみれば『自分らのお手付きの王様の情報』を流せばそう判断するか。

此処らの認識の齟齬もその内に。いやー、読者様に頂く感想は良いネタになるな、本当。

今回、甘粕を探知したのにモレクの権能を使った訳ですがレーダー的な探知ではなく一種のパッシブソナー的なモノです。

ぶつちやけカービィや某GSのバサラ（式神）風に広範囲で魂、雑霊を吸いこんだら「あ、なんか抵抗してる美味しそうな（強い）のがあるな。よし、焼いて食べよう」といった感じですね。そーいや、アレも牛なんだな。

バサラで吸収してアジラの火力を上げる……GSになったら吸引札いらぬいな（笑）。……しかし、大迷宮、便利に使い過ぎている節はあるな。気をつけねえと。

尚、拙作では祐理はかなり貧乏籤を引くことになると思うので先に謝っておきます。

筆者は祐理に対して隔意が有るわけでも嫌いなわけでも……有るか。いや、都合のよい女なのは確かですが。この正論を主張するのがうざりたい。……正しい事を命をかけて願うような人間とは肌が合わんのだ。

なんで合わないかは本編で言ってますが。私にとって本質的に苦手なんだよな……てか、護堂の嫁は恵那とひかり以外とまともに付き合える気がしないが（苦笑）。

そも。まともに話し合いができないので一気に削った、とも言つ（苦笑）。

そして下がる男は偉大だよねえ……源流はスプリガンなんだけど。学生の御約束としてまあ、入れておくべきかな、と。そして恵那がまた攻略フラグを建てに。

真面目な話をする。恵那は「うざったくない距離で隙を見てする」と懐に入ってくる」から。二号、ないし1愛人としてはある意味最強なんだよな。

「元気娘」「破天荒娘」な所ばかりが二次創作だと目立っている節があるが。ぶっちゃけ、煩い事を言わずにつかれたな、癒されたいな、って時にごろごろもふらせて女になってくれるから通いたくなると思う（笑）。正妻あってこそ、の造詣ではあります。

で、本題。翼みたいなタイプが赤の他人から口喧しく言われても「何言ってるんだこいつ」としかならないという悲劇。他者に頭ごなしに言われる事をまず嫌うタイプにこのタイプは……（おい）。

一度殴り合えば理解できるかもしれませんが。態々、殴り合う動機がないんだよなあ。

例えるなら。「異世界召喚されたチート勇者が頭ごなしに命令されてむかついた」状態？（笑）。リリなの的に言うならSSストリッパーが管理局に従えと言われたとかいった感じか。

問題は相手をどう遇しても文句を言われないのがカンピオーネと言うものでして……原作ヒロインをぬつ殺すわけにもいかんしさでどうするか。次回に続きます。

PS：……説明だけで終わった気がするな。そして何気に文章量が少なかつたり。

執筆時BGM：砂塵の迷図 / Shinning Soul

とある執筆時の雑談は無しで。ぶっちゃけ、ネタばれが多すぎる。この話が終わった頃にでも。

? / 05 ・蛇と骸と妖魔夜行（前書き）

「私に良い考えがある！」

は人事フラグなら成功するんだが。てーか、コンボイの良い考えが実戦で失敗するのはメガトロンが一枚上手なのと味方の無能さでだという。あの適当さかつ無理矢理成功させる力技っぷりはカンピオーネが見習うべき所ではあると思うのだが。

後、国際空港なんてこの数年言っていないから細かい所が大分うる覚えだったり。

10巻でイギリスの情報が出る事を楽しみにしつつ。設定変更する恐怖で小便はおるか大便もひり出し、神様にお祈りも済ませ、部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOKな今日この頃。さて、ビーストウオ……赤い蛇の魔王、始まり始まり……なんか良い略称ねえかなあ。

成田・新東京国際空港

世界各国から日本への玄関口たるこの空港は当然ながら日本人だけでなく外国人の姿も多い。当然ながら、外国人というだけで注目を集める事はない。

しかし、小型のキャリーバッグを後ろ手に引きながら入国審査へと進むその少女はごく自然と注目を集めていた。

黒のベレー帽を被りそこからプラチナブロードのロングヘアが流れるように波打っている。

帽子と同色のトレンチコート、ベージュのブーツカットパンツにやはり黒いロングブーツを合わせた服装はそのまま何処か各地を巡る強行軍にも耐えられそうな恰好で取材旅行にでる記者か各地を巡る旅人の旅装のような装い。

しかして端麗な容姿の彼女が纏ったそれはまるで宮廷の姫君が纏うドレスの様な気品を醸し出している。コートの左胸に白字で刺繍された逆S字と点で組み合わされた模様フンポイントが異彩となつて居たが。

夜空の月の様な儂げな、しかし他者の侵入を頑なに拒みきる。そんな潔癖さをも併せ持つその在り方は当然の様に周囲からの視線を受けると周囲からの不躰なそれを当然のものとして無視し入国管理へと歩みを進める。

「Sight Seeing?」

入国審査官が、パスポートを捲り型どおりの質問をする。

「No...」

予期せぬ答えに、審査官がゆっくりとパスポートから目の前の、少女に目を移す。

少女は淑やかに、艶やかに、幸せそのものと言った様子で微笑み告げる。

「Marriage!」

カンピオーネ!〜赤き蛇の魔王

?・妖魔夜行/05・蛇と骸と妖魔夜行

妖怪。YOUKAI ヨウカイ。

ようかい【妖怪】

?何が化したのか分からないが、人を驚かす不思議な変化をみせるもの。化け物。

「変化」

「夢の島。うん、確かに夢の島とは聞いたよ」

目の前に広がるのは広大な植物園。江東区が公共施設。夢の島熱帯植物館。そろそろ夕暮れで閉館時間、と言った塩梅だが当然ながら自分達はそのまま残る形に。

「まさかそのまん文字通りの意味で夢の島だと誰が思うよ!？」

つと『堀切ちよみは世界で一番幸せです』を使用、エンチャントを破棄させる」

『大迷宮』での設定に使う程度には把握している。正直、今更な感がせざるを得なかった。辺りを散策する気にもなれず携帯ゲーム機のタッチペンタブレットを操作しつつの発言だった。服装は何時もの戦闘服である。

「いやあ、仕方がないじゃないですか。昔みたいな塵溜めでないだけましですよっとそれを通されると困るので『もう恋なんてしない

なんて言わないよ絶対』でそのカードをカウンターしておきましょう」

やはり携帯ゲーム機を弄りつつ言葉を返すのは甘粕冬馬。こちらも何時も通りのよれた背広姿。詰まる所通信機能を使った対戦だった。

「そうはいかん。『あいつを殴って良いのは俺だけだ!』を対抗してプレイ、ユニット属性がアウトロー以外のユニットは俺への攻撃はできない。んでもって『俺はリエと一緒に居るんだ!』をプレイ」
傍目には遊んでいるだけ(まあ、事実そうなのだが)だが判る人には白熱した激戦。しかし、わかるのはこの二人だけなので。

「王様。折角来たんだから一緒に見て回るうよ」
当然ながら横からこう言った意見もでてくる。

「見慣れた道でも美少女同伴なら多少は違うか……うし、現場確認含めて廻ろっかね。序に新魔球の特訓サンダーバキョームボールでもしようか」

ゲーム機の電源を切りベンチから腰を上げる翼。脇には恵那がくつついてくる。ごく自然に腕をからませる形になった訳だが。

「切ない心に愛は溢れさせないで良いですから闘志を燃やして下さいよ」

「怒りの炎は廃墟の中で既に天をついてるよ。そこの茶髪まじやゆり巫女との会話のストレスで」

「ははは……其処はまあ不幸な行き違いという事で勘弁して下さい」
苦笑を浮かべる甘粕に免じてまあ、水に流そうと思わないでもない。この人とはまあ、話ができるし清秋院は話していてストレスが溜まらない。そんな事を思いつつ今回の相手についての問い。

「つかさ。こんな所で発生する妖怪なんて、俺はアレしか思い浮かばんのだが」

「ああ、やはりアレですか。徒然草の」

「恵那も同感。吉田兼好だっけ? 『多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵』だよね」

「実際にはこの名前を思い出したのは江戸時代の鳥山石燕ですがね。

まあ、今は関係ないでしょうねえ」

三人で会話をしている訳だが。是、詰まる所『会話の内容が判っている事前前提の会話』だったりする。古典芸能や演劇のお約束を前提とした会話。形式こそ違えどオタク会話と変わりが無い。

この手の会話を行う人間は仲間には基本的に甘い。

「それでは。今回の相手は塵塚怪王と言う事ですか？ 羅刹の君」

「この流れで他に何が有るのさ　とか言つて外れたら恥ずかし
いから断言はしないけど」

先程まで好感度最悪だった媛巫女まりやゆりに対してまともな返事を返す程度には。

「そ。元は清秋院のいつてるのだけど。既に『ゴミでできた怪物』
でイメージが固まつてるからなあ」

「ある意味なんでもありですよねえ。その構成」

「うん。妖怪は妖怪だから……つーか、連中は時代時代が変わるし。
以前、軍事仕様ミリタリーモデルのと戦りあうハメになつて死ぬかと思つた」

「ほほう、ちなみにどんな構成だったので？」

「基本は人型だけど下半身はそのまんま戦車チャレンジャーの車体で無限軌道移動。
右背部にセンチュリオンの施条砲ライフルほう、左肩に地对空誘導弾ホークミサイル。両腕に恐
らくはファントム辺りの奇環砲バルカンがくつついててあれは、なんてガチ
タンだ、と文句を言いたかつたな本当に」

ドーザーブレードまでくつついてるから突進で轢き殺される寸前
だった。カンピオーネにお鉢が廻ってくるだけの事はあるバケモノ
だったと述懐する。

「泣けたね、あれは本当に。つーか、あれ、というかあの手の妖怪
の厄介な所として。外観が時代時代で変わるからなあ……ほら、唐
傘お化け。昔は唐傘だけど今はビニール傘だしね」

動物型等と違い、廻りの思念に成立が依存する故の外観の変化。
詰まる所時代が下れば下るほどその能力も上がっていくのだろう。

「本当に。厄介な代物だよおい」

塵塚怪王。一般には鬼の姿で書かれるがその実「良く分からない

動物の姿」と記されぶつちやけ、何でもありなのである。何より格が高いというのが厄介な訳で。学術的に言うなら。

「塵の王様かな。そういうと大した事ないっばいけど便所の神様とかいるし「無生物の冥府神」と思えば凄いいんじゃね？ 位としては鳳凰とか麒麟とかそういうLvだし。あっち風に言うなら北欧のガラムとかギリシャのケルベロスと同格」

「其れは殆ど神なのは」

「彼らは元来前世代の獣神。従属させられた神々ですから。神々という認識は間違っちゃいません」

「ケルベロスはオリンポスの前世代の獣神だけど結局、冥府の守護者って地位は奪い取れなかったしね。フェンリルがやるような神界^{ナロク}終焉なんていつでもできるからやらないだけだし」

「近頃はゲームの所為かすっかりちよつと強い魔獣という印象になっていますが。元をただせばマルドゥークと同位置に在る神格ですよ」

さり気無くそちらに話題を振る。情報からすれば彼の趣味はそちらの筈だ。予想通りすかさず喰いついた。

「だから『YOUKAI』ってカテゴリが広すぎるんだ。創世の巨人なだいだら法師や鍛冶神の一本踏鞴。以津真手なんてあっちじゃアレクの三女神だし。狐かと思ったらダキ二天、カーリーなんて御免だぞ」

「え？ 何故イギリスの黒王子様の権能が妖怪に？」

そして今度は二人の媛巫女は話についていけない。日本神話なら媛巫女として教育を受けて行くが彼らの話は全ての神話を総合的に見た上での話。

極端に言えば神話の全てを系統樹に纏めた上で抜き出しているのだから。

「要素分解した上で、の話ですな。かの三姉妹、ハーピーは半人半鳥の総称とされますが元をただせばクレタ島の山に棲む死の女神で風を神格化した存在です。つむじ風の精霊、音を伝えるもの、冥府^{ハデス}

神に仕え自殺者の魂を運ぶ死告乙女。北欧の戦乙女辺りとも源流を同じくできます」

「つまる所、屍肉を啄む鴉が魂の運び手として認識された訳だが……って、詳しいね甘粕さん。西洋だけならまだしも妖怪関連と混ぜて話せるとは思わなかった」

「まあ、仕事柄ですかねエ。で、近代ではグレムリンに魔改造される訳ですが」

「最後の空の騎士を無慈悲に連れ去っていくからね。機械を弄る妖精、という側面が強くなっているけど」

「ゲームだけじゃなくてそっちでも話が合うんだ。なんか妬けちゃうなー」

「あの、甘粕さん？ 高松さんも。話が脱線しているのではないでしょうが」

楽しそつに蘊蓄話を語りあう忍者と王を止めようと声をかける。

「おつと、是は失敬。ま、記紀神話に記されなかった王朝の神様が纏めて妖怪にされていると言う事ですよ。お陰で逆に懐が広くなつたとも言えますが」

「後は水木しげるで認知度があがった、つてのもあるけど。英語にも加わると楽なんだけどなあ、YOUKAI」

「何、スシヤカラオケやピカチュウに加えて一つ単語が加わつたと今さらでしょう」

「違くない……つと、雑談をしていたら出て来たのは有難いと言うべきか空気読めと言うべきか」

雑談に興じていると何時の間にもやら逢魔時。ある意味では相応しいというべきかもしれないが周囲から九十九神（？）とも思える道具がピョンピョンと跳ねて集まり、重なり次第に巨大な形を為して行く。

「なんで、今やゴミのないゴミ捨て場の公園でこんなのが湧いて出るかな」

「綺麗になつたと言っても清掃工場自体はすぐ隣に残ってますから

ねえ。そう言った意味では変わらないですよ」

連中に見れば此処は同胞が殺される処刑場。成程、化けて出るのもむべなるかな。等と言っている間にその塊は一つの姿をなした。

目に懐中電灯やLEDランプ等の集合体、鉄骨でできた骨格、冷蔵庫、ガスレンジ、扇風機、乾電池等、家電を寄せ集め、各部に埋め込んだ肉體。

全高20m程の怪獸型で式足歩行をするそれを一言で言い表すならば。

「ゴミから生まれたメカゴジラなんて洒落にならないな、おい」

「大怪獸対決ですねえ、では応援させて頂きますよ」

「マテや忍者。援護位……まあ、良いか。巻き添えになっても困るし」

基本的に翼の権能は物量勝負の美味なものが基本だ。呪文等の細かな制御は相方任せ、連携の取れない相手を庇いつつ闘うのならば一人の方がマシだった。そういう意味では傍らに無二の相棒が居ないのに不満を覚える。

彼女が居ればそんな事、考えるまでも無いと言つのに！

「そう言っていただけと有難い。では、頑張つて下さい」

「やーれやれつと。我は神話を為す赤き蛇　　我は叡智を盗む赤き蛇！」

言霊を唱え赤竜の姿へと転じる。昼と夜の境目、一瞬故の美しき刹那、現世と幽世の繋がる時、赤き竜と軀の恐竜の戦いが始まる。

緑なす庭園にて黄昏の赤を背景に二つの巨大な影が歩み寄っていく。否、空に浮かぶ赤竜に恐竜が突進していく。

突進しつつ恐竜の背から背鱗、鱗の様につき出ている容器が幾つも撃ちだされたかと思うと赤竜をめぐめて飛来する。

口を一つ開き火炎で迎撃を試みたがその半数程は振り回される火線を潜り抜け本体へと迫る。

恐らくは付喪神自体が取りつく事による知性化誘導弾。完全な迎撃を諦めたか赤竜Chrysalisを中心として球状の炎の幕が現れすっぽりと覆い隠す。

『煉獄魂炉』モレクのけんのうを応用した防御手段ほのおのかへ 翼自身は『焦熱結界』と読んで条件付けしていたりする レットボトルミサイルは飛来物を到達させる事なく溶解させる。

結果として、無法図に突進してくる事となった恐竜ちりつかいかいぢゅうルスインゲを尻尾で迎撃、勢いを殺した後、幾つもの頭で噛みつき礫状に吊りあげ上昇すると戦場を移す心算が飛び去って行った。

植物園で被害を出す訳にもいかず。掴んだまま隣の運動広場やトラックを目指し無理矢理引っ張り上げる。物と違って植物は誤魔化し、というか代えが効かない。

この程度の認識はこの半年間で経験していた。

ウオオオオオオオオン！

「って、口から放射火炎まで吐くかおい」

抵抗し暴れると同時に身体のおちこちから何やら色々出している。火炎、電撃、冷氣、突風。しかして悲しいかな鱗を貫けたものは何一つなかったが。

それでももうざったい事には変わりはない。四肢と尻尾、首筋を拘束している現在、残る頭一つを使い攻撃をしてきた部位を喰い干切る。

面白いように干切れる。差し詰め子供の頃にやった発泡スチロールに穴を開けるような感覚でバリっともげていく。最も、火炎だけ

が今だ止まないが。

良く見ると、口腔の辺りにガスレンジ(?)が装備されていて燃料噴霧もしているようで凶悪な火炎放射器になっている。周囲に飛び散った燃料が燃え上がり、植物園が山火事になっていた。

「こら、そうそう時間をかけてられないか」

アザゼル、モレク共に炎に縁深い神格の為、この程度の熱ではダメージ等負わないが、放置しておいたら夢の島が焼け野原になるのが確定だ。態々被害が出ないように戦場を移動している意味が無い。「ま、お陰で都合よく、燃料も補給できる訳だが……枯れ果てよ涙響け慟哭、我は其を喰い糧と為す」

新たに篡奪した権能の祝詞を口にする。魂喰いの悪神として伝わるモレクの行いに口に出す。

『煉獄魂炉』、モレクから篡奪したこの権能は火炎を放つだけではない。寧ろ、魂を燃やす事で権能の出力や身体機能の上昇を行える事にその真価がある。

燃料たましいさえあればいくらでも最大出力を消費無しで発揮できる。逆に言うと、この権能は使う為にそれだけの生贄を要する訳で。

幸い、今しがたの相手の攻撃で植物や其処に住んでいた虫、小動物の魂を確保できた。自分で殺すのはさておき、相手が殺したんだから問題はない。

うん、折角の燃料なんだから放置したら勿体無い勿体無い。放置して悪霊化しても困る。

と、自己正当化をしておいて炉に魂をくべる。

「やっぱこの程度のじゃ大して意味が無いか……俺、この依頼が終わったら京都に行くんだ」

この程度では魂の絶対的な質量が足りない。やはり理想は人間の子供、後は術者。怨霊辺りも良いが山羊か牛といった辺りが燃料としての質を求めるなら欲しい。うん、仕方が無い。

「お前らで我慢してやる。うん、是でクズオイルだったら許さんぞ？」

特に何も無いトラックに動力降下、落下の勢いを加えて叩き落とす。落下の衝撃でやや混乱状態なのか動きが止まっている。
「さあ。ちゃんと足掻けよ？ でなければ試射にならない」

「唸れ疾風、轟け雷光　　我は叡智を盗む蛇。我、盗みしは『建速風雷』！』」
はやのあらし　　たけ

『建速風雷』、先日スサノオから貰った　　本人基準で。傍から見たら見様見真似で技術を盗まれた　　かの神格の風雷神としての権能。

竜巻と稲妻を同時に打ち出す嵐の権能は恐竜を立ち上る竜巻の中に閉じ込め、身体を削り落す。無数に発せられた光条はその高電圧で容赦なく各部を焼き焦がしていく。

そのまま竜巻の中に相手を閉じ込め、拘束状態に持ちこんだ。

「超電磁ターナーキーっと。モレクとスサノオ。新しい手札の試し打ちも済んだ。さて、観客も見ている事だし最後は派手に決めようか！」

「この世の果ての溪谷に。在りし聖堂、捧ぐは小麦粉」

周囲、というより此处で眠る無機物、塵芥で肉体の修復を図っている様だがそんな暇を与えるほど翼は甘くなかった。この手の相手は既に慣れている。

「モレクと言い、俺の相手はこんな物量戦ばっかか　　枯れ果てよ涙、響け慟哭、我は其を喰い糧と為す」

煉獄に設えられた炉心、7つの部屋。その内の一つを言霊で解放する。

「我は炎。我は疫病。我を崇めよ。我は炎の吐息にて幾多の命を喰らわん　　捧げよ贄を！　　今宵は採魂の宴なり！」

全身が赤熱化、燃え上がったかと思つたと巨大な火炎が唐突に巨体を包み込み、火達磨にすると、九十九神の集合体を宿つた魂ごと焼

き尽くしていった。幾つの魂の数があるうと復活も何も関係なかった。魂そのものを触媒として焼き払い、喰らい尽くすのだから。

モレクの炎、魂を燃やす煉獄の篝火は死者を喰らい力と為す王の力。ならば骸の竜はそも勝ち目等ある筈が無い。何故ならば勝負ではなく、只の捕食行動に過ぎないのだから。

「さてさて。どうか感情の修復はできましたかねえ」

携帯ゲーム機での対戦プレイ。翼にしてみれば只の時間潰しだが甘粕にとってはそれだけではない。言うなれば接待ゴルフならぬ接待ゲームといった所だろうか。ゴルフと違い手加減はしない（すると間違いなく怒るだろう）が。

高松翼。あの年で年齢制限モノをプレイしている上年二回の祭りにも参加者側。軽いジャブの積りで英国正當女中譚こまつかいエイミーの話題を投げたら喰いついて来た翼に対し歴史他広範な守備範囲を持つ趣味人おたくと判断を下した甘粕は暇つぶしにと言う名目で誘ってみたのだ。

そして賭けは当たった。彼の様な人間は同好の志に対して基本的に甘い。王としての自覚がある以上、ある程度以上は期待できないがそれでも話し合う相手としての認識は得られた。最初の覗きの悪印象は払拭できただろう。

「後は恵那さん次第ですか。祐理さんは……ねえ？」

溜息をつかざるを得ない。まさかあそこまで相性が悪かったとは。今後は甘粕自身か恵那で依頼する形になるが恵那は清秋院の家自体が庇護対象になりかねない。そうになると

「私が専属ですか。給料に合いませんよ本当……まあ、あの様子なら負けはないでしょうし手早く済ませてくれれば有難いんですが」

甘粕の眼前で繰り広げられるのはMS大の怪獣による大乱闘とも呼べない蹂躪。

身体各部の道具から火炎を始めとして水流、冷氣、突風、電撃、

光条、果ては誘導弾^{ミサイル}を繰り出してしている様だがその殆どが竜の周囲に張り巡らされた炎の障壁で防がれる。

敢えてそうしているのか障壁を解除した状態で攻撃を喰らってもその赤い鱗に目立った傷は見られず、寧ろ塵塚怪王の身体を食い干切^{あそび}って回復に当たっている有様だ。

蹂躪^{あそび}とも取れる戦闘は先頃入手した権能の試しも兼ねているのだろう。

正史編纂委員会の人間では複数の術者の支援の下、恵那らが神がかりを行った上で決死の覚悟で挑む羽目になるだろう怪物だったが、王にとっては「ちよつと面倒臭い敵」でしかないらしい。

改めて隔絶した実力の差を感じ、万理谷祐理が齎した悪感情をある程度緩和できた事に安堵した。

「所で祐理さん。あの権能、どういった内容かわかりますか？」
傍らで憮然としたまま控える媛巫女に霊視が降りていないかを訊ねる。

「あれは旧き大地の神。贄を要求する崇り神。魂喰らいの権能です。恐らくはあの霊を喰らう事で己の負傷を癒しているでしょう」

「ああ、成程。閻魔大王ですか……つと、どうやら終わりの様ですね」

死者を滑る地獄の王。魂を焼き尽くす炎。成程、彼等にしてみれば天敵だろう。見ていると竜巻を繰り出し相手の巨体を拘束。そのまま火炎を吹き出すと油を被っていたかのように燃え上がる。そのまま溶け落ちていった。

「凄いなえ、王様の力ってこんなに凄かったんだ！」

太刀の媛巫女^{せいしゅつういんえな}は戦闘時ずっとキラキラした目で見入っていた。なまじ神がかりが使える為、その圧倒的な差を実感として理解できるのだろう。

「後は是が私達に使われない事を祈るだけです……つと、祐理さん。どうしました？」

先程から蹲っていた媛巫女。何か霊視を受けたのかと声をかけて

みると切羽詰まった声で言葉を紡ぐ。

「いえ。まだ終わってはいません。来ます、逢魔時、幽世より！」

「さて、終わったか」

思ったよりは強かったが所詮はその程度。苦戦という程でもなかった。さて、帰って寝るか　おかしい。未だ臨戦態勢は解けていない。

全身の緊張感が解けない。否、先程よりも増した。是は妖怪ではない。神と戦う時と同様の戦闘状態。^{デフコンレベル}

カツン、カツンと。

この都会に似つかわしくない蹄の音が響く。

振り返ると其処に居るのは一騎の鬼。

その馬に頭はなく。跨っているのは一つ目で毛むくじらの鬼。先程滅ぼした筈の塵塚怪王とは別に新たに付喪神達を呼び出し、周囲に従えている。その姿は正しく

「百鬼夜行、ね」

突進してきたそれに対応が遅れ、己が巨体を投げ飛ばされるに至って翼は己の、正史編纂委員会の勘違いを悟った。今回の一件は『九十九神の群で構成された塵塚怪王』だと思っていたが。

「…夜行さんかよ、おい！」

『夜行とそれに付き従う付喪神の百鬼夜行』

それがこの敵の正体だった。

? / 05 ・蛇と骸と妖魔夜行（後書き）

塵塚怪王かと思ったたらそいつらは取り巻きで本命は百鬼夜行（夜行さん）だったでござるの巻。つまり。

今回、ボスの名前は最初から出ていたんだよ！（な、なんだってー）。

実の所、『妖怪だと思ったら神』という流れでは夜行さんを神格として認識する事に納得しづらい方も多いと思う。ぶっちゃけこの方、「春の訪れを告げる神霊」とも取れるので。

一分分かりやすい例えはジャックオーランタンなだけどねえ。

夜行さんを1神格として扱いながら百鬼夜行を繋げているのはかなり無理矢理気味なこじつけだと自覚していますが。仕方がなかったんや……「妖魔夜行とタイトル付けて夜行さん」というネタを思いついたら止められなかったんや!?

数話前に「大迷宮のデフォ設定」と記述した時点で既に不退転の覚悟だったのは確かだが。

このパターンだと。他に幾つか案があった。

『一つ目小僧（Or一本だったら）だと思ってたら独眼竜だった』天
目一箇神とかのまひとつのかみ

『だいだらぼっちだと思ったらアラハバキ（Or大山津見神）』とか

ネタは色々と合った。寧ろこっちの方が納得のいく組み合わせだと思わないでもない。後は以津真手だと思ったらヴァルキューレで斃して権能を手に入れると同時に神祖化してヒロインに、とか（是

は寧ろ別の話でメインヒロインにノ是書くなら中編位で別枠で書きたいな。

秋葉原でカグツチ、ないし愛宕大権現と戦う、という案も有った（是は後述の理由で却下）。寧ろ、カンピ的にはこっちのが王道な気がする。

アマノメの神は一つ目（製鉄神）でかつ上記の一つ目の竜と習合して一つ目やはり母親とのエピソードもある上、天津麻羅と同一視される（が、実際には全く系統が違う）とかネタだらけで使いやすいかつたりするんだが。

まあ、今の読者には『灼眼のシャナ』の天目一箇の元ネタと言った方が通りが良い気がする（是が没にした理由その1）。

もうひとつ、理由としては。権能がどう考えても風雷系、製鉄系で既に所持している権能と被るというのもある。

この神独自のだと製鉄系でも特にで神鏡を鑄直した、という記述があり民族融和の逸話もあるので「権能の組み合わせ合体」という案もあつた（公式でいうなら7巻の馬+戦士。是の難易度低下&強化）。

ただ、是をすると恵那の存在をスルーする上、ゴドーの能力を1人で持っている、という話になってしまふんだよなあ……要するに護堂を押しつけて主役ルートに居座る形に。

なんで泣く泣く却下しました……名残惜しいけどね。コンボを強化する権能。タカ！トラ！バツタ！ならぬへび！ウシ！ヒーロー！なコンボの繋ぎ権能。真面目に権能の組み合わせがメインの王様なので有難かつたりするのですが。「作者が」暴走するのを止められないので（苦笑）。

さて、次回は夜行さん（&百鬼夜行）VS翼（恵那、甘粕、祐理）です。派手な戦闘に出来たらいいな。

と、言う訳で。今回は五味耕介さんに出張って来て貰いました。尚、データ的にはゼクトールとネオゼクトール並に魔改造済なのでご留意を。最初に作った妖怪は彼のデータ改造からだったなあ。実質、百鬼キャンペのメインPCだったし。

データ、というかイメージが固まってるから書きやすい書きやすい。演出戦闘のノリで進めりゃいいんだもん。

戦闘力を原作的に解説するなら斉天大聖が生み出した大猿程度でしようか。護堂にとってみれば鬼門ですし他オリピオ・ネでもやや消耗する程度には強いのですが翼にしてみると（権能的に）寧ろ「御褒美です。有難うございました」状態だったり。戦闘力の有無というより特性が違うのですな。

・『カオス混沌ヘッスの世界蛇』について

「またの名を何やら感想版でも結構聞かれる「コピー元の条件は？」
「卑怯じゃね？」に対する半期に一度の予算委員会答弁」

と言う訳で。全部話すとネタばれに抵触しかねないのである程度ですが。以下、わからない人にはさっぱりだが拙作を読んでいる人なら判ると信じて……！（ソードマスターヤマト）。

一・レンジャーキーとライドカード

この話を書くときに最初にモデルとして上げたディケイドとコーカイジャー（後、オーズ）。幸い、つい先日にもーさん！ もとい

ヒュウガとバスコが貴重な判例を提供してくれたので。

A・盗む

相手から能力そのものを奪い取る（例：プロメテウス秘笈／清秋院恵那（天叢雲剣）／高松翼（呪力奪取））。

相手は能力を使用不能に。要するに主体が持っているのは「盗む」能力のみで力自体は相手依存。リソースの奪い合いになる為、レンジャーキー争奪戦になるのも是が理由。オーズのコアメダルも本質的には同じ。

B・真似る

相手の能力を解析、再現する。相手の能力という見本こそあれ其れを行う為には本人にそれを再現するだけの要素が必要になる。神話で有名なのはケルト神話のルーだがあれはあくまで技能のみ。基本的に是が可能なのは万能神である事が多い。

ハードディスクウミウシ……：ディケイドの様に能力を再現するにはその素地（材料）が必須である。此処らは「全ての剣の要素がある」二次創作御用達『無限の剣製』を参照して頂ければ。

つーか。エミヤを見てればコピーだけで脅威足り得ない事は自明の理だと思っただが。

まあ、さておき。実の所翼は此方だったりする。能力を再現しているがその手段は自分依存なんですな。逆に言う。「材料は自分の中に存在する」とも言える。

ぶっちゃけ、私ずっと「盗み模造する」と初化身（1・4）から言ってる訳で。ドニの場合は「凄い斬撃を生み出す権能」を模造しているともいう。

現状、示せる論証と材料は此処で提示した積りです。後はまあ、本編のネタばれになりかねない、というか言霊斬りの際に出すと思うので。

余談だが。封神演義で有名なヨウゼンはどちらか判らない。藤竜版では明らかに後者だが盗みの神としての側面もあるので。

それでも大上老君の大極図は盗めない。あれは限定空間を創り上げてその中で何でも好き放題できる、という類なので。空間系の極みだったり。

PS（独り言）：最近、ふと思ったんだが私や一体、どんな風に思われてるんだろうか。極普通にメガテンやら妖魔夜行と百鬼夜翔やら遊んで神話知識を持つてるだけの「普通」の斜壊人なんだが。

因みに。赤い蛇を書きだしてから買った資料だけで50K、メガテン時代も含めると100K余裕で超える勢いなのだが（爆）。

本を一冊読んでも使える部分なんてごく一部なんだぞー！？（本音）。

後、カウプランじゃないんだから聞かれたら、即、神格の逸話と由縁を語って言霊斬りするのは無理、流石に……いや、まあ幸いというか知ってる神格ばつかだったんで此処に現存するオリピオーネの神格なら大概、言霊斬りするのは可能だが。翼にとってコピーって余技だし言霊斬りするより力押しした方が楽に勝てるんだよなあ、実際。

てか、上述のアザゼルコピーに皆、目を取られて翼の真の脅威点を見逃している様な。

某所で言ってた鋼殺し。カンピオーネ的に、彼らに有効なのは火炎の権能。よって実はモレクだけで翼の場合は十分だったりする（王/火炎/溶鉱炉）。

後はアテナが9巻で言っているように「戦場以外での死」是は型月で言う「民衆は怪物に殺され、怪物は英雄に斃され、英雄は民衆

に排斥される」の三竦みに近い物が有ると思う（そういう意味で『神王』たる火炎のモレクは楽）。

墮天使二つ、後一つは自分で使う予定だったので勘弁して下さい（苦笑）。というか、記述すると読めるな是は。

なので、没案から対鋼に有効、かつ是だけでやっていける便利な権能を。

『原初の火』（火之迦具土神）。

ヒノカグツチの火山の神と鍛冶の神としての在り方を具現化した権能。

身体の火炎化、正確には溶岩となつて攻撃力と防御力が上昇する。黒王子の雷化やJPSの火炎化と違い実体を持つ為緊急回避はできないが『鋼』の防御力と火炎の攻撃力を併せ持つ攻守一体の権能。

また、熱波やマグマ溜まりを呼び寄せる事で辺り一面を溶岩の海にする事も可能。

実は秋葉原の秋葉神社で是と戦うという案もあつた。が、筆者が秋葉原を炎上させる事ができなかつた為、没に。

余談だが、ヴォルカヌス辺りをもし、翼が斃していればこの権能になつた可能性が高い。

といつかコメント

解説：私が没つた環境に大迷惑な権能。簡単に言つとVSデストロイアのメルトダウンゴジラと言つべきか。

是一个で攻撃/防御の両立とマグマ召喚の広範囲攻撃（自領域作成）ができる。

ぶつちやけ最初の権能にしても良い位なのだが……書き手としては。「周囲の被害が洒落にならん」という事でお蔵入りに。マジメに洒落にならんだよなあ……。強いんだが。本当に強くて便利な

んだが。
では。

・執筆時BGM：ignition)Transformer
Galaxy Force)

? / 06 ・蛇と寵姫と死者の王（前書き）

興「遅かったじゃないか。最後に……カンピオーネとしての私が生きた証を残させてくれ」

そして。塵塚怪王のデザイン、ダイナザウラー（TF実写版）の近いなあ、と思った今日この頃。実写TFって金属塊の集合体なんやもの。此処らは御国柄なのかね。と、言いつつダークサイドムーン来週までお預けになっちまったよおお！（絶叫）

そして。10巻延期しやがったああアアあ！！！！（絶叫）
生殺しじゃよー！（BYファザー）

俺、書きあげたらゴークサイダーとダークサイドムーン、観に行くんだ……（死亡フラグ）

『……夜行さんかよ、おい!』

その言葉を共に高松翼とまつろわぬ神は甘粕達の前から姿を消した。残されたのはトラックで燃え尽きた残骸と、炎上する植物園、彼ら三人のみ。

「やれやれ。夜行さんと言っていましたか」

それが正しいのなら。彼は『どこでもない所に連れて行かれた』という事だろう。此方の見積もりが甘かったという事だが。

「仮に夜行さんだとすると行き先は幽世。私達では手が出せませんねえ」

百鬼夜行の行進に巻き込まれたと言う事だ。巻き込まれないようにする心得なら甘粕も幾つか知っているが巻き込まれたのなら普通の人間は助からない。

最も魔王カンピオーネ。早々どうこうなる訳ではないだろうが。

こちらから打てる手がないのは事実だった。

「甘粕さん、どうするの? このままじゃ王様が危ないよ」

「と言つても。私じゃどうしようもありませんよ。寧ろ恵那さんの方が心当たりがあるんじゃないですか?」

「うん? 手を貸してくれるか判らないけどやってみる」

暗に古老達への連絡を示唆、恵那もそれに迷わず同意しポケットから携帯電話を取り出すと耳に当てる。電波が届くか、繋がっているか等は関係なく遠距離で会話を行う為の呪具としての扱い。

晴天、赤い黄昏時だった空が瞬く間に曇り、強風と共に雨が降り始める、嵐の如きその空模様は恵那が古老達との会話を行っている証だ。

背広が濡れるのに構わず様子を伺う。ただの通話にしか見えないがその内実は歴とした神託なのだ。

「……って、ちょっとそれはないじゃん！」

強い調子で話していたがやがて八つ当たり気味に電話を折り畳むとポケットに突っ込んだ。一方的に通話を切られたらしく彼女に似つかわしくない無然とした表情を浮かべている。

「駄目でしたか。まあ、予想の範疇ではありませんが」

「それでどうにかなる様な奴じゃないってさ。恵那達より明らかに深い繋がりだよな」

「厄介ですねえ、それは。ま、御老公のお陰で火勢が収まった事は感謝しておきますか」

今しがたまで燃え盛っていた火炎は吹き荒ぶ嵐の結果、鎮火していた。植物園への被害が抑えられてという点では成功というべきだろう。元より、助力を期待しての事ではない。

今回、古老達が裏で動いている時点で黒幕だとしても甘粕自身は寧ろ納得するであろうから。

正史編纂委員会じぶんたちではなく古老と直接コネクションを持つ。つまりはそちらの意向を優先すると言う事だ。清秋院恵那としては。自分も関わりたいという思いが強いのだろうか。

尚、万理谷祐理は二組なので　もとい、翼に好感を持っていないので無言を貫いている。

そういつて悩む三人の耳に響いたのは柔らかな声。内容は物騒極まりなかったが。

「あら。でしたら力を貸して頂けますか？　　答えは聞いてま

せんけれど」

「あ、貴女は!？」

カンピオーネー！赤き蛇の魔王！

さて。夜行さんによつて現世うつしよから幽世かくりよに連れてこられた当の本人つばきが取り乱しているかと言えばそんな事はなく。

「なーんてこつたい！ 差し詰め クー空間で戦う宇宙刑事、いや、ミラーワールドにベントされたとかのが最近は流行りだっけ？ 宙明BGMが欲しいよね」

幽世の空を飛翔しながら余裕の体を崩していなかった。脳内BGMで、一ザーブブレードをエンドレスに流している位である。最も、権能から見れば巨大戦力トルギランだったりするが突っ込む者は此処にはいなかった。

この男、黒王子や湖の騎士、そして今回の古老達と異界に連れ込まれる事に慣れっこな上、自身も空間たいめいぎゆう使い。この手の対処法は心得ている。

何より。世界蛇アザゼルにしてみればこの手の術との親和性が極めて高い。混沌を使う権能の方向性からして相性は良い筈……のだが問題が一つ。

「所謂神隠し、どこかへ連れ去ってしまう、という類だーね。大概この手のは空間の支配権を奪い取れば逆に楽勝なんだが……夜行さんなんて判らねーYO!？」

翼自身の経験から言えばこの手の空間はある種の法則で成り立っている為、その法則、規則性を認識して突き崩せば案外あっさりいけるのだが。

「ええい、何でも知ってるわけじゃないんだ！ 毎回毎回必死になつて調べてるんだぞ！」

流石に夜行さんともなると、「一つ目の鬼」「首なし馬」「百鬼夜行よゆうを連れてくる／連れて行く」「季節の変わり目に現れる」程度の認識しか持つておらず脳内知識の系統樹に区分けされていなかった

為、現状では模造が不可能。

解析の為に攻撃を喰らおうにも予断を許さない状況では避けたい。詰まる所相手のフィールドで普通の削り合いになっていたりする。

より正確には漫画の様に大群を引き連れ、首を幾つか後ろに向け『煉獄魂炉』で削りながらの逃走。典型的な引き撃ちといっても良い。

最も相手は百鬼夜行を引き連れた騎馬の突撃。付き従う九十九の軍勢も現世で相手をした時より明らかに力が増している。

「空が三分に敵7分！ どころか空が1分に敵9分でどーすんだおい。おまけに全員に巨大化とトランプルを付与、と。やだねえ。差し詰め、茶単の巨大化蹂躪ってトコか？」

戦場その物は先程までいた夢の島。最も、相手の支配下にある為か上下の概念が曖昧で歩く感覚で空を飛びまわれたりするのだが。先程と違い、空を駆け赤竜へと殺到、突撃する集団のほぼすべてを避け、避けきれないモノは『煉獄魂炉』で焼き尽くし、吸収しながら飛翔を続ける。

一対多、その戦力比は数でいうならば較べモノになる物ではない。大地の上で戦うのならその怒涛の群に吞まれ蹂躪されるだろう。しかし、如何に空を移動できようと所詮は空を走るモノと空を飛翔するモノ。根本的な機動性が違う。

12の翼で世界を飛ぶ墮天使の権能を持つ以上、『翼』の名を持ち大いなる空で闘う以上、あの男から権能を篡奪し魔王となった以上、翼は誰にも負ける気はなかった。

現状では九十九の魂を焼きつつ翼が吸収、呪力に変換するペースとまつろわぬ夜行さんが配下を呼び出す速度がほぼ均衡して居る為お互いに千日手。

化身の権能を有し呪力の補給が可能な翼とまつろわぬ神の戦いにおいて「持久力」という概念はない。夜行さんが召喚の速度を上げ、数で追い落とすかその前に翼がこの空間を破壊するかの勝負になりかけていた。

「と言っても、そう余裕が有る訳ではないんだがな」

幽世の空を飛翔しつつ毒づく。再生するとはいえ、全くの無傷ではない。地上と違い、雑魚共つくものスペックが上がっている為、恐らくモレクの権能以外では即死は不可能、攻撃アタックに手を取られ歩を止めればたちまち取りつかれる。全て焼き尽くそうにも溜めの時間を稼ぐ一手がない。

雑魚だけならまだしも本命やいづに隙を与えるのは分が悪かった。

『建速風雷』では斃たけはやのあらししきれず

『銀腕』は単体攻撃こそが本領、

『復讐の女神』はカウンター技の為現状意味が無く、

『電光石火』は回避メインだが、相手の呪力干渉に極めて弱い、

『鋼の加護』は防御用。

現在、幽世で相手の支配空間域に居る為対多数用の最善手である『大迷宮』の広範囲展開で百鬼の群を落とし込む事は不可能、雑魚の突撃は手傷を負う程度だが数が多い為、本命やいづの攻撃の牽制になっているのがツライ。

実質、モレクの火とアザゼルでどうにかするしか手が無い。元来、この手の雑魚はメアリーに首を預けて纏めて掃除をして貰っていたのだが今は居らず。

「くつそ。魔術攻撃ができないと牽制がキツイぞおい」
一般人並、どころか大騎士Lvまでならあつという間に上がるし持っている。が、カンピオーネやまつろわぬ神との戦闘に耐えうるLvの技術を実践無しで覚えるにはやはりそれ相応の時間と習熟がいる訳で。

実戦経験を全て権能の習熟に費やして魔術攻撃をメアリーの制御に頼り切っていたツケがきた。腕や翼のみの部分変化や権能コピーの解析速度は上がったので方針としては間違っていないが現状では

それが仇となっている。

「しゃーない、効率はさて置き権能の力押しでいくか」

幸い『煉獄魂炉』の燃料は辺りに幾らでもわいている。この際、最大火力を確認しておくのも今後の為だろう。死ななければ問題はない。相手を焼き尽くせれば。

「それには及びませんよ?」

そう、決意した際翼の耳に届いた涼やかな、それでいて良く通る。聞き間違えようの無い声。

「メアリー?」

「はい。貴方のメアリーですよ?」

来ちゃいました、と。微笑む姿はイギリスで逢う際と違いまるで何処かへ遠出する旅装』のようで。

「……ヒルダさんが隠してたのは是か……状況は判ってる?」

「幽世^{ユウセイ}まで来てるのに誰に言ってるんですか? 『鎖』で時間を稼ぎます」

「オーライ。好きなだけ使え」

言われずとも、そういうやいなや腕に提げた鎖を放る。まるで甘い顔して師匠の聖衣を壊す恩知らずの星雲鎖^{ネビュラチェーン}の様に相手めがけて飛翔する鎖。序に長さがおかしくない? という突っ込みは聞かない。

英国の国宝は呪力を此方から引き出しながらその担い手の意思に忠実に、確実に、夜行さんを縛りあげる。かの名盾達、獅子の盾、象の盾、溶岩の道のように。

「この世の果ての渓谷に。在りし聖堂、捧ぐは小麦粉、キジバト、更に牝羊、我は炎。我を崇めよ 我を畏れよ。我は炎の吐息にて幾多の命を喰らわん 捧げよ贅を! 今宵は採魂の宴なり!」

夜行さんの動きが止まった隙に逃走をやめ、反転、下がる勢いのまま炉心を三個、強制解放し解き放つ。煉獄の焰は空一面に広がり空が赤く灼えた。焼け落ちた魂を喰らう。

「あの神格の周辺情報を霊視させてきました。『教授』で流し込みます」

残るは夜行さんだけ、と言った所で何かを言う間もなく蛇頭に唇を合わせるメアリー。

巨体で在るが故、相棒を庇いつつ、行為に専念させる。

見ているものがいればまるで大蛇が美少女を喰らおうとしているようにしか見えないそれは実際には幾多の神獣や黒王子や剣の王にも打ち勝った必殺の戦法だった。

かの存在は異形のモノを引き連れ去りゆく先導者。

故に巻き込まれしヒトは攫われる。

「かの妖怪は零落した神、それは間違いでは有りません。しかし名が無くとも。現象として歴として残る存在もあります。そして其処から類推する事も」

メアリーに『教授』により流し込まれた知識が対となる蛇頭から流れ出す。翼の意味ではなく自動的な再生器として機能、紡がれる声は姫君のもの。

妙なる調は蛇頭を増幅器として、楽器として巫女の吟じる謡を幽世へ遍く響かせる。

「一つ目、是は実の所『普通ではない存在』、神霊としての記号でしかありません。首のない馬は死者を連れて行く存在としての隠喩なのでしよう。ああ、死を預言し冥界に連れて行くという意味ではデュラハンも近い存在ではあるのかもしれないね」

例示に持ち出したのは彼女にとって馴染み深いケルトの首なし騎士。やはり首の無い馬が牽く馬車を駆る死を告げる妖精。

「同じようにケルトの『徘徊する死霊達』という共通項で括るのならばハロウィン、そしてジャックランタンを上げるべきなのではないかね」

夜行とは節句、暦の節々に顕れる時報。それと較べるのならば。

「ハロウィンは元来、年の境目に異界との門が開き行き来が可能に

なるとされた時。日本でいうのならオボンが近いのでしょうか。彼らが行き来するので連れ去られないように篝火から火を貰い暖炉につける訳ですが」

ケルトと比される故に当然ながら夜行さんも当然二面性、両面性をもつ。

バケモノを連れて行く善の妖怪としての夜行さん

バケモノを連れまわして怯えさせる悪の妖怪としての夜行さん

同様に夜行さんを言い換えると。付喪神や小妖怪、人の世に居ても困るモノを連れ去ってくれる訳だが。逆に言うとは同時に妖怪の大群が現れる事に他ならない。

それは異世界に連れて行ってしまふ怖い妖怪と見るか

行き場の無いものたちに手を差し伸べるやさしい妖怪とみるか

「同類を導く先達。即ち、最初のモノ。まつろわされ、妖怪に、伝承に成り果てた同胞の中、この形式で現在も力持つ存在^{もの}でいうのならそれはインド神話の残る最初のヒトにして死者の王、ヤマ」

冥府の王という属性を喪い結果として同胞たちを引き連れるという形式のみが残ったのが先述のモノ達。実際にはジャックランタンの話が有名になり過ぎて異議が出そうだが其処は脳内保管してほしい所である。

「畢竟。季節の節目に現れ、まつろう存在を引き連れどこかへと連れて行く、連れ去るといふ形式のみが残り其処に付喪と結びついた異形の神霊、『無機物の冥府神』それが貴方、まつろわぬ夜行さんです」

メアリーのその宣告と共に幽世が書き換えられていく。まつろわぬ百鬼夜行の神格を暴いたことにより、『混沌^{カオス}の多頭蛇^{ヘッス}』が夜行さん^{ジャミング}を妨害、『大迷宮』を行使し翼のモノへと所有権を書き変えて行く。

是は権能その物ではなく権能を利用した類感呪術。

英国のジェームズ・フレイサー（日本では金枝篇の作者として有名だろうか）が提唱した分類法／呪術で要諦は「形の似ているもの同士はお互いに影響力を及ぼしあい、その一方に作用すると他方へも効果が及ぶ」という物。

是と「一旦触れ合ったもの同士がその後もお互いに影響を与え合う」感染魔術を併用している。

ぐちゃぐちゃ言うより日本人には「丑の刻参りで藁人形を打つと人間に呪いが行く理論」と「縁ができる理論」言った方が確実だろうか。

畢竟、「似たようなものはお互いに影響を及ぼし合う」のならば、アサセル世界蛇の権能で接触、丸々相手の権能を複製していて妨害できない筈が無い。

同じ夢の島でありながら力の及ばぬ世界。浸蝕を防ごうとしているがその試みも徒労に終わる。夜行の神格を理解、解析した為『混沌の世界蛇』で己が権能の行使に妨害を受けている上、内部からの同種の書き換えに抵抗できる筈もない。

乾いた布に水がしみ込むように、ウィルスが正常なデータを喰い尽くすかのように、夜行の空間が、墮天使ひょうじの世界へと作り変えられる。

先程までの支配者は既に哀れな狩られる獣へと立場を墜おとしとした。支配者は傲然と告げる。此処は俺の領域もりのだと。

「Welcome to “The World”」

「手に入るか微妙だったがあれもカウントされるみたいだな」

身体の中に漲る神秘の力。過去二回経験した権能を篡奪した際の感触。妖怪だから、と半信半疑だったがアレも『まつろわぬ神』としての裁可バンドラが義母から降りたらしい。

後で試してみるか、と思いつつ何時ものように指定席に座っている相方に顔を向ける。

あたまのひとつ

「あらためて。お久しぶりです」

スカートの裾を摘んで御辞儀をする様は成程様になっている。最も。

「メアリー？ レディースとはいえトレンチコート着てそれはどうかと思う」

「御揃いですよ？ 英国紳士ならば此処は『似合っていて綺麗だね』
といってくる場面じゃないですか」

「俺は日本人だ。ってーか俺の敬愛するハンフリー・ボガードに謝れ」

何と言うか。似合っているが似合っていない。ベレー帽と併せたコートはファッションとして見るのならば似合っているのだろうが……こうなんというか。ハードボイルドなウドのコーヒーの香りにむせる。そんな空気がないのだ。いや、綺麗だけだね。

「煙草も吸わない、お酒も嗜むどころか下戸の甘党がハードボイルドを気取るのもどうかと。それに将来は英国籍習得でしょう？ 目指すは英国紳士、騎士叙勲もついてきますよ？」

ウインストン・チャーチル

「うわーい。俺の将来婿養子ー、変態紳士にはなりたくないなあ」
「ジョンブルは変態じゃありません とは間違つても言えませんけど。御揃いの証にこれもいれてもらつたんですから」

みると彼女の左胸には自分のコートと同じマークが刺繍されていた。S字を反転させ横に倒して先端に丸を置いた意匠。

“林檎を喰らわんとす蛇の紋章”の図案化。

実の所翼の規範であり、権能にぴつたりな為拝借させて貰っている。ある種の呪いになりかねないが。

「にしても何でこっちに來れたの？ というか早すぎる気が」

助けて貰つておいて言えた義理ではないが気になる所では有った。モレクの一件の後、翼の公式発表からまだ一週間もたっていない。

動くには小煩い親父共を説得して動く必要があるのに早すぎる。

「其処は其れ、美少女には秘密が多いと言う事で。正確にはとある老人の援助を受けたといえますか」

「自分で言うなよ　　ああ、キングの爺様が動いたか。大体わかった。細かい話は後ですと。戻ろつか？　俺の加護があるつっても活動限界はあるだろ」

「はい、帰りましょう。現世へ」

翼の加護で薬草その他儀式の必要無く、幽世での行動を可能としている訳だが流石に制限が無い訳ではない。早く戻るに越した事はなかった。

色々と話したい事もありますし？　と呟く声は当然ながら聞き流す。楽しい人生の秘訣は適度な平穏と刺激、そして現実逃避。それが高松翼のジャスティスである。

t o b e c o n t i n u e d . . . < 2 - 7

? / 06 ・蛇と寵姫と死者の王（後書き）

・後書き

「美（少）女と魔獣（怪物になった少年）のキス」

今回、書きたかったのは是だけ、とも言える（断言）。まあ、其れはさて置き今回やったのは護堂に例えるのならヒロインに剣の使用権を与えて使わせたようなもんかな。

空の頭一個をアンプとスピーカーに使って本人は戦闘。前回でも呪文制御をさせてましたが。怪獣化ができるからの荒業であったり。人間サイズではやろうにもできまい（笑）。

この辺り、強いて近いのを上げるならユニゾンデバイス辺りか。後、今回言っているように。「戦士の剣」は別に神格を確定させる必要はないと思っっていたり。名前があつた方が「当てやすい」のは否定しませんが。類型と傾向さえ分かればそれだけで十分かと。

<<2011.8.2 / 追記

書き方が悪かったぽいので追記。正確には今回の謡も1-4でやったアザゼルの砲撃も『靈感共有』によるものです。なので「権能がチート」なのではなく。カンピオーネならだれでもできます……『戦闘中にそんな事が出来るのならば』。

後衛の庇い方と言っても良いのですが……書いていて、というか感想や他の方を見ていて思うのだが。スパロボとかの「データの強さ」を重視しすぎな気がする。ぶっちゃけ、今までの翼の行動は全て「凄くデカイ！ 凄く強い！ 凄いロボットだ！」理論が拠り所だったり。

大きくて頑丈で空が飛べる（で、鈍くない）。是がどれだけ強力が実感できてないのではなからうか。

本編修正

質問のあった「ジャミングは権能なの？」に対する形でシステムを記述。

で。夜行についてですが。実質、一つ目とかはあんま触れていません。一つ目自体は「普通ではないもの」という意味合いが強いので。類例としてヤマは出しましたが。某1000歳の魔王の権能とは被りません、というかモノとしては別物です。

尚、一般というか「夜行さん」は我々（妖怪をプレイする人間）では「一つ目の鬼」として扱われてますが、是は武田明氏の「節分」の引用、というかこれが原著で他は明確に描写されていない為そのまま定着したようです。

というか「おに」をどうとらえるか、という話でもある訳で要するに「春来る神霊」是は前回言いましたが、其処からカンピ解釈でデコレーションしていきこうなりました。

年越し、境にくる異形の存在は年を越すまでは悪神だが越すと福を齎すというマロウド神信仰は各地にあるので興味を持たれたなら調べてみるのも良いのでは。

んで、なんでこうなるか。其処をつつつく際の解説に百鬼夜行と興……ジャック・O・ランタンをヤマへ繋げる為の布石をして使わせて貰いました。

魑魅魍魎、道具の付喪の大群を人の世に居ても困る為「どこかに連れて行ってくれる/連れまわして怯えさせる」とすると。異世界に連れ去る存在であり、彼らに手を差し伸べる存在でもある訳で。

この辺「幽世」が存在するカンピにとって非常に相性が良い。

で、この「同類を導く先達」という意味で一番分かりやすいのは

本編で書いてあるようにヤマなんですね。閻魔大王でなくヤマです。と言う訳でかの神格を「無生物の冥府神」として描いた訳ですが。是、塵塚の時に記述していたり。

まあ、この辺りはハーメルンのバイ……笛吹きに通じる話でもあったり。

ケルトのデュラハン（死の宣告を行い冥界へと連れて行く）とも通じる神格だったり。まあ、こっちはすっかりファンタジー系のモンスターとして定着した感がありますが。

繰り返しますが是は創作と推測を重ねたSS書きの意見ですの
で他に意見のある方は是非にお願いします
てーか、結論な
んで出せねえよ（本音）。何か他に御意見や知っている事が有れば
ぜひお願いします（まあ、この権能はそのままいくんだが）。

んで、今回三個目の権能を手に入れた訳なのですが。ぶつちやけ、
作者的にはアザゼルとモレクだけでラストまで行けたり。話を重ね
ると神斃すからドンドン増えて行くんだよなあ。護堂みたいに「斃
さない」という選択肢がないし。

つーか。汎用性が高い上、増強の幅ガデカい、対鋼、とカンピで
はモレク一個だけで十分ラストまでやっていけるんだよなあ。ぶつち
やけ、やってる事はナイトブレイザーだし。

PS：次回は何時も通り……と言いたいのですが。お盆は夏の祭典
に行く為体力が残りません。一回分伸びることになるかと
と
言いつつ興がのればばつと書きあがるので油断できないんだが。

てーか。この後、恵那VSメアリー入れて終幕入れてで10話越
えそーね。てか、今回対決まで持っていくつもりだったがそこまで
書くと20kb超えそうな上、夜行の解析ではば気力を使い果たし
たともいう（orz）。

・執筆時BGM:Breath on
ARMS OP、宇宙刑事ギャバン
BGM 『必殺剣・レ
ザンブレード!』

? / 07 ・蛇と寵姫と麗人と(前書き)

「良いか。俺は面倒が嫌いなんだ」

「つまり、是は口だけと言う事。メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴ
アールです」

キングクリムゾン！ 時は吹き飛び結果だけが残る。

そう、つまり戻った後の修羅場と言う名の言い争いは吹き飛び話し合いが終わったという結果だけが……

「残らないので現実逃避しないで下さいね？」

「うわーい追及が厳しいなあ。というか何故其処まで人の内心を読めるんだ」

「嫁ですから。夫の考え位分らないでどうするんです？」

翼の片腕をとり横に佇む美少女。だが、その微笑みは何時もと違い『来たな、プレッシャー！』と叫びたくなる威圧感を隠そうともしていない。

笑いとは牙を見せ敵を威嚇する事がその原点だと……いかん。怒っていらっしやる。うん、怒った顔もまた可愛いなあ。

「其処の御二方、夫婦漫才も良いけど話を進めて良いかな？」

「あら、夫婦だなんて……もっと仰って下さいな」

「なんともはや。その若さで墓場入りですか。難儀なものですね」

「と言っても現状、浮気の現場告発中な気もするけどね」

「うん、つまり恵那はお妾さん2号なんだね、わかってるよ！」

「いや、其処！ 要らん波風を立てないで！」

事を終えてから移った千代田区にあるとある邸宅での一幕。

どうしてこうなった（配点：人生における女性関係）

カンピオーネー！ 赤き蛇の魔王！

？・妖魔夜行 / 07 ・蛇と寵姫と麗人と

夢の島の冒険から戻った高松探検隊が見た物は！ 二人の美少女が互いに睨み合う地獄の様な世界だった。

是と神殺しのどちらかを選べというのなら間違いなく、僕は後者を選ぶわけで……ギーツチョンチョンチョン！

「北の国からやってきた千葉トロン探検隊の飛田クイツクテラペガスさん。現実逃避しないで御自身の修羅場を収めて頂きたいのですが」

「汚い忍者に言われたくないよ。というかどうなってるのさ、是は一体」

「どうも何も御自身で為された 大破壊 でしょう。まあ、配慮して下さったおかげで被害は少ないですがねえ」

……どこかのTVの真似をしている場合ではなかった。嫌、現実逃避をしていただけだったのだが。

幽世から戻った翼が見た物は此方を見る二人と無残な姿となった夢の島。鎮火こそしているものの植物園の一部は完全に延焼、戦場となったトラック及び処理工場は全壊していた。どうやって誤魔化するやら。

そして何故か気絶して横に寝かされている万理谷祐理。何が有ったのかと疑問に思ったが。ふと戦闘時の相方の発言を思い出す。

『 霊視させてきました』

成程、此処に残った残りかすを元になんり強引に霊視させたか。ならばこうなったのも確定的に明らか。まあ、どうでも良い事ではあるが。

それよりも目下、優雅に俺の腕に手を絡め余裕めいた表情で微笑

むメアリーと現世にゲートを開いたの如く黒い穴から出て来た此方に相對、翼の前に居た時とは違い好戦的な笑みを浮かべている清秋院惠那。

この二人をどうするかの方が遙かに問題な訳で。

「あら、何ですか？ この野人は。エンキドゥ親友粹も愛人、妻、その他諸々粹は埋まっているので野生に返って原始の生活を続けて下さいな」

「うーん、日本人にはやっぱり日本人だと惠那は思うな」

「金髪美少女粹は日本では王道のヒロイン粹ですよ？ 貴女こそ泥棒猫粹は要らないので下がって下さい」

自分でいうか。確かに好きだけども。昔の人形然としたのが良いとは言わないがゴジマ汚染が過ぎたかと思わずにはいられない相方の変わりっぷりにやや後悔する翼である。

「大体、浮気じゃなくてお妾さんなんだからそう気にしなくてもいいと思うけどな。強欲じゃない？」

そして。浮気なぞしていないと主張したいのだが。だってあからさまに裏の関係者だと言って神様の存在までちらつかせてるんだもの。家に入れるしかないじゃないか。

「はい。強欲ですよ？ 私は。王を 翼を誰にも渡したくないと思う程度には」

「強欲だよな。王様を独り占めしたいだなんて」

「ええ。好きになった男の子が魔王様になって迎えに来てくれたんですから。それ位普通だと思います だから。貴女は此処で消えなさい。スサノオ英雄神の巫女」

「酷い猫かぶりだよな。惠那はそういうのはどうかと思うな」

「であった頃はもっとセメントでしたもの。だから隠す必要もありません。『本当は怖いグリム童話』ならぬ『本当は怖い貴族令嬢』と言ったところでしょうか？」

「うわ、お嬢様なのに腹黒い！ 誓みたいだね」

「あら、そんな……御嬢様では物足りません。出来れば御姫様プリンセスとでも仰って下さいな」

「それはその内に。後、お妾さんは一人二人いた方が良いと思うよ？ でないと独占してるって面倒だと思っけどな」

「その面倒を買ってでもする理由があるんですが 続きは後に
しません？ あちらの方も混ぜないといけなさそうですし」

「ああ甘粕さん達。そうだね、恵那としてもそれでいいや」

翼としては只の言い争いにしか見えなかったのだが何やら会話と交渉、合意が成り立ったらしい。となると切っ先を向くのは残る一人になる訳で。

「其処の経験値泥棒さん。貴方の上司と直接会談したいのですが
理由は御判りですね？」

英国の王に対する正史編纂委員会の、また清秋院恵那の不用意な接触について。そう紡ぐ眼の前の令嬢、穏やかな表情で告げる物の甘粕にとって生きた心地がしない。

「いや、それはどうかと思いますけどねえ」

「あら、その為の媛巫女だったのでしょう？ ならば直接、王に謁見が叶うのならばそれに越したことはないと思いませんか？」

「どの道、選択肢はないですな。向かいますでしょうか」

溜息をつきつつ上司に連絡を取る。事情を伝えると当の本人はむしろ乗り気のようでは非に、との事。

かくて世田谷の別邸にと場所を移す事となったのだが。

「所で貴女までどうしてそんな呼び方ですかね」

「え？ 翼に『忍者とはそういう物だ』と伺ったのですが」

「ああ、マスターニンジャっていうんだよね、甘粕さん」

「ゲームじゃないんだから止めて下さいよ。その呼び方不当に極悪な労働環境を私達に強いる温床なんです！」

飄々とした姿にしては珍しく本音らしき大声を上げると携帯を取り出し上司に連絡を取る。停滞した流れに好機を感じ介入。此処らで口を出さないと流されるままだと本能が告げている。

「ああ待った。とりあえず是どーすんの？」

「まあ、工場の事故で処理するしかないでしょう。事前に手配でき

「だからまだ楽ですが」

まつろわぬ神の事件でこの程度の被害なら御の字でしょうねえ、と軽く流す忍^{あまかす}者。ふむ、ならば丁度良い。試すとパフォーマンス。一挙両得、いや市民の生活と状況のリセットも兼ねて四得だ。

「成程、ならば 別にアレをなおしてしまっても構わんのだらう?」

「は?」

「直すけどいいよね? 答えは聞いてない!」

理解の追いつかない忍者を無視して新たな権能を発動させる。

「賤しげなる物」

無機物の王、冥府の主。新たな権能の言霊を紡ぐ。

「居たるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。持仏堂に仏の多き。前栽に石・草木の多き」

百鬼夜行の権能。戦闘面を見るなら先程相手をしていたように百鬼夜行の群の召喚やその集合体の塵塚^{メカゴジラ}怪王の使役。是だけでも十分に強力な権能だが。

「家の内に子孫の多き。人にあひて詞の多き。願文に作善多く書き載せたる」

本質的には『無機物への干渉』に他ならない。

「多くて見苦しからぬは、文車の文。塵塚の塵」

言霊を唱え終わると壊れた施設がモーフィングするかのよう^{サイコメトリー}に元の姿へと戻っていく。理屈としては物質記憶読取と無機物への干渉による『無機物を生命と見立てての自己修復』。

故に、一々此方が指示せずとも勝手に直つてくれる。瞬く間に元の姿に戻った戦場を見やり満足する。是をモレク戦の時に持っていればあの砂漠を元に戻せたらうにと思わなくてもない。モレクの権能がなければ此処まで楽勝とは行かなかつたから余り意味のない仮定ではあるのだが。

「よっし、終わり終わり。んじゃ行くこうか」

「是が今回の権能ですか?」

「有無。隠す必要もないからな」

戦闘に関する権能でも無いか。いや、記憶読取と無機物干渉を合わせるに戦闘でも十分に使えるのだが言う義理はない。見せ札を切った後、この場を後にする。

「そうですね。話の流れを切るなら十分でしょうか」

そして誤魔化されてくれなかった我が細君。流石というべきか。

「しっかし。良い屋敷だな。明らかに上流階級御用達じゃないか」

千代田区は番町皿屋敷。所謂『一枚足りない』のアレで有名な一角。先程の一件の後、甘粕曰く『上司』の私邸に案内するとの事で彼の運転する車に全員で乗り込み案内された訳だが。

千代田区にも関わらず大通りから隠れるようにひっそりと佇む洋館。大正浪漫に溢れた殺人事件が似合いそうな古びた幽霊屋敷。千代田区にこの規模の邸宅とは驚くほかない翼である。

「なんだかなあ」

「どうしました？ 確かに古ぼけた幽霊屋敷ですが其れなりに手入れはされていますよ」

「いや、そーいう意味じゃなくて。いや、それもあるけどうん、気合の入った美味しそうなのが居るなと」

「ああ、判りますか。流石というべきなんでしょうがこの家の先代方なので食べないで下さると有難いです」

いや。何故其処をいきなり注意されねばならないのだ。そんな想いを胸に車を降りて玄関へと向かう。

尚、万理谷祐理は気絶したままなのでいない。最初からその旨伝えていたのか、停車と同時に家令であろうフォーマルな執事服を来た若い男性が担架を用意しており別室に運ぶとの事。

勝手知ったるとばかりに書斎の扉を開けると奥から出て来たのはワイシャツとネクタイ、ブレザーにスラックスと何処かの男子制服

を着込んだどこか浮世離れした雰囲気をまとう美貌の持ち主。

沙耶宮馨。正史編纂委員会東京分室の長にして関東の重鎮、実質的な次代のトップと言える。

「さて、初見のメアリーさんにご紹介しましょうこ。色々話は伺っていますよ？ アラミスさん」

「貴女程の人に名前を覚えて頂けるなんて光栄だな、ブリュンヒルデ」

「あら、そんな。私は詐欺でグートルーネと逢瀬を重ねた程度でジークフリートを離す気はないので悪しからず」

「ははは、是は一本取られたな」

「リーヴとリーヴスラシルになっても良いですが。私の希望は薔薇戦争からの紅白薔薇でしょうか」

「流石にスルトの火は僕も嫌だな。白薔薇位は期待して良いのかな？」

「仏蘭西でも結構ですよ？ 御似合いかと思えますが」

「それは遠慮させて貰いたいな。それに彼の権能ならば大艦巨砲主義だと思っんだ。狙撃主義えいこくかんたいなら関わらないと思うけど？」

「あら。旅に出た先のボーイミーツガールは定番ですよ？ それに大和撫子まりやゆりはヒロインが居る状態では只の邪魔者でしかない事を理解なさい」

「流石は変態紳士の国だけはあるね。僕には真似できないな」

「私達から見たら何故滅んでいないか不思議な国の住人に言われたくないですね」

紹介を遮るかのようなメアリーの発言に次いで行われたのは言葉のキャッチボール、否ラリー。

なんとというか。

「会話に入り込む隙がねえ……」

会話のネタがオペラ（？）、神話からゲーム、漫画と飛び過ぎてる上に隠喩が多すぎてついていけない。内容はわからないでもないのだが。というか二人ともネタが濃すぎるぞおい。

「二人とも腹黒いもんね。恵那はやりたくないよ、あんなの」

「清秋院はあの爺さんがいるからあんましくなくていいってのがあるんじゃないの？」

「うん、当主のばあちゃんもいるしね。その二人に任せてればまだいいから」

「いいなあ。俺はあんなのできないよ」

「清秋院ならその辺りの権勢しつかりしてるから楽だよ？ 王様も日本で暮らすつもりなら便利だと思うけどな」

「まあ、日本で暮らすならどっかと接触しなきゃいけないってのは判ってただけだな。まさか、いきなり妾なんて言って美少女送り出してくるとは思わなかったというか」

流石にイギリスの食事を永久に食べて行くのは御免蒙りたい。日本人としては白米と味噌汁は必須。翼のまごうことなき本音である。そしてこの男にとっては清秋院の権勢なんぞより自分の元に来たのが美少女という事の方が重要だった。

彼女というか嫁は既に居る。本来なら関わる事も無かったであろう貴族令嬢である。不満なぞあろう筈もない。しかし、美少女を見れば眼を向けるのは男の性なのだ。困ったので後は嫁に^{メアリ}処遇を任せよう。うん、必要なら土下座でもなんでもする。

何処までも後ろ向きに前向きな男である。そんな脇の雑談と内心の吐露を余所に会談は続く。

「さて、本題に入りましょう。貴方達、正史編纂委員会の暴走について」

「暴走とは酷いなあ。ちよつとした行動なのに」

「それに万理谷祐理を使ったのは失敗でしたね。その時点で彼の逆鱗に触れると認識できなかったとは無能だと言わざるをえません」

態々、翼の資料に警告を書いておいてあげたというのに、とあか

らさまに溜息をつく。

「いや、明らかにあれブービートラップの類だろう？ ところが予測していたんじゃないかな」

「さて、それはさておき。人間の行動に理性・知恵・感情の三要素があるとして。普通は多数決である程度決定します。是に異論は？」

「ありませんな。まあ、大雑把な所ではそれで良いと思いますよ」

「翼の場合は。感情1択です。意思を実現させるべく、知恵と理性を最大限に稼働させる、というタイプなので。どんなにメリットがあるかと『むかつく』とか『気に食わない』と思われた時点で御終いですよ」

自分の男にして主人に対して有る意味酷い言い種。そこまで言っても赦されるという自負も有るのだろう。

そう。彼女は紅い竜の神託を受ける巫女、民の願いを奏上する代理人。

冠の如く眩くたなびく背中まで伸びた金の髪、此処の主役は間違いない彼女だった。

「しかし、何故それを態々私達に？ 教えない方が貴女としてはやりやすいでしょうに」

「翼が日本人で日本に棲む限り貴方達と接触しない訳にはいきませんから。又、下手な事をされて一氏族消えても困りますし」

只でさえ、カンピオーネと初めて接触するのに翼みたいなタイプではどうなるか。

此方を憐憫の眼で見つつ言い放つ。自分達は可哀想だから助けてあげる。何とも傲慢な物言い。

「大体、学校が同じと言うだけであの巫女を送り出したのが失敗でしょう。あの世間知らずでは自分が翼と学校で接触した結果も判らないでしょうし」

「それに関しては何も言えないけどね。カンピオーネである事を確定させたかったという事で納得してくれないかな」

「実際には探り針だったんでしようが貸して捨て置いて差し上げま

しょう……翼？」

そんな戦いにすらなっていない女の戦いを終え、その少女は踵を返す。向かう先は当然ながら

「うえい！？」

「さて、翼。今回の件で何か私に言う事が有るのではないですか？」唐突に話の矛先を向けられ挙動不審に。もはや丸投げしたとばかり思っていたのだからその驚きの度合いは想像がつくだろう。

「いえ、今まで放置していましたが私よりも先に余所様の女性を家に迎え入れた事について一言意見を聞きたいな、と」

「来ないと思つてた矛先がギター！ とりあえず弁明させて頂きますと。家の前に夜分、美少女が立っていれば気にかかるというかいきなり王様だの言われれば、対処に困つて家の中に連れ込むしかないと思つて訳ですが」

あの状況では連れ込むしか選択肢はなかった。翼自身の日常生活の為に。そんな切なる訴えはしかし彼女の耳には届かず冤罪を

「脳内妄想は後でして下さいね？」

「Yes・ma'am！」

穏やかな怒りを持って超英国人となつたメアリーには通じなかった。

「三年目の浮気どころか。半年目の浮気だなんて酷いと思いませんか？」

「いや、だから浮気ではないと」

「ええ。あの時何処までも二人で歩いて行く事を誓つたのにもう浮気ですか。男というのは三日いないと浮気をするというのは本当だつたんですね？ 人の体をあれだけ貪つておいてまだ足りませんか？ すみません。つーか余り大っぴらに大声で言わないで下さい。いや、マジで」

「なら。もうしないと切り切れますか？」

真綿で首を絞められるような尋問の後、潤んだ瞳でジッと見詰められると罪悪感が湧くが。冷静に状況を考えると

「騙して悪いが正直自信がない！」

情けない事を堂々と言い放つ。隠さなただけ立派なのかもしれないが何処までも情けない発言だった。その発言を予測できていたからこそ追及者も爆弾発言を繰り出す。

「ならばそんな事がない様に。翼の家に御厄介になって宜しいですか？」

「同棲フラグきたコレ!!! 真面目に返すと今は一人だけど両親が何時戻ってくるか判らない訳で」

彼女との同棲は嬉しい。嬉しいが重すぎる。休日の自由が一切無くなり、監視されるのは勘弁願いたい訳で常識的方面から断ろうとした訳だが。

「ご心配なく。英国の御両親には既に来日前に御挨拶に伺っていますので。寧ろ『やつと俺達の子供らしくなったな。もっとやれ!』と御墨付きを頂いています。『不束者ですが宜しくお願いします』と御挨拶もその時に」

「あの馬鹿共が!!!」

流石、圧倒的な社会基盤を持つ令嬢。風雲つばさ城は外堀内堀を埋められ天守閣を残すのみだった。

「冗談です。では、新居の買い物に付き合ってくださいね？」

「ほえ？」

いましてたまで無表情なまま淡々と此方を詰問していたとは思えない優しげな笑み。

「どうせあちらから接触してきたといった辺りでしょう？ 日本に滞在する以上、日本の組織との接触は不可欠ですからそういう意味では丁度良いですよ」

私、そんな嫉妬深い嫌な女に見えます？ 小首を傾げ問いかける姿に何処までも感謝する頻りだった。同時に何処までも申し訳ない、その一言が心を満たす。

ああ、何て単純なんだろう。自分でもそう思うが男なんてそんなもんだ。神話時代のサムソンだって女に誑かされて髭を剃られてい

る。つまり自分は間違っていない。

「ふむ、二人の世界を作ってしまったって割り込む隙間がありませんねえ」

「んー、まあいいんじゃない？ 恵那は側に居ていいんだしね」

以上、Q.E.D. というか其処の二人、ほっといてくれ。

「其れ位なら構わんけどね。ならその間は家に滞在？」

「ああ、なら僕も御役に立てるかな。どうだろう？ 旧家の屋敷がそれなりに有るのだけれど口利きさせて貰えないかな？」

今回の一件の詫びも有るし。そんな事を宣まう男装の麗人。

「でしたら。翼の家や学校に近い範囲で融通できますか？ でなければ委託する意味がありませんが」

「ああ。なら鶯谷の辺りはどうか？ あそこなら根津にも赤羽にも30分圏内だし」

「あの辺りは旧家の屋敷が以外と売りに出されてますからね。少し時間を頂けますか？」

馨の確認を受け部屋を辞した甘粕。彼らが下手な物件を斡旋する筈もないしこの分だと即日で決まりそうだった。

「では翼。マイホーム探しと参りましょう？」

勝利を確信した笑み。何処まで掌だったかは判らないがそれは何処までも綺麗な、引き込まれるような笑顔だった訳で。

後書き

と言つ訳で。期待されてた方もいるかもしれませんがメアリーV S恵那は無く一気に社会戦へと移行。此処での問題が……「譬に手札が全くと言つて良いほど無い」んだな。その上で祐理の暴走やら恵那の接触、半年の既成事実とメアリー側へのみ手札満載状態。

一番の決め手としては『高松翼の帰属意識が賢人議会』よりである、という。要するに。交渉の様でいて交渉にすらなっていないんですな。『何か言いたいなら翼の下にこなきや言つ事聞く義理はない』と。

強いて言つと『日本を離れる気はない』という認識が手札にないでもないですがその場合は清秋院が出張るのでのではない訳にはいかないという……詰んだな、おい。

しかし、護堂は『自分が一般人だ』という認識なので是すら使えないという……何処までややこしいんだ、おい。奴に対する文句の付け方について、祐理は1巻で失敗しているんですが。正解はその内（俺が文句をつけに行く時）に。

まあ、日本の場合「（恵那や古老、斉天大聖の件もあって）無理に阿る必要もない」という事実もあるのですが。基本、カンピとの関係なんて「マイナスにならない」程度にしかなんねーよ。

尚、「あれ？ 全然吊るし上げになつてくなくない？」との御意見は黙殺の方向で。是、翼視点ですので。次回で『妖魔夜行』は終わると思いますが詳しい所はその際に。

さて。現在是で権能は3つ。オリピオーネ御用達のペルセウスを入れて四つとして。現状6つ（後二つ）を想定している。

今回の夜行の権能も。夜行の群召喚と合体して塵塚怪王の使役、戦闘でもメインを張れる権能だった。まあ後は本編でしてるとような修復。是は生物と見立てての記憶読取と干渉ですが。

便利系と戦闘系が一個でほぼ完備なんだよね。より正確にはサイコメトリーではないんだよね。共感能力に近いというか。サイコメトリーでは実は「経験のDLLはできない」ので。つーか、自分に最適化するって絶チルのあれは既にサイコメトリーの域を超えてるよおい（笑）。

一番近いのは『吸血殲鬼ヴェドゴニア』のかな。あれは「凶器が自分の使い方を教えてくれる」訳ですが。

んで、呪文はそのまま徒然草より。アレはもう著作権なんぞ切れませんので問題がなかった。羅豪教主の漢文ネタと同じっちゃ同じですな。

意識すると「色々多いと見苦しい。見苦しくないのはキャスターに整頓された本とゴミ箱のゴミだけだ」ってところか。

そして何となく思いついたスーパーオリーブオーネ大戦ネタ。

「世界を紡ぐ為には高松翼。貴方が全てのオリピオーネの世界を渡り、破壊しなければいけません。創造とは破壊からしか生まれませんからね……」

J u a t a p a s s i n g - t h r o u g h C a n p i o
n e !

「通りすがりの神殺しだ。覚えておけ！」

O r i p i r i d e . . . A . A . A . A z a z e l ! ! !

世界の破壊者高松翼。二次ファンの世界を渡り、その瞳は何を見る……

あかん、ギャグで書いたただけなのに成立するのが嫌だ。スパロボ風に全ての作品ごった煮で再構成するより一個ずつ短編連作式に書いて行くだけだから難度が低いんだよね。ぶっちゃけ、筆者がクロス先のキャラ造詣と神格を言峰式切開できるか否か、だけが条件だし。

まあ、読者様方の期待があつてかつ他の作者諸氏との合意がとれば、という限定なんで現状、脳内妄想で捏ね繰り回すだけの段階なんだがまず後者の関連で無理だろう。

クロス元のエッセンスや俺TUEEEの戯画材料としてカンピ、正確には権能とカンピオーネの絶対的な地位をソースとして欲しい方とは基本、合意しそうにないな。

感想欄の意見より返信：余談。護堂に必須な戦力は社会戦担当と八レムの主としてのエリカと剣の霊視役の祐理であつて、後一人は『二枚目の壁』。リリアナないし恵那のどちらかは物語、戦力的に奪つても問題なかつたり。

2011.8/23 馨とメアリーの会話を訂正、というか殆ど変えていないんだが。ネタが判らないと言うのでネタを追記。見たくない方は見ない事を推奨

ぶっちゃけ。本来ならこれ「閑話」であり、会話に頼っているのは自分でも判っているんだ（苦笑）。

・意識

「はじめまして男装さん」

三銃士より。もっとも、麗人なのは日本のアニメ版のみ。

「光栄だね、（ヒロイックな出会いを果たしたのに恵那に不意をつかれて）男を取られた女性」

「私は詐欺を行われたと行って悲劇の死エンドを起こす気はありません」

ワグナーのニーベルングの指輪より。詰まる所『良くも人の男に手をだしてくれたのお？』と言っているのである。

「リーヴとリーヴスラシルになっても良いですが。私の希望は薔薇

戦争からの紅白薔薇デューダーちょうでしようか」

「流石にスルトの火は僕も嫌だな。白薔薇位は期待して良いのかな？」

「仏蘭西でも結構ですよ？ 御似合いかと思いますが」

リーヴ、リーヴスラシル、スルトの火ノ北欧神話のラグナロクで生き残る男女。強行に手を出すなら日本を滅ぼして翼と英国に帰る、という意。

史実『薔薇戦争』より。この二つが争った結果デューダー朝が誕生。紅白薔薇に対して誓は日本も（恵那を基軸として）のって良いのかい？ と確認の意を込めている。

・大艦巨砲主義やまと、狙撃主義えいこくかんたい

言わずと知れた其々の有名な艦隊。アザゼルを基軸とする翼がスーパーロボット、もといヤマトの様にタフネス重視だから日本じゃね？ ドレイク艦隊の様に遠距離からフルボッコが基本ですよ、と。

・総括：こうして見ると。アニメネタは殆どないんだが。FEネタを薔薇戦争に変えただけだし。

自分でネタ記述するのって書いててキツイ。こうして見るとそう難しい事は言っていない様な？

執筆時BGM：Arcadia（如月千早）／The Idolmaster SP

? / 08 ・寵姫と麗人と狂茶会（前書き）

「黙ってる、台所の黒い高機動生命体」

「なんだと？」

今まで余裕めいた表情をしていたアレクの鉄面皮が動いた。挑発と判っていてもそう呼ばれるのは心外だったのだろう。

「黒づくめで攻撃をシャカシャカ回避して隙を見て一撃離脱。^{ゴキブリダイブ}是を天然戦士Gと言わずしてなんとという。汚いな流石ゴキブリきたない」

く10巻を読んだ後、唐突に思いついた過去編でのアレクと翼の一幕

「あ、それはそつちに運んで下さいな」

先日の事件から一週間程後、裏では色々と魑魅魍魎が蠢くも表向きは我関せず。高松翼と愉快な仲間達、もといメアリーや従者の姿は鶯谷の一角、とある屋敷に三人の姿はあつた。

先日の会談の後に斡旋された物件から購入した旧家の屋敷である。
「ほいほい了解つと」

彼女等の日本での住まい。その引越を行っているのだがその実、力仕事をしているのは彼女でも翼でも従者でもなかつた。

具体的には先日手に入れた百鬼夜行の権能である。彼等自身に意識を持たせ、所定の位置まで移動させる。文字通りの百鬼夜行。その内、

『F-15に使用してテッカマンバーサーカー！』
とか

『このフリゲート艦は私が頂いた！』

とか良いなあ、等と考えているのだがきつと其れは嫁に止められるのだろう。主に後始末の問題で。

目と口、手足が生えて勝手に動きだす食器や家具の群、絵柄としてはまるでデイズニーアニメや魔女の手による“勝手に掃除してくれる筈”だが異常な風景である事は間違いない。問題は誰一人として其れを異常と認識しなかつた事だが。

英国での持ちだしの際、文句を言ったのは女官長を務めるエリクソン女史のみだがカンピオーネの威光の前にあえなく屈した。

彼女の場合は寧ろ、姫君が気軽に動き過ぎだ、といった類ではあるが。其れに関しては逆に強く出られない事情があるのである。そ

の所為かアリスに対しての締め付けが酷くなる結果となったが。
尚、当の家具や衣類の搬送は英国からの翼アサセル自身による空輸。よって実作業時間は、準備から搬送、片づけまでも含めて半日もかからなかった。

この経緯を聞いたと英国在住のある魔王は

『権能の日常への活用ときけば聞こえは良いが便利な道具扱いしすぎだな。だが、まあ殴り合いしかできない脳筋共よりはよほど有意義な使い方ではある』

とコメントし、また欧州在住のとある魔王は

『折角近くに来たのに挨拶もないなんて酷いじゃないか。軽く決闘しゅうしあひしようよ！』

と言ったコメントを残している。

閑話休題。

そんな訳で三人であつという間に引越は終わった。最初に家を掃除する程度で済んだのだから当然ではある。人の手で自分で部屋へと運び込んだのはそうする事が憚られる衣類の類のみ。

かくして新生活への準備は着々と整えられていったのだがある意味では最高のトラップハウスとも言えるのだがこの時点で気付く物は殆どいなかった。

カンピオーネ！〜赤き蛇の魔王！

?・妖魔夜行/08・メアリ龍姫とかある麗人とティーパーティー狂茶会

寒さの中に春の気配を感じる頃となりました。

皆様におかれましてはますますご健勝のことと心よりお慶び申し上げます。

さて、このたび私達は下記の住所に転居いたしました。お互い出会う事はそうないと思いますがこんな良い所を紹介して頂きありがとうございます。

お近くにお越しの際はぜひ一度お立ち寄りください。

平成 年3月

Mary Louise of Navarre

? : * * - * * * * - * * * *

携帯 : * * * * - * * * * - * * * *

高松翼

携帯 : * * * * - * * * * - * * * *

追伸、引越を終え、3月 日にささやかながら茶会を催そうと思っております。

宜しければご参加ください。

『まつろわぬ百鬼夜行』とその後のゴタゴタを漸く処理し終えたある日の正史編纂委員会。珍しくネットサーフィンすら行わず仕事の端末に報告書その他を打ちこむ甘粕と決済の書類を捲る沙耶宮

馨。
そんな雑居ビルのオフィスに小包が『投函』されてきたのはそん

な時だった。

「おや、引越蕎麦とは古風だね。いや、王様の差配かな」

虚空より唐突に出現した、それは沙耶宮馨様、甘粕冬馬様、と宛名に書かれてはいるものの明らかに『投函』の魔術で送られたものだが、中身よりも添付された手紙こそ彼らにとって何よりも価値のあるものがあつた。

招待状、具体的には彼等の連絡先が書かれたアドレス。

「成程成程、是は値千金の物品ですね」

「そうだね。一緒にやっついていこう、という意味表示って事かな」

番号自体に価値があるのではない。そんな物は正史編纂委員会の力をもつてすれば調べるまでも無い。重要なのは『連絡先を教えられた』という事。

正史編纂委員会、正確には馨と甘粕は高松翼へのホットラインを手に入れた事になる。

「近いうち、挨拶に行くべきかと思つていたけれどあちらから態々招待状が届いた訳だ。どうするべきかな？」

面白そうな表情で小包を見やる馨だがその目は真剣だ。魔王との関係に関わるのだから当然といえば当然なのだが。

「此処で行かない選択肢はないでしょう。魔王閣下も歓迎者側にいるでしょうし」

「さて、それじゃその日の予定を空けておかないといけない。後は恵那にも確認を取っておくべきかな」

今回の一件で清秋院恵那は謹慎を命じられていたのである。不用意かつ独断によるカンピオーネとの接触という事で。最も、“これが彼女にも送られているのなら解除しなければいけないのだが。”

何せ、魔王直々の招待状だ。正史編纂委員会としてはそれを無視する訳にもいかない。

「と言うよりそうなる事を狙つてかな？」

魔王と言う『職業』の強権。それからすれば是位当然の要求だ。

自身に侍る愛人に対して当然の要求だろう。あるいは彼の細君の意

向かもしれないが。

「何にせよ、確認をしないといけないかな」

尚、余談だが万理谷祐理は未だ入院中である。霊視を無理矢理に行わされた弊害は未だ身体が丈夫と言えない彼女を床につかせる事となっていた。

かくて二人が向かったのは清秋院本邸、埼玉県は秩父。身も蓋も無く言つと山の中である。都内からでは関越自動車道を使う事になるが往復となると一日仕事であった。

前もつて連絡していた為か、屋敷の前に車を止めると清秋院恵那が直接、二人を出迎える。

「馨、甘粕さんも直接こつちに来るなんて珍しいね」

「何、今後の事で話し合う事は山のようにあるからね。当然だろう」「王様の件とか？」

撃てば響くように此方かゝるの欲しい情報が集まっていく。やる気が無いだけでこの媛巫女は社会戦もできない訳ではないのだ。御老公と現当主の後ろ盾がある為、する必要がないだけで。

故に核心部分の情報も当然の様に答えてくれる。この場合は明かした方がメリットが大きいという点もあるのだが。

「恵那の場合は秩父の屋敷に直接現れての手渡しだったよ。何でも孫娘を愛人に、なんて送り出した突拍子のない女性の顔をみておきたいから」とはいつてたけど」

ちゃんと眼にかけてくれてるんだよね、と嬉しそうにしている。

「ははあ、態々目の前で赤竜アサゼルの姿で降り立った、と。またド派手な事をされますねえ」

「自分がカンピオーネだ、と証明する意味では以上ない方法だろうね。清秋院家に仕える人間なら皆関係者だろうし」

話を聞く限り、宙に突然、赤竜アサゼルが現れたかと思うと人間の姿に変

わって玄関を叩いたらしい。その際の言葉が

『すいません、貰った愛人引き取りに来ました』

との事。これに対し当主曰く

『希望は一姫二太郎だがいいのかい？ とつとと胤付けして貰って子が欲しいんだが』

との事。

「うん、相変わらずの豪快さというか何を話しているんだ、と言っべきなのかな」

清秋院の当主を務める老女傑との会話の顛末を聞き、粹人を持って任じる馨も頭を抱えざるを得なかった。結局、この後顔合わせが目的だったのか翼は帰って行ったらしい。

「恵那。今回の蟄居はもうすぐ解くから一応形だけでもそれまでは従っている事。是は組織としての形式の問題だからね。今後、翼さんの廻りに『氣にいられば後は大丈夫だ』なんて考えでウロチヨ口されても困るだろう？」

「それは無理じゃないかな。恵那の場合もまず天叢雲剣に警戒心がいったみたいだし。おじいちゃま達の一件がなければ知り合って普通に御終いだっただと思うよ」

「酒池肉林が好きどころか下手な干渉が彼のご機嫌を損ねるといふ事は姫巫女の一件で既に判明してますからね。此処は恵那さんに頑張って貰うしかありませんか」

問題はその区別の線引きが他の面々には判っていない事。二匹目の泥鰌を狙ってくる者が居るとも限らないのだ。万理谷祐理の一件で正史編纂委員会は完全に下手を打っている。例え古老達の仕込みといえ恵那を御破算にはさせたくなかった。

「清秋院のご当主の方はどうなんだい？」

「ああ、ばあちゃんは『しっかりお仕えして胤を貰って来なさい』とだけ。あのばあちゃんなら『外国人の子なんて追い出せ』と言いだしそうなもんだけどね」

軽く一言二言話した程度で会話は終わったらしい。何を話したのかまでは教えて貰えなかつたそうぞうで。

「其処が鍵かな。恐らくは古老の面々に釘を刺されていたと見るか」「かの王様の首に鈴をつけるのを最優先した、と見るべきですかね」「清秋院家としては後継ぎが魔王の愛人になるならそれだけで十分だからね。無理な危険を冒す必要もないか」

結論としてみるならば。下手な干渉は寧ろ此方の首を絞めるのみ。恵那を仲介して自分達で関係を持つ。という結論になるしかない訳で。

必要な情報を手に入れると、恵那の処遇と翼への対応を考え、二人は清秋院を後にしたのだった。

「当家にようこそ。招待に応じて頂き有難う御座います」「歓迎しよう、盛大にな！」

清秋院家への訪問の後、記された日程に招待状を手に主従揃って鶯谷のとある住所に來た彼らを迎えたのは何時も通りの令嬢としてのにこやかな業務用笑顔とやりきつた“ドヤ顔”の魔王閣下。

招待主は其処が既に自分の邸宅である為かくつろいだ雰囲気を放っており、服装も長袖の白いドレスシャツに金青色のワンショルダータイプのジャンパースカートをあわせたゆったりとした服装。ボタンで前を合わせるタイプで足もとまで丈のあるそれは下のいくつかはボタンをはめておらず裏地の白いレースと素脚が覗いて見えた。その一方で翼はジーンズにシャツとシンプル極まりなく、この季節には少し肌寒いのではないかという恰好。玄關のハンガーに革ジャンがかけられていたから其れも彼の物だろうと推測はつくのだが。

「今、此方に居るのは私とヒルダだけな物で手狭な屋敷を含め、色々不具合が有るのですがそこはご勘弁下さいな」

「いや、職業：メイドが居る時点で変だから。つーかこの豪邸が手狭ってこの金持ちは」

「え？ 使用人がどうしておかしいのでしょうか」

「うわー、この御嬢様は。改めて御嬢様だよこんちくしょう。きつと『ご飯がなければパンを食べれば良いじゃないですか』とかいうんだ」

そしてまたしても人目をはばからずいちゃつき始めた。このままではこのまま時間が過ぎる事を危惧し馨と甘粕の間で視線のやり取りが交わされる。翻訳すると。

『ほら、甘粕さん。此処は忍者らしく』

『ちよ、忍者は関係ないでしょう！？ 私は馨さんのおまけなんだから此処は主人がいくべきでしょうに』

『忍者だから。こう言えば大概の無茶は通るって翼さんが言ってたから大丈夫だよ』

『最悪の魔王様ですよ、本当に……忍者になんて偏見を持ってるんですか』

こんなやり取りがかわされたのであろう。

「あのー、すいません。歓談中申し訳ないんですが夫婦漫才を止めて頂けると有難いのですが」

「ああ、御客人を招いているというのは申し訳ありません。では、どうぞ此方に」

長々とする積りも無かったのかあっさり切り上げると奥へと促す。その際、

「俺からするとは是でも十分な豪邸なんだがなあ。この半年、社会常識が壊れる音を何回聞いたやら」

「たかまつはなほやく魔王閣下の声が聞こえる。日本でいうならこの屋敷は歴と

した豪邸と称して良いのだが、外国人からすると基本的に日本の家は『兎小屋』とネタにされる事が有る位だ。使用人が一人しかおらず手狭な屋敷、というのは自然な認識なのだろう。

奥、実際には大開きの窓から陽光が降注ぐリビングに設えられたテーブルと椅子。馨が知る限りは旧家と言っても和洋折衷の有る意味日本らしい家屋だった筈なのだが其処はカーテンから何から完璧に洋間となっていた。

家は住む人間によつて姿を変えらるとは良く言われるが、有る意味持ち主の個性が反映された結果とも言える。

四人が椅子に其々腰かけると使用人ヒルデガルド護衛兼御目付役がワゴンに食器諸々を運んで来た。他にはティーポットや三段重ねのティースタンドにスコーンとサンドイッチが載せられている。

時間としては3時からと少々早い物の、所謂典型的なアフタヌーンティー。此処から始まるのは社交マッドと交渉ティーパーティーだ。

「さて、改めまして本日は良くお越し下さいました」

「此方こそお招き頂き有難う御座います」

挨拶から始まる軽いジャブ。開戦の合図。このままならば男装の麗人と英国令嬢の間で根回しと交渉と談合と言った駆け引きが繰り広げられただろう。

だが、此処にはそれを破壊しうる要因があった。

この交渉の焦点、当の魔王たかまつばひ本人である。

「なあ、メアリ。正直、この手の政事まつじごとを傍で聞いている事ほど苦痛な事はないんだけど」

ならば何故参加したのか、とは三人とも言わない。あくまで『御茶会』なのだから。

「はいはい、判りました。そういうと思っていたので翼には別にテイスランドを用意しておきましたので其方をどうぞ。全て手作り

ですよ？」

「うん、実はメアリーの手作りだと聞いてたから楽しみにしていたんだよね」

「相変わらず甘党ですよ。ジャムもべったり載せますし」

会談が始まるかと思えば再び始まった二人の会話。本当に楽しそうに、それだけが目的と言わんばかりにスコーンを食べ始めた男を愛おしげに見やると。

「さて、王はかのように仰せですが、宜しいですか？」

今まで魔王に向けていた優しげな眼差しは嘘のように消え失せ、笑顔のまましかし英国人らしい交渉人^{ネゴシエーター}として馨達に微笑む少女。彼女はこう言っているのだ。

『駆け引きは無し、妥協点できる限界点を示せ』

と。

やられた、と馨は思わざるを得なかった。言い方は悪いが魔王と言うのは神相手の用心棒、戦闘以外には基本役に立たない物という認識だった。多かれ少なかれ魔術師にとっての共通認識だろう。

それをどうにかこうにか被害を抑えているのが『王の執事』であり、『飛べないオランダ人』だ。

だが、『王の寵姫』は魔王との関係を使い此方の交渉の余地を剥ぎ取って来た。

虎の威を駆る狐？ 確かにそうかもしれない。だが、虎がその意を汲んでくれなければその交渉も意味がない。

『王の寵姫』、英国の『赤き蛇の魔王』との交渉窓口であり、かの魔王に民の願いを奏上しうる姫。この少女が英国、欧州において半年で確固たる地位を築くに至った理由が是だった。

「はあ、今回は完敗かな。こっちとしては恵那の一件さえ認めて貰えば後はどうにかできる」

此処だけは正史編纂委員会としては譲れなかった。日本の王に是

以上、利用しようとする虫がつかない為にも、日本の他氏族が余計な手出しをしない為にもだ。

事前の談合は無い物の予測はついていたのだろう。英国令嬢もあつさりとその意見を通す。その上で条件を上乗せさせていった。

「承りました。後は、今回の一件は清秋院恵那を経由して正史編纂委員会が依頼、まつろわぬ百鬼夜行を弑し奉った。是で宜しいですか？」

「願っても無いけど。百鬼夜行の一件は報告は済んだのかな？」

「いいえ。まだあちらに報告はしていません。この一件の総括も兼ねなければいけませんし」

何せ『まつろわぬ神』と行われた戦闘自体は幽世の中。詳しい内容を報告できるのは実質、彼女のみ。当然のことながら翼には其処らをどうこうする気は皆無である。

本人に聞けば『その辺はメアリーに任せてるし』とあっさり片づけるだろう。彼にとってはその程度の事ではないのだ。

日本の魔術組織が王に依頼しまつろわぬ神を退治する。メアリーの言わんとする事を察して馨は微笑む。成程、彼女とは仲良くしていけそうだ。

「ええ、最初のお話ですもの。今後はこんな事がないようにしたいですよ？」

「こう言った砲艦外交は遠慮したいけれどね」

既に駆け引きは終わった上での詰めと化した会合。その上で細かい部分を詰めていく作業でしかなかった。

「ああそうそう。そちらの靈視の巫女。貰った以上、返す気はありませんよ？ 所有権は主張させて頂きます」

「使い捨てはしないでくれると有難いかな、一応今代屈指の靈視の持ち手だから」

「前向きに善処はさせて頂きますね？」

トントン拍子に話は進み、残るは只一つ。

「では最後に。第三の権能、百鬼夜行の権能の名ですが。どうしましようか」

まつろわぬ百鬼夜行の権能、一言でいうのならば『無機物への干渉』。幾重の百鬼を現世へと現し、操り、連なり巨大な王として使役する。

同時にその物体や土地、そのものと共感する事で情報を引き出す。この権能に相応しい名前をつけて見せろ、という事だ。

かつこ悪ければどうせ勝手に改名するなり『百鬼夜行』とそのまゲヘナクリメイションま呼ぶだろう。『煉獄魂炉』も『モレクの火』と呼称する事の方が多いのだから。

王の権能を日本が名づける。是もまた大きな意味を持つからこそ馨は前もって用意はしてきた。故に一瞬たりとも間をおかず滑らかに口から言葉は滑り出る。

「『百鬼夜翔』。どうかな？」

「さて、甘粕さんから見てもあの家の攻略はできるかな？」

ナヴァール邸を辞して委員会の雑居ビルに戻る道すがらの会話である。話題は物騒極まりないが。

「無理でしょうねえ。色々と魔術が施されていますし政治的にも問題外です」

賢人議会の姫に手を出すというのは流石に問題が有り過ぎる。今回の一件、メアリー女史と清秋院恵那が本人同士で和睦したから良い物の下手をすれば四家である清秋院をすら切り捨てなければいけない危険な橋だったのだ。

「ま、物理的にも不可能でしょう。あの家、恐らくは権能がかかっていますよ」

魔術の要塞、それはメアリー女史の使う術式からして魔女術ないしカバラである事は予測がつく。そこに、何かあれば要塞として其れ自身が相手を迎撃する幽霊屋敷。雷速でかけつける魔王。カンシオーネ 攻略どころか甘粕にんじやとしても侵入すら難しい、というのが甘粕自身の個人的な結論だった。それ以前に行いたくもないというのが本音だが。

何より、下手に手を出せば。

「一族郎党だけで済めばいいですが。禄を食むものまで根絶やしにしかねませんよ、あの王様」

「あー、そういうタイプかな？ やっぱり」

「ええ、坊主憎けりや比叡山まで憎しとでも言いましょうか。報告書の記述が漸く実感できました」

彼は人間に対して怒りを抱く事のできる王である。

力の行使に躊躇いのない暴君である。

自らに不幸を齎すモノを消滅させるまで手を緩める事がなく、赦し、という寛容さを持たぬヒトである。

この記述が意味するのは。つまり所、人間を虫か埃と同程度に見ていない王と違い、人間として憎悪しうるという事。

サルバトーレ・ドニを評して『傘下の魔術師を蜂の巣に集まる蜜蜂程度にしか思っていない』という意見があるが是はある意味での真実であると同時に、『多少何かをしても気にしないだけの鷹揚さを備えている』とも言い換えられる。

何せ、所詮蜜蜂なのだから蜂蜜さえ取れば気にしないだろう。

だが、それらを人間の行いとして認識した場合、蠢きを鬱陶しいと感じる人間だった場合、若さの勢いに任せて力を揮う王だった場合。

その王は先程の表現でいうなら蜜蜂の巣箱を蜜蜂ごと破棄しようとするだろう。怒りのままに、冷徹に、女王蜂や幼虫も一匹ずつ潰

して行くだろう。

それが昨年の英国でおきた 王立工廠 の、イタリアで起きた七姉妹 の一件だった。

故にこそ、万理谷祐理を送り込んだ正史編纂委員会かわるとあまかすは致命的な失敗を犯してしまったともいえる。送り込んだ人間が嫌われてしまったのだから。

日本という国に初めて誕生した王の確認と接触。だが、接触という点では彼らは明らかに失敗と言わざるをえなかった。真贋の確認を最優先にした弊害と言えればそれまでだが。

そしてその傍らには既に外国人の女性が愛人として侍っている。調査員の報告によると殊更に喧伝されている訳ではないが欧州では既に事実として認識されている。救いは彼女のバックにある組織がそう性質の悪いモノではない点だが。

しかし、彼ら賢人議会は組織として傘下に入るでなくあくまで愛人を通しての関係というスタンスを通してしている。

これによりかの組織はイギリス所在の魔術結社、黒王子擁するアレク王立工廠 との衝突をさけつつ高松翼の力を借りられるという状況を作り上げている。

日本としては自国出自の王を掠め取られている訳で面白くない。現状、独り勝ち状態の清秋院への対応も含めて四家他が動いた場合の対策に正史編纂委員会として頭を使わざるを得ない。

「全く厄介な話だね。是で祐理を受け入れてくれれば他家への対応はそれで済んだのに」

恵那が現状、唯一の蜘蛛の糸である上、下手に罰して正史編纂委員じぶん会へ敵対姿勢を取られても困るといのが馨の判断だった。

「馨さんは彼自身にはアクションを起こす必要はないと？」

「必要ないよ。現状では下手に行動を起こして敵対感情を持たれるより僕らが近くにいる事を普通の状態と認識させるのが第一だ」

「まるで野生動物との交流みたいですねえ。ま、否定はしませんが」

「メアリー嬢は相手の後ろを一步下がって歩ける女性みたいだしね。仲も良好、これはこつちが付け入る隙は今の所ないかな？」

「非日常への案内人は金髪美少女。勇者の力を手に入れてヒロインと恋仲に。誰のシナリオかは存じ上げませんがシチュエーションとしては完璧ですな。一方、その間に割り込んできた空気の読めないお邪魔キャラ。彼からすれば自分の日常を悪い方向で壊された訳ですから成程、大和撫子は弐番目のヒロインだとKY枠ですか」

そう、高松翼の王になった経緯はともあれその後のイギリスでの一連の事件は綺麗に連なっているのである。まるで姫君を救い出す勇者の物語のように。だからこそ。

「尽くしてくれる女性が既にいるから衝突するだけ、ともいうかな」
「ああ、同属性ヒロインだから邪魔なだけですか。干渉される事自体嫌いのようですしそれで良いかと」

万理谷祐理の入り込む隙間はなかったとも言える。

「坊主憎けりや、で私達まで敵のカテゴリに入る前に祐理さんに憎まれ役を演じて貰った方が正解かもしれません。接触させなければそれで済むだけです」

祐理に対してボロカスな発言をしているが是は相性の問題であって仕方がない。彼は礼を尽くして頼まれれば鷹揚に引き受けてくれるタイプ。二人の共通認識からすれば問題ではなかった。この時は。

「うん、だから頼んだよ、甘粕さん」

「はい？」

「甘粕さんみたいにハートフルなゲームがお好みの様だし。現状、下手に愛人候補を送り込んで怒りを買うより僕らで直接接触した方が良いかな。いつそ僕がなっても良いし」

「ハートフルかはともかく。メアリー嬢が掌中の珠な現状では下手に干渉すれば私達が敵になります。現状では積極的な干渉は控えるべきでしょうねえ」

「其れに関しては一つ、僕に良い考えがある。詳しい話は帰ってからかな」

かくて、正史編纂委員会の方向性は決した。
同時に、万理谷祐理の処遇もまた決まってしまったのである。

「ごちそうさまー。あー、美味しかった！　というかヒルダさん何時の間に和食なんて覚えたの？」

「お粗末様でした」

お茶会と言う名の会談が終わった後、暫くは自室でまったりとしていたのだがそのまま夕食を御馳走になる流れとなった。

この屋敷、着替えやら家具やら諸々完備で翼の部屋が存在するのである。英国の屋敷に既に自室が用意されていたとはいえ特に疑問を覚えない辺りこの男、大分染まっていたりする。

それはさておき
閑話休題、ルイズ邸で御馳走になった夕食は御飯に鰯の煮物、ホウレンソウの和え物にアサリの味噌汁。うん、何処から見ても立派な日本庶民の夕食。

しかし、1人暮らしをするようになってからは滅多に作らなくなったので翼にしてみれば有難い献立だった。何か懐かしいというか感慨深い味だったのだ。ヒルダ女史はイギリス料理の他はイタリアと中華がメインだったと記憶していたのだが。

「それはメイドの嗜みです」

そんな言葉で返されると突っ込みようがない訳で。

「ま、いいや。それじゃまた」

「今日は泊っていかれないんですか？」

「明日、平日だしね。その変はこっちに持ってきてないから仕方ない」

「はい、ではまた明日。時間になったら連絡しますので」

「はいっはいつと、それじゃお休み」

雷光となって空へと飛び去る翼。彼が居なくなっただ後、ぽつりと呟く言葉はやはり彼に関する事で。

「やはり『おふくろの味』というのは特別なのでしょうか」

「最初に食べる料理ですから刷り込まれていて当然かと。直接、習いに行った甲斐があるものです。レシピも寧ろ喜んで教えて頂けましたし」

「ヒルダ……それ、なんと行って教わったのかしら」

「それはもう、『将来の旦那様の胃袋を征服したい』、と」

「っこりと笑う従者メイドの笑顔に不信感しか持てない姫君メアリーだが料理ができないという意味でどうしようもない訳で。

「それはさておきまして」

「おかないで」

「御嬢様。翼様と同居もしようと思えばできたのでは？」

高松家は歴とした一軒家だ。二人が住むだけの部屋の空きも十分にあった。しかし、先にその札を見せ敢えて引き下がったのは。

「駄目ですよ、ヒルダ。彼の場所にはそんなあっさり入っては。どうせ、呼んだら1分も立たずに来てくれるんです。今の状況でも十分、変わりませんよ」

“それに。一緒に住んでいたらマンネリしてしまいますし？”

首を傾げて発した言葉は内容と裏腹に何処までも可憐な笑顔と共に在った。

「『電光石火』で移動するのを疑問に思わなくなってくれましたし。翼の距離感では『歩いて五分』と言った所でしよう」

「それを認めると英国すら自転車でちよつと出てくる、といったレベルになると思いますが」

東京と英国に居たこの二人が交際（？）できていた最大の理由。実質、毎週会いに言っていたようなものなのだから確かに距離はデメリットよりもメリットの方が大きい。現状を維持するのであればだ。

「イギリスに居る限り、私は所詮翼にとって非日常の存在です」

それはある面で真実である。地球の裏までひとつ飛びだからこそ普段会わず、お互いの嫌な面を見ずに済んでいるのだから。

幾多の 全英を共に敵に廻した 経験を経てもそれはどうしようもない。

「ええ 日本という拠点と、支援者を得ました。今はそれで十分」

万理谷祐理。一度遠目で見ただけが凜とした佇まいとその無辜の民の守護者たらんとするあり方は記憶に残っている。翼の周辺を調査した際、同じ学校に通っていた事には驚いたが逆に彼女が動く動かされるであろうという予想を建てる事は容易だった。

霊視の力を持ち、ヴォバン公爵と出会った事のある彼女ならば民衆ウォールに対して攻撃したことがある、とされ愛人を持つと記されている翼に対してかの魔王を基準に考えるだろう。その上で理想的な君主たれ、と直訴する。確信を持って断言できる。

「他人に指図される事が何よりも嫌い」な人間ヒトに対して最悪な選択肢だというのに。

そして機密ランクを下げた部分に正史編纂委員会は見事に食いついてくれた。翼への彼等の接触をダシに日本在住の許可をもぎ取ったのだから幾ら感謝しても足りないだろう その道化つぷりには。

「私が彼の日常に不可欠になる事。その為の布石には彼の側で共に日常を過ごす事が不可欠ですから」

日本ではあの位の年齢で将来を決める事を『墓場に入る』というらしい。高校生が同棲、それもメイド付は重すぎるであろう事はメアリーにも想像はついた。

ならば隣にごく自然に寄り添い、そうなるだけだ。

『自宅』と『彼女の家』と選択肢があればどうか。後者に自分の部屋まで有り、生活環境が完備されていれば。自活する必要が無く其方に生活基盤あかばねが移れば。

「後は翼が自宅あかばねから此方に『来る』のではなく、学校からこの屋敷に『帰る』ようになれば良いだけ」

詰まる所、彼女が行っているのは事実婚への外堀埋め。

「私が独占する事も十分に可能でしょうけどね」

彼は別にハーレム願望が有る訳ではないし、他の王を見ればわかるがヴォバン公爵やサルバトーレ卿、黒王子の様に女を侍らせるのは寧ろ珍しいと言つて良い。そういった事例は寧ろ一般人上がりの場合にのみ適用されるものだから。

自分でいうのも何だがメアリー・ナザール美少女一人で彼はおなかないっばいだろう。

だが、彼は日本での生活を棄てる気はないだろう。いざ誘えば英国に居住してくれる、とは思つが日本という環境が彼にとっての基盤である事は間違いない。

だからこそ必要だった。英国の支持基盤とは別の日本の勢力とのより正確には自分が上位となった上での接触が。

清秋院恵那。彼女の出現はメアリーにとつても想定外だったが氏族制たる日本においては寧ろ好ましい結果だった。結果的には最善ベストに近いだろう。

清秋院恵那に対して敵対的な態度をとつたのは嘘ではない。嘘ではないがひとりの女としての彼女にしてみれば理想的な展開ともいえる。

沙耶宮馨の手が取るであろう手は腹ただしいのは確かだが。

「共存しているんですもの。冬位、ペルセポネと過ごす権利は与えないといけませんよね？」

感情一択と言つたが。翼の思考はその実、何処までも冷徹な理性の下にある。野生の本能と言つ現代人は忘れ去つた完璧な行動倫理システム。その上で己自身の命すらも容易に手札に乗せ得る、人間のみが持ちうる冷徹な思考くもつた。是はカンピオーネが皆持つている方向性ではあるのだが。

ポーカールでいうのなら。フルハウスが揃っているのに勝てないからと全手札交換を行う様な物だ。もしくはブラックジャックで19

から更にドロウを行うようなもの。

そんな愚かにしか見えない勝負を勝ちに持っていく、そんな人間達。翼に至っては『自分が死にかけでも相手が死ねば問題ない』と断言する始末だ。実際、今の彼を殺しきれぬ王は早々居ないだろうが。

「感情で我儘に動いている様に見えるから気づいている方は少ないんですけれど」

そう、感情で彼等は動く。其れは剣への執着であり、探究心であり、正義の執行であり、平穏な生活である。最も、全ての王は戦いこそに最高の悦楽を得る『戦士』なのだ。

そんな王を体制側に取って害が無い様に調整するのがサルバトーレ・ドニの執事マントレマで有り、冥王ジョンスマスの三賢人であり、高松翼のメアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァールである。

理想的な君主の在り方を示す姫は自身メアリー・ナヴァールが既レにいる。競争相手等必要が無い。

夜空を見上げ何が楽しいのクスクスと笑う。微笑う。嘲笑う。

「ええ。私は貴方の所有物もの。貴方の色に染め上げられた女。ですから私を助けた責任を取って下さいね？」

t o b e c o n t i n u e d . . . < 2 - 9

・後書き：そんな訳で後日談（中）終了。後1話でやっと終わりか長かったというか難産だった……神格解説してた方が楽だよ。マジで。

色々書くべき所はあるんだが……読者様方が予測したメアリーVS恵那が起きず何故あつさり受け入れたか、という疑問に対する回答でもあります。本編で書いたとおりなので特に此方で追記するべき事はなかったり。

どこまで展開を読んでいたかは……祐理が出張るのは想定内ですが、恵那は完全にイレギュラーです（古老の存在なんて知らんし）。腹黒令嬢としてみれば。日本での橋頭保と友軍の確保という意味で有意だったと。人によっては嫌うキャラかもしれませんが。

ま、護堂は実の所「王の為に全てを捧げる」覚悟がなければ相手にされない（5巻リリアナがその良い例）ので。其処ら王と巫女より騎士（竜）と姫（巫女）でサシの関係というのが護堂と異なっていると言えなくもないのですが。

その辺り、護堂のとの対比を書きたいとは思ってます。真面目な話を言うなら。護堂は

「護るべきものがあればもつと強くなれる」なんて間違ってる！

と言いつつ護るべき物が無いと戦えない、というか「身近な人間しか認識できない」から「システムが人間を護ってる」という認識がなかったり。よりぶつちやけるなら

「知り合いが無事で人間が死ななきゃインフラが幾ら壊れようごと

うにかなる」

と思ってる節がデカいんだよなあ……だから平気であれだけ建物ぶち壊すし「遊牧民」とか称されるんだが。

とか言ったら10巻の本性護堂で確定、最悪だ。

そついう意味ではコワレてる事を自覚していて、広範囲殲滅系のないドニが一番穏便な魔王なんだよねえ……

魔砲少女はそれすら超えた『何故動いているかが疑問の現象』なのでこのカテゴリからも外す。正直アレを人間と認識できる方の思考が理解できないので。

ぶつちゃけ、10巻でやたら「護堂の円卓」とその役割についてしつこい位触れている節があるのに辟易しただけとも言つ。少なくとも「紅き蛇」世界では護堂の円卓は生まれえない。てか、エリカの暗躍を許さないだろう。

てーか、ストッパーのない護堂はまあ、あれで良いかなとは思いますがどう考えても男の、ひいては女の敵だよ、アレ（苦笑）。

まあ、カンピオーネは基本、コワレた人間である、という前提があるので余り文句は言えないんだが。

てーか、最近の主人公は壊れてるのが必須なのかと文句を言いたい事しきり。対護堂シミュばかり完全にするのはどーなんだ、俺。

この辺りは次次回の話でやれる……と良いなあ。後1話主役と絡む前にどうしても挟んでおきたい話はあるので。

2011.9/12追記

何か、余りに「護堂（祐理）に辛すぎないか」との意見があったので。

基本、私は批評する上ではアンチヘイトに限らずこんなもんです。徹底的に丸裸にしてこきおろす。その上で肉付けする、という形をとっているのです。

此処で書いているのは書く上での装飾がない素の毒思考をそのまま垂れ流しているのが大事になりすぎた感があるかな（苦笑）。もうこの手のはやめとくか。

尚、祐理に関していうのなら「作者が良く判らん（苦手な）のでヒロインにできない」「扱いが悪いと言った所でしょうか。彼女を解析しきったのってつい最近なので。

尚、感想にあったSQジャンプを購入しての感想。絵が酷いとありますが私見としては

『まー、ありじゃない？』

と言った所でしょうか。確かに中途半端なデフォルメや女性の顔はチト酷い所があるが各カンピオーネの紹介の描写やJPSの仮面の造詣等は十分に、ぶっちゃけ、本家よりも上手いと断言できる。猪がデフォルメでしかのっていないんで酷く出来が悪く思ったのも事実だが。下手に中途半端な絵師を当てられるより余程私としては良い。多分、あれギャグ部分の積りで書いてああいいた変な顔になってる節もあるし。

護堂を下手に美形ズラで書かれるよりはアレでもいいかなあ。

個人的にはあの手の怪獣と人物を両立できる作家は増田晴彦氏が一番なのだが。あの人の主役像と護堂はあわねーからなあ……竜輝

やゼファの顔であんな真似されたくない。

く久々の閑話というか後ろの人達の相談内容く

J i 3 人間、上げ膳据え膳なら。そつちに入り浸ると思うんです。しかも自室有り。

先輩 30分の移動で飯 より 寝る（待て

J i 3 権能だと0です（爆

先輩 そんなことに権能使うなー!?（笑

J i 3 いや、翼的には日本>ナヴァール邸が日本>メアリ屋敷になっただけで感覚は変わってないんですよ（笑

先輩 おのれ（笑

J i 3 学校が根津ですから。メアリーのには根津>赤羽>鶯谷から根津>鶯谷 に平日の生活サイクルが変われば勝ちだと思ってるんではないかと

先輩 まあ、むしろ実質同棲になれば勝ちだろう。部屋があれば帰る意味がなくなる

J i 3 だって。何もしなくても御飯できて生活基盤もあって彼女いて。行かない理由がない

く10巻く

J i 3 個人の思想を体制側に返還するのがアンドレアのお仕事だと思っただけ

先輩 体制側で毒にならないために右往左往するのがアンドレアの仕事（待て

J i 3 あははー（笑）。今回のアレクを見る限り本当に大事ですな……つか、本当に酷えよ、アレク

先輩 まあなー ひどいなー（笑）

J i 3 色々ネタにしていますが。女の子1人送り込んで好意的になるならどれだけコストパフォーマンス良いかが実感できましたわい（笑）

先輩 そもそも護堂の前にカンピになるとゆーりが 護堂の後にカンピになるとリリアナがついてくる

J i 3 祐理が嫌なので恵那をくつつけたともいうからなあ（嘆息）

先輩 うむ、猫鈴でコントロールできるなら コスパはいいよ

J i 3 つつてもメアリもエリカ同様、鈴にはなっていないですなあ。寧ろ交渉窓口？

先輩 交渉窓口があるかどうかはとても大事だ（笑）

執筆時BGM：微睡みの楽園（TVアニメ「京四郎と永遠の空」エンディングテーマ）

? / 09 姫と王子と諸勢力(前書き)

つ、疲れた……(ばたり)

10 / 12 誤字訂正

英国はロンドンに存在する、とある会員制クラブに数人の男達が集っていた。

この国には会員制クラブが多数存在する。卒業生クラブ、軍人クラブ、政治家クラブなど種別は多種多様、しかも厳正な審査を経て許可されなければ入会はできない。

故にこれらのクラブに所属する事は英国紳士のステータスだった。元来、賢人議会もこんなクラブに端を発した道楽である。オカルトサークル

デイオゲネス・クラブ。此処に集う面々は賢人議会の重鎮であり発言権を保持する集団、そして

「諸君、是がメアリー嬢ちゃんの報告書だ」

高松翼に最初期から支持を表明した集団である。これにより彼等のはかの魔王にそれなりの影響力を保持していた。正確には翼自信が彼等に敬意を持って接していると言った方が正確なのだが。

そう判断できたのは交渉に於いて“誠意を持って対応するのならば能う限り誠実に、相手が礼を失した場合、ある一線を越えたのなら知り合いならば村八分に、敵ならば殲滅する”という日本人の性向を実体験として知っていたからに他ならない。

実態が変態だとしても。そう、変態の集団だとしてもその判断は確かな物なのだ。紳士と言う名の変態だが。

「ふむ、三箇目の権能か。しかも物質修復が可能！ うむ、この間被害にあつたミステリーサークルを直して貰えんものか」

「いやいや、そんなものよりエジプトのスフィンクスの修復をだな」

「ストーンサークルから過去の情報を引き出して貰うのはどうだろうか。我々が喪つた過去の記憶を手に入れられる」

てんやわんやと好き勝手に騒ぎ出す。オカルトに通ずる者にとつて概略と言えこの権能の価値は計り知れない為、当然の反応ではあった。

「御老体方、お静かに。本日集まったのは其れだけではないだろう。好き勝手に騒ぎ出す老人達に諫言を放つ声があつた。声の主は此処に集まっている中では明らかに1巡りは若いであろう。壮年を終えるだろう。」

「ふん、貴様こそ歴とした老人じゃろうに」

「若造が随分と偉そげなものじゃな」

「幾ら貴様が後見人とはいえ嬢ちゃんは皆でイジリ可愛がるものじや。アリスちゃんがあんなでは益々な」

仲間内だけなのか、普段被っている紳士の皮を脱ぎ棄てただの我儘老人と化している面々に内心で深く溜息をつく。そんなやり取りに呆れたか、見かねたか、話を進めようと思つたか、一人の老人が同輩の言葉を遮り質問を放つ。

「で、どうなのだね？ キング」

そう呼ばれたのは先程の男。白髪の中に今だ黒を残す髪をオールバックになでつけている50代と思しき容姿だった。黒髪碧眼、アジア系と思しき顔立ちである。より正確には香港人との混血なのだが。

中国人の妾の子、つまりは母方の名字である“王”^{ワン}を所以としてキング卿と呼ばれている男だった。半ば以上に蔑称に近いそれを本人は笑って受け流している。その辺りは流石、強かさと苛烈さを旨とする民族の出だった。

出自故、華僑系の魔術結社との繋がりを持ち、現状、ゴドヴィン公爵家と並び高松翼に対し最も有力なパイプと見做されている人物である。

「日本の正史編纂委員会が接触した事は疑うべくもない。結果として彼等と其れなりの接点を持ったようだな」

是には彼が後見を務める被保護者の少女の思惑も有るのだが、其

処は言わない。この面子ならば気づいているだろうし彼等とて損は無いからだ。こうしてみる限り変態紳士ばかりだが組織の重鎮を務めるだけはある歴とした腹黒紳士達。

「日本と接触を取ったという事は其れなりに此方も融通が聞くと云う事だ」

あくまで此方上位の関係だから、と続ける。その意見に集まっていた面々も納得したようである。

「下手に刺激してあの坊主を怒らせるのもマズいし」

「うむ。早く孫の顔がみたいものじゃわい」

「あんたの孫じゃないだろう」

等と雑談を始めている。概ね、悪感情は無いようだった。何せ、敵でなければ頭を下げる事に抵抗はない人間だ。老人との相性は悪くない。よほど、何かをしでかさなければ。

「それと、彼等からポンペイへの口利きとアンチモンの融通を頼まれた。全く、軍港にどうしろというのかあの子らは」

「ポンペイへの見学か。さて、何を見てくる気やら。アンチモンは御主なら楽な物じゃろう」

「魔教の方々とある程度折衝が必要だがね　尚、新日本製鐵にも清秋院が何か口利きを行っているらしい。炭素鋼に銅と亜鉛を合わせて凡そ50t、メアリーの^{ネライム}の半天使に続き、今度は一体何を造る気やら」

「ほう、八幡製鉄所がもとだったかの」

「元々官営じゃからな。戦前からのコネを使った結果じゃろうて」
物自体は珍しくも無いが量が尋常ではない。興味を持つという方が無理だろう。

「所でキングよ。お主の事だ、只というわけではあるまいに？」

王の仰せと言え。いや、だからこそそれを利益に持っていきたい。是は関係者の願いであり無駄な願望だった。基本的にカンピオーネの場合『被害を出さないようにする』事が最善なのだから。

単純に借りという形でも十分なのだが。何せ、英国とイタリアは

彼にかなりの負債を抱えている。それらの一部返済でも願えれば

そんな意味合いでの発言をしたのだろうか。

返答はある意味全員の期待を裏切るものだった。

「代価をして差し出してきたのが是だ」

キングが懐が取り出したもの。それは湯呑みサイズの鈍色と黄色が入り混じり全体に文様が彫られた 壺。

「是が何かの説明は要らないだろうが この程度の簡易な物でも我々では10年かかっても満たしきれない魔力が漲っている。それこそ、神獣の召喚を賄う程度に。十分ではないかな？」

製作に一流の魔術師が数週間から一月、星辰等も考慮すれば1年は優にかかる代物を一瞬で製作したという。魔術師にしてみれば身売りしたとて手に入れたい物。

鉄と真鍮。妖精が嫌い、魔力を遮断する卑金属を混ぜ合わせ創り上げた呪物。悪魔を封じ得る程の魔力を蓄え、また蓄電池として使用可能な呪物。アイアスの盾の様に製法こそ伝わっているもの事實上、作成不能と言って良い代物。

実を言えば、金銭で用立てられる物と交換する等正気を疑うのだが、作成者にしてみれば「3分クッキングで完成」Lvの玩具ではない。魔力も一週間程度で満杯に満たした物だそうだ。改めて彼に恐怖すると同時に友好関係を築けた事に神に感謝する

彼等には黙っているが。是は別依頼の料金も含まれている。内容はあるサイズのエメラルドを14個用立ててほしいとの事。どこからそんな知識を得たのかは知らないが彼等にはこの上なく似合いだろう。詳しい状況報告も兼ねて直接会っておきたい。

「皆様方。この春に一度、彼女を召喚してイジる……もとい、高貴なるものの義務を果たして貰うべきと考えるがいかがかな？」

【グリニッジの賢人議事に提出された日本での一連の事件、及び高

松翼についての報告書より抜粋】

(前略) よって、百鬼夜行とは原初の死神の形式を取る神格であるものの、その本質は道具 無機物を支配する存在であると言えます。

同時に、高松翼が百鬼夜行から篡奪した権能『百鬼夜翔(Damned Stalkers)』はかの神格より無機物、道具の王としての部分を集約した権能だと推測されます。

この権能は一言でいうならば無機物への干渉。道具をその機能そのものへの干渉や物質を疑似的に生命とする事で下僕として扱い、戦力と為す事が可能です。この群はまた、群体化する事で巨大な神獣の如き姿となる事が確認されています。現状ではその姿は二脚肉食恐竜の如き姿のみですが。

また、それもあつてか破壊された建造物へ干渉、『治癒』させる事で復元を行っています。特筆すべきはこの権能は術者の知識に拠らず物質の記憶を読みとる事で行う事、同時に是は権能である為、物質の加工も容易に行える事が判っています。

尚、この権能に正史編纂委員会は前述の『百鬼夜翔』との命名を行いました。

かの組織はカンピオーネ高松翼との本格的な接触を成功させたと見てよいでしょう。

M a r y L o u i s e o f N a v a r r e .

「接触を成功させた、の間違いでしょうに」

従妹の名で締め括られたあからさまな報告書に溜息をつく。春らしい青空も庭のガーデニングも彼女の心を晴れやかにするには至ら

なかった。

アリスの部屋に『投函』された報告書、その中に入っていたアリス宛の私信。

『と、いう訳で御従姉様。愛の巢に無断で入ってこないで下さいね？』

要約するならこういう事だ。此方は最近気軽な外出すら儘ならないうというのに気ままな物。そんな従妹の行動の反動か態々対霊体用の結界を張るミス・エリクソンの暴走っぷりが酷い。そんな事だから未だ独り身なのだ。

こういう時は籠の鳥である自分の身が疎ましくなる。自由に飛び回る事を覚えた彼女が居るからこそ余計に。

「俺は白兎じゃない。不思議の国に連れて行くのは別の人間に頼んで下さいな」

俺、魔王だし。そう言い捨て飛んで行った少年。

「明確に振られたのは初めてかしら」

と言つても。対等の、しがらみを持たずに付き合える友なんて彼女には片手で数えるほどしかない。それが当然なのがアリスという姫君であり、そういった姫で在れなかったのが従妹である。

鳥籠から解き放つてくれた存在であり、やってきた白馬の王子であり、自身を庇護してくれる竜。成程、従妹が心底惚れ込むのも当然だ。

「此方は籠の鳥だというのに本当に生き生きとして。私には窓から現れて連れ出してくれる王子様はいないのかしら？」

「さて、嘔吐きの意地っ張りな女に現れないだろう事は想像に難くないな」

嘆きとも、呼びかけとも取れるアリスの声に応えるのは庭園の小

道から歩いて来た青年だった。

黒髪、白皙の優美な顔立ちだがそれよりも先に仏頂面な、無愛想な印象を人に与えるであろう地顔。仏蘭西人だがそういった愛想を振りまくより知性と意思を何よりも感じさせる精悍な面差し。

彼こそは黒王子として名高いカンピオーネにして魔術結社 王立工廠 の総帥、アレクサンドル・ガスコインその人である。

「よくいらっしやいました、アレクサンドル。今日はどのような御用事で？」

「判っているだろう。翼きけんぶつについてのレポートの秘匿レベルを下げた事だ」

笑顔で歓待するアリスに対しにべもない。だがアリスも毎度の事と慣れた物だ。よって二人の間に形成されるのは陰謀めいた空間だ。否、此処で行われるのは歴とした密談。

高松翼。昨年夏に此処イギリスで墮天使アザゼルを倒し魔王カンピオーネとなった少年。

欧州魔術界では本名よりも『赤い蛇』『赤い竜王』等の名の方が通りが良い。寧ろ本名は殆ど知られていない。いや、いなかった。

「本来、公明正大にして魔王や神の暴虐から世界を護る為に存在する 賢人議会 がとる行動ではないですから」

「御前達イギリスが公明正大等と言っても笑い話にすらならんな。突き上げを喰らう前に先んじてバラす事で追及を交わす腹か」

「あら、酷い言いがかり。魔王としての自覚ができたのでお伺いしたら公開しても良い、との仰せでしたから公開しただけです」

理由はどうあれ一時的に 賢人議会 が独自に関係を持ち情報隠蔽していたのは事実だ。最も其れが魔王本人の意思だから。そ
ういった声明で実質、反対意見も封殺できていた訳だが。

誰だつて藪を突いて蛇を出したくない。まして、突いた人間けっしやが喰い殺された後では余計にだ。

一見すると彼はイギリス、賢人議会に力を貸しているように見える。実際、今の関係はそう言って問題ないだろう。アリスにしてみ

れば従妹が子を生してくればそれは『王』の血が入る。

望む所とはいえ彼はあくまで日本人、日本在住だ。どうやったとて正史編纂委員会の干渉は避けられない。最も

「馬鹿げた話だ。あの国にとって初のカンピオーネ。どうにか手を伸ばしたいというのは判らんでもないが」

「取り込もうにもその傍らには既に外国人が。下手に愛人を送り込もうにもあの子がそんな胡散臭い者を受け取るかは疑問ですね」

「あれ以上の関係を求めても無駄だというのは確かだからな」

「あの子が居る限り、ですけれどね。暫くは静観かしら」

両者に共通するのは懐柔が成功する筈もない、という事実の再確認。かの魔王と半年間付き合っただけの感想とも言える。

『何か勘違いしてるようだな、黒王子。この戦いに巻き込まれて何万人死のうが 俺の知った事じゃない！』

アレクの脳裏に初めて、此処で対峙した際の少年の台詞が脳裏に思い浮かぶ。後に和解した後

『あの程度なら許容範囲かな、と。被害がないに越した事はないけどあれくらいならまあ、仕方ないで通るかなって』

ブラフだと聞いたがああ時は間違いなく本気だった筈だ。

今にして思うと、自身とメアリーの今後の為に被害が出ないよう
に考慮したのだろう。派手な行動とは裏腹に驚くほど被害は少なかった。具体的には 王立工廠 の死者は無し。狙わなければこの数字は出ない。

イタリアの被った被害 ある都市の結社がほぼ丸ごと壊滅した と較べればそれは歴然としている。もつとも、三枚目扱いの晒し物にされたアイスマンは彼に新たな精神的外傷を植えつけられたようだが。

油性マジックで額に“肉”と書かれた上、股間を剥かれて腹部に“毛長マンモスぱおくん”等と書かれて写真を取られては仕方がないが。

晒し物と結社を含め一族郎党壊滅のどちらかがマシなのかは判別し難いが。やはり魔王カンピオーネ、人の言いなりになる筈も無く暴れに暴れてくれた。

混乱度合いでいえばあの時の混乱はかつての魔導杯争奪戦に匹敵しかねない。しかもそれはたったひとりの成り立ての王が引き起こしたのだ。

三人の魔王が参戦した一連の事件。一月にも満たないながらも本土からサルバトーレ・ド二のみならずヴォパン侯爵まで参戦していたなら。イギリスの被害は何処まで大きくなっていったか。

しかもその暴れた理由が『たった一人の少女の奪取』だと言うのだから呆れる他はない。彼にとつてはイギリスやその地にすむ人間よりも彼女一人の方が上だ、と行動で表わしたのだから。

今現在、賢人議会がかの少年と友好的な関係を築けているのもその辺りの認識のすり合わせができたから。

その過程で紆余曲折の末アレクと共闘、まつろわぬ神ランスロットと共に闘った事で彼らの関係は良好な物となった。正確には対グイネヴィア戦線の利害の渦に放りこんだとも言おう。

また、翼自身も学究の徒を目指しているという点が大きかった。その盗癖はさておきアレクの考察、研究自体には先達として敬意を表したのだ。一方黒王子もその点では話の通じる人間だと評価している。

何より『電光石火』の神速と同等の速度で援護を行えるという時点で得難い存在だった。その権能が自分から盗み模造した物なのは腹が立つが。

目の前の腐れ縁に言わせると『オタクとしてウマがあっただんですね』という事らしいが失礼な話だ。

アレクは彼を『現代ファンタジーのドラゴン』と称している。

そう、彼は『竜』なのだ。自分の洞窟にある宝物を見て悦に浸りまどろむ事を何よりも愛する竜。供物を捧げ丁寧に願いを述べたなら聞き届けもする。動きもする。

しかし己のモノを奪いに來た盗掘者や平穩を乱す不埒な侵入者、洞窟に不用意に近づいたものは決して許さない。

普段まどろんでいる分溜めこんだ破壊への欲求をここぞとばかりに発散させる。其処に慈悲という物は無く加減と言う物も存在しない。

アレクにしてみれば。撤回、離散した自分達の部下を一人一人探し出す執念深さに呆れと脅威を覚えずにはいられなかった。もし、あの少年と再び敵対する場合、今度は 王立工廠 は確実に壊滅するだろう。それも王同士の戦いになる前に、だ。

そういった意味では他の王よりも否応なく休戦協定、不可侵条約、ないし友好関係を結ばざるを得なかったとも言える。

メアリーを使い彼を利用しようとした、ないし彼を疑った人間。彼らは身を持って知る事となった。魔王カンレオーネという存在を。

なまじ『黒王子』ブラックプリンスという話の通じる相手がいたからこそ。なったばかりの若造と。与し易しと油断していたのだろう。

「お前の所の老人共は寧ろ笑って受け入れていたようだがな」

「デイオゲネス・クラブのお爺ちゃま方にとつては微笑ましい若者に見えるそうぞ。東洋人なのに王というより孫の様に扱って」

翼も寧ろあちらには年長者の賢人と、敬意を表して対応している。彼とメアリーの関係に真つ先に支持を表明したキング卿、寧ろあの老人にしてみればメアリーの婿なのだろう。実の所、彼らが英国内で翼に対し最初に支持を表明した勢力であり、彼の支持基盤だったりする。

「ふん、あの爺にしてみれば後見人をしていた愛娘メアリーがあの少年とくつつけてしまえば立派な婿養子の出来上がりだ。是以上ない懐柔策だろう」

「寧ろ。『日本人じゃしあれ位普通じゃろ』と。日本人を何だと思

つてるのかしら」

「ニンジャ、サムライではないのか？」

推測を並べるがこの辺りはやはり深窓の姫と唯我独尊カンピオーネの限界とも言えた。

交渉が容易いようでその実他の王と同じように交渉が絶対に通じない。今は『譲っても問題ない』から此方の依頼に乗っているだけ。気に入らないと思っただけで敵対するだろう。其処に理屈も道理もないから嫌だ』というだけで敵対するだろう。其処に理屈も道理もない嫌な物は嫌、という子供の癩癩にも似た強情さがあるだけだ。

是だからカンピオーネという連中は厄介だ。理性と知性を持って任じるアレクにしてみれば厄介な事この上ない。

「その『気に入らない』という感情だけで『まつろわぬ神』に立ち向かいカンピオーネになつたから否定できないのが困りものです」

その辺り、目の前の誰かも同じですが。

笑顔でそんな言葉をのたまう姫をアレクは全力で黙殺する。あの強情な男を筆頭に他6人と同じでは自分まで人格に問題がある事になつてしまつてはいかないか！

そもトリックスターから権能を手に入れておきながら当の本人はトリックスターの類が大嫌いと来ているから性質が悪い。サルデーニヤ島のルクレチア・ゾラ等とは相性は最悪だろう。

廻りに嚴重に隠してある何かを見つけたなら興味津津に『危ないじゃないか』と言ってどんな手段を用いてもそれを暴きだし作動させた上で『ほら、こんなに危なかった』としたり顔でのたまう。

人間でいうなら『石橋を叩き壊して鉄橋を掛けて渡る』タイプだろうか。その癖、大艦巨砲主義と物量戦の信望者の癖に自身を乾坤一擲を旨とする戦士だと誤認しているから性質が悪い。きつと仮装マニアと会わせただなら意気投合するに違いない。

「どうせこの休みに招聘するのだろう？ ならば暫く此方は傍観させて貰うぞ」

カンピオーネー！赤き蛇の魔王！

？・妖魔夜行／09・姫と王子と諸勢力

「君たちは何時もそうだ。描写が少なければ突然すぎると文句を言い、その為の経緯を丹念に描写したら今度は何が気に入らないのか『それって根本的な解決じゃありませんよね』と霧になる。まったく、わけがわからないよ」

少女達に向けてそんな言葉を放つのは白い身体に赤い目が印象的なぬいぐるみのような生命体。自らをジイサンとなる上位世界の端末。

「ふざけないで、ジイサン……いいえ、JUDGMENT SACK
ERR！」

「ふざけてなんかいないさ。僕達はいつも真実しか言っていない」
「特別になりたい、と力を受け取る者が正常で居られる筈もない。
大衆からの声援を力に変え、しかし迫害や否定の意思に叩きのめされる」

其処には悪意も善意もない。只、人間を観察する存在として見る視線があるのみ。故に発言は容赦なく少女達の心を暴き立て、切り刻む。

「オリー種を得てオリ主になった人間は何時かアンチへと墮ちる。
そして、その際生まれ負の感情エネルギーは僕達によって採集されこの宇宙の終焉を伸ばす為に使われるのさ。無駄のない、有意義な使い方だろう？」

「はい、はい。ではそういう事で。失礼します。」

ある雑居ビルの事務所の中。備え付けの受話器を下ろすと辟易とした表情を隠そうともせず愚痴めいた文句をそれでいてどこか面白そうに口にだす。

粹人を持って任じる馨にしても面倒な話だったらしい。

「全く。直接の査問会ならば既に終わっただろうに一々ちよっかいばかりかけないで欲しいな」

「お疲れ様です。どうでした？ 上の方々は」

先程まで見ていた動画サイトを閉じ上司の首尾を確認する。そう、先程まで甘粕は上司が電話で受け答えする横で堂々と遊んでいたのだ。

「どうもこうもないよ。全く、カンピオーネに対してどうしろというのか」

「と言っても。馨さんが万理谷祐理を送り込んだのは明らか悪手でしたからねえ」

「それは否定しないさ。メアリー女史に塩を送られてなければまずかったね。流石は魔王様の一喝」

あの狂茶会マッドテイーパーティでの交渉。一見すると寵姫メアリーの一方的なゴリ押しに見えて、その実かなりの利害調整を行っていたりする。

「今回のまつろわぬ神の撃退と新たな権能に関わった事実、恵那という愛人を送り込んだ結果得たパイプ、是に加えて魔王閣下直々の御命令。彼の気性の荒さはあの老人達も知っている筈だ。ま、当分は安泰だね」

是らは『正史編纂委員会が協力して解決した』のだ。かの寵姫かみにこう報告された以上誰も文句を言う事は出来ない。そして是かみ以上自分達何らを求めるのか？ と。

人の悪い笑みを浮かべる。自分の手腕によるものではないが成果

としては十分だった。何より、失敗例も提示できているから早々、無茶な真似はないだろう。第二の清秋院恵那もリスクを鑑みれば出ないと言って良い筈。

「所詮、老人たちも文句以上は言えないさ。御姫様共々文句程度で済むなら安い買い物だね」

「最も、当分彼女に頭が上がりませんけどね。其処はどうお考えです？」

「何、彼女も別に無茶をする気はないようだし。Win-Winでやっていけると思うよ。うん、有意義な取引相手だよ、彼女は」

『皆でしあわせになりましたしょう？』

何故、其処までしてくれるのか、と問いかけた際の返答。『みんな』の対象は誰なのか、『しあわせ』とは、と言いたかったが。

「所で甘粕さん。仕事中に堂々と遊ぶのはどうかと思うけど」

「何を仰います。是も立派な仕事ですよ。かの魔王様のとの円滑なコミュニケーションの為の情報収集です」

弁解中に脇でアニメ観賞をされては流石に思う所があったのか珍しく率直な発言をする警。だが、甘粕は涼しい顔で受け流す。

「魔法少女ウロブチ ほむら」。かの魔王様の今期の本命ですし話の種に見ておいて損はないかと。録画データもありますし後で警さんも見ておいては如何ですか？」

そう。甘粕にとっては仕事中に堂々と遊ぶ口実ができ、悪い事ばかりでも無かった。彼との接触役となった事が良いことか悪いことかはさておいて。

「あの王様と仲良くなりたいのなら必須です。さあ、私のコレクシヨンから厳選した物から後で貸し出しますので見ておきましょう」

「それが必須と？」

「ええ。諦めて覚えて下さい。何、神話伝承も彼の趣味ですがそれだけでは会話についていきませんからねえ」

魔王との会話の為にオタク知識必須。無論、馨とて携帯ゲームは遊ぶし知識皆無という訳でもないがそこまでとは思わなかった。一先ず話の流れを変えようとその魔王をネタにする。

「で、その魔王閣下はどうなさっているのかな？」

「先週は『そうだ、京都に行こう』と言われるて怨霊やら歪みやらを一切合財食い散らかしていききましたよ。放生院にいつてきたそう。今日は何でも『Jアークでイスカンドルにコスモクリーナーを取りに行ってくる』そうで」

「……何を言ってるんだ、あの人は」

「さて？ 意味がないのかネタなのか。はたまたなんらかの寓意が含まれているのかはさっぱりですな」

呆れた口調の馨を面白がるように飄々と返す甘粕。

「判る範囲で言うならナヴァール邸の庭に建てられた工房 私としては工場と呼びたいですがね に、清秋院の口利きでなにやら大量の資材が運び込まれている事、魔王閣下が鹿児島から沖に向かって行った事が確認されている位ですか」

「ああ。沈没船の引き上げかな？ 彼の権能なら確かに可能だろう」

「さて、現状で推測できるのはその程度です。是は教えてくれるまで茶々を入れない事をお薦めしますよ」

「どうしてだい？ 手伝える事もあるかもしれないじゃない」

「手伝ってほしいなら清秋院の様に打診されてます。『趣味に余計な口出しをする』なんて命知らずな事は私にはできませんよ」

元々の性格として『他人に口出しされるのが嫌い』な上、趣味にはのめりこむタイプだ。此処は完成してから『な、なんだってー！？』と驚くのが最善の選択肢だろう。

「ああ、それと。御姫様が万理谷祐理のお見舞いに行きたいそうなので案内をして欲しいそうですよ」

「僕を御指名なのかい？」

「ええ、御指名です」

「わかった。後で日程を詰めておくよ」

病室のベッドで目を覚ました万理谷祐理は未だ自分の体調が戻っていないままだと自覚すると物憂げな溜息をついた。

病院で意識を取り戻した後、祐理は引き続き入院したままだった。入院とはいえ、個室だしストレスを感じるとまでではないのだが。

治療の術でもかけて貰えば良いのだろうか今回、倒れたのは肉体の損傷ではなく、極度の、そして強力な霊視を行ったことによる脳と精神の疲労の為、そのまま静養した方が良い、との判断が下ったのだ。結果、彼女は未だ病床の床にある。

自分の身体の貧弱さを恨めしく思い、今回の件も含め自分の至らなさを痛感しどうすればよいのかと悩むも答えは出ない。其れ位、祐理にとつて高松翼という魔王は理解の埒外にあった。

ヴォバン公爵の様に凶悪無惨と言う訳でもない。しかし、その行動は何処までも己の思う俥に進む。自分の諫言をも受け入れてはくれないだろう。ならば自分はどうすれば良いのか

そんな事を考えているとコンコン、とドアをノックする音が聞こえる。

「はい、どなた様でしょうか」

「祐理、僕だけど入って良いかな？」

「馨さん。どうぞ御入り下さい」

見舞いだろうか、聞こえて来た声は沙耶宮馨だった。祐理の目が覚めてから一度来て以来だ。恐らくは正史編纂委員会としての通達か何かだろう、と見当をつけたのだが。

「お久しぶりです。具合の方は如何ですか？」

先頭に入ってきたのは金髪の少女だった。

メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァール。万理谷祐理は実の所、彼女との面識があるのだ。最も

「さて。この間ぶりと4年ぶり。どちらで言った方が宜しいかしら」
互いにかの公爵の忌まわしき儀式の生き残りなのだ。とはいえ。

「姫様。申し訳ありませんが私はあの時、貴女と面識を御持ちした訳ではありません」

「『姫様』ね。どの口が言うのやら。王への諫言は口にできたとして私へは慇懃無礼な態度しか取れないという事かしら？」

居たという事実だけで祐理は彼女に会ったと気づかなかつた。寧ろ、あの魔王の前で他人に気を使うなんてできる訳がないのだが。

「アリス姫しか見ていなかった人に今更姫君と呼ばれても困るのだから。それとも、首輪としてしつかりと翼を管理してほしい、という事かしら？」

自分はこのカンピオーネだけでなくこの女性にも何か失礼を働いたらしい。しかし、内容は思い浮かばず

「メアリーさん。申し訳ないが家の祐理を苛めないでくれないかな。貴方と違つて世事に通じている訳じゃないんだ」

「良くできた“御嬢様”です事。それを言うなら私も“御姫様”ですよ？」

「訂正、祐理は君や僕達と違つてあくまで一般人出身なんだ。大目に見てやってくれないかな」

「はあ、是はサービスして差し上げます」

彼女を案内してきたであろう譬に宥められる事となつてしまった。しかし彼女達は何をしに現れたのだろうか。自分の前で態々雑談に興じるほど二人とも暇ではないと思うのだが。

「簡単に言つと。今後の貴女について、でしょうか。色々面倒な事になっているので」

「面倒にしたのは貴女じゃないか」

「拒絶されるような人間をリトマス試験紙に 是は前にも話し

ましたか。どうせヴォバン公爵の同類だとも思っていたのでし
う？」

「そりゃ、あんな報告書を廻されればね。今にしてみると、何処
まで計算されてたのか疑わしいが」

二人の会話が良く判らない。

「だったら。何故私が此処に居るのか考えるべきでした。そんな
間に待るとでも御思いですか？」

御尤もだ。彼女の行動は宛がわれたからではない事はその手の事
に疎い祐理にすら判る。

「貰ったから、とあの時はああ言いましたが。正直、此方では手
にあまりますので」

金髪令嬢×アラーが此方を見やる。無関心な、只物を見る様な眼。口に
した言葉は。

「馨さん。貸しにしておきますのできちんと管理しておいて下さ
いね？」

高松翼は高校生である。当然ながら学校に通う訳で。魔術師にと
つての認識はどうあれ、本業は高校生なのだ。故に学校にも通うし
部活も行く。

最も、此処暫くはバイト……もとい、魔王稼業で色々とゴタゴタ
していた為部室にも顔を出していないのだが。それを勘ぐられて三
バカに

『同士S、高松先輩に最近、女の匂いがしてきたとは思わないか？』

『ああ、感じるぜ。年齢〓彼女無しの男だけが持てる心のウソ発見
器にピンピンとなあ！』

『このモテ男と一緒に俺も死ぬ！』

等とウザったかったのでちよつとばかり折檻をしたが、まあ三バ

力だから死ぬ事はないだろう。どうせ、ほつといてもゴキウリの様に死の淵から這い上がる。

学校から少し歩くと『電光石火』を発動、赤羽の自宅へと荷物を置いて夕飯を食べに鶯谷のナヴァール邸に行くのが常なのだが今日は予定を変えなければいけない様だ。

「あ、王様。今日は早いんだね。前は7時過ぎだったのに」

高松家の前に清秋院恵那が佇んでいたのだから。前回会った時と変わらず制服を着込み、背中に背負った布袋　天叢雲劍は変わらずだが傍らに大きな旅行鞆の様な物を携えている。

「清秋院。前にも言ったが来るなら先に一報入れてくれ。其処で待たせるのもなんだし」

「態々呼びつけるのも失礼かな、と思ったのとそう言われても携帯の番号教えて貰ってなかったし」

「悪かった。つーか、君まだ蟄居してるんじゃないの」

「それは王様が態々清秋院の本家に来てくれたから。後、今回はやりすぎたんで改めて謹慎させられるになりました。御厄介になります」

“ 御厄介になります ”

恵那の足元の旅行鞆をマジマジと見る。謹慎で御厄介になる。成程、謹慎という名目で監視と、恵那という首輪を嵌めに来たか。妙手と言えるだろう。

「沙耶宮馨エ……そう来たか」

「えと、馨やばあちゃん、おじいちゃんにも言われてきたんだけど迷惑だったかな？」

急にモジモジと恥じらい出した少女を見ながらなんとなく思う。

清秋院恵那は美少女の容姿以上に奔放さや野生児と言った特徴が目立つようだが本質的に大和撫子　　と言っか、大名夫人というかどうかにも、普段の性格や言動も自覚的に演出している様な気がしてならない。

この間あった万理谷祐理等より余程乙女、もっと言っなら『良家

の跡取り娘』としての自覚が確りとしているのではないか。

本質的なトラブルメーカーよりは其方の方が付き合いやすいのは確かなので有難いのだが。

「まあ、とりあえずあがって。」

「とりあえず上がって」

玄関の扉を開け中に招き入れる高松翼の後をついて行きながら清秋院恵那は今後に思いを馳せた。馨が清秋院家に来た後、言われたのはこういう事だった。

『謹慎して欲しいんだ。具体的には翼さんの家で。うん、古老や清秋院の当主にも了承は得ているから答えは聞いていないよ』

ある意味で馨らしい策だった。メアリー・ナヴァールへの対抗馬とでも踏んでいるのだろう。そうなる気はなかったが馨の手配はしつかりと利用させて貰うつもりだった。

「はあ……とりあえず。今、冷蔵庫は空なんで後で鶯谷な。電話はしておく」

「メアリーさん？ 王様今、あつちでご飯食べてるんだ」

「清秋院がこつちに泊る……暮らす？ ならそうもいかんけどな。」

どっかで買ってくるのも良いが今日はそのまま行こう」

「で。家に来たのは正史編纂委員会の差配だろうが。清秋院はそれで良いのか？」

テーブルに麦茶の入れたコップを置いて向き合つと、本題を聞いて来た。何か疑い半分のらしい。恵那にしてみればあれだけ動いて今更なかつた事になるとは思っていないのだが。

「え？ だって、王様だって認めてくれたじゃない。お持ち帰りつていうの？ までして」

「何処でそんな知識を得た」

「甘粕さんに。』是でバツチリ！ 高松翼との会話マニュアル〜ギヤルゲ用語入門編〜』っていうのを貰ってそれで勉強したんだけど」
「あの忍者アアアアア！！！」

叫び出す所を見ると間違っていたのだろうか。金髪巨乳とか黒髪巨乳、巫女、令嬢とか属性等色々と見た事も無い単語ばかりで自信はないのだが。

『大丈夫。金髪令嬢枠のメアリーさんも強敵ですが恵那さんも十分に行ける筈です』

と太鼓判を押され渡されたのだが恥ずかしくて実は半分も読んでいなかったりする。

「あの忍者、今度絶対ハイスラでボコるわ……それはさておいて。万理谷祐理の件は良いのか？ あんな目に合わせてるんだが」

恵那と知り合いという事は聞いているのだろう。恐らくは是が彼の線引きの基準。だから恵那自身も飾らない本音を口にした。

「祐理は友達だけだね。それと是は別。旦那様にお仕えして仲良くして子供を産んで。そういうのは自分でするって言わなきゃ駄目だよ。自分で意思を示さないよ。メアリーさんも言ってたでしょ？」

「ま、あの巫女は其処ら判ってなかったみたいだけどな」

「恵那は、おじいちゃまに言われたけど、王様に面倒を見て貰おうと思っただけから。その、迷惑だったら妾でもいいからさ」

「なんでそう恥ずかしい事を言ってくれるかね。一介の高校生には荷が重いぞ、おい……ま、万理谷祐理の認識に関しては納得、結局そっちに差し戻される形になったみたいだしな」

「譬に聞いた限りではメアリーさんとの話し合っただけ解放したというか王様達が借りられる扱いになったんだよね？」

「らしいな。俺にとってはぶっちゃけ、要らないし性格的に合わないし。メアリーが貸し出すって形で貸しを作ったとかそんな形だろう」

「あれ。気にならないの？」

「メアリーにその辺は任せておけば悪いようにはならんしね。てか、清秋院に続いて二人目な上にウザいし」

「あれ、それじゃ恵那の所為で祐理はあんなっちゃった？」

「んにゃ、それもあるけどそれはおまけ。あの巫女は俺みてねーもん。俺を通じて誰かの影に怯えてるし」

そんな人間にどーこー言うのも言われるのも御免だね。そんな言葉を放つ目の前の男の言に恵那も納得した。

自分だって夫として迎える男が家や権勢目当ての男なんてまっぴらごめんだ。その上で誰かの代わりにされているとあつては関わりたくもないだろう。距離を置くだけで済ませるのは寧ろ優しい方だと理解できた。

表向きの理由ではなく本音を告げてくれた事に自分が懐に入れてるんだ、と実感する。

「ああ、清秋院。丁度いいからいつとくが。俺は勝利なんて求める訳でもないしな。栄光を齎す事もできない」

『縁あつて、あなたのお近くに控える身となりました端女にございます。わたくしも清秋院の家も、叶うならばあなたさまの御寵愛を末永く賜り、共に霸道と王道を歩ませていただきたく願っております。どうぞ、この御忠義をお受け下さいませ』

以前、彼に初めて会った時の自分の言葉だ。

「確かに魔王としてそれもありなのかもしれないが　俺の知つ

た事じゃない。俺は好きな娘むすめと楽しく暮らせればそれで良いんだよ

だから、それに手をだした奴は誰であろうと許さない。それだけだーね」

気に入った人間にはどこまでも手を貸すし骨も折る。気に入らないのなら何処までも風潰しに叩き潰す。結果、知り合いが地に満ちる。

恵那が知る由もなかったがそれは奇しくもかの墮天使アザゼルの在り方そのもの。

「それじゃ、恵那は王様のお妾さん、という事で良いんだよね？」

「其れは変わらないんだな、おい」

「だって、あんな堂々と自分を寄越せなんて言ってくれたんだもの。ちゃんと責任とって貰ってくれなくちゃ」

「否定はしないけどなあ……とりあえず友達から始めたいんだが。いいかな？ 後な。俺は俺のものを手放す気はないぞ」

変わった人だ。王様ならもつと強引に言っても良いのに、自分達の世界の知っているのに、恵那を一人の女の子としか見ない。そう、としか見れないのではなく恵那にはそう接してくる。まるで清秋院の権勢がどうでも良い様に。

その癖、王として清秋院の家にも現れて恵那を自分の物だ、等と宣言する。『政略結婚相手に恋愛したい』だなんておとぎ話の様だ。成程、イギリスの御姫様が好きになるのも当然だろう。

恵那とメアリー・ナヴァールがごく僅かな会話で合意に至ったのは別に利害が絡んだからではない。それも有るがそれ以上に同類としての認識が持てたからだ。

“良家の子女として後継ぎを産む女”としての自覚。その上で女として愛されている事実。こんな人ならきつと一緒に居て退屈する事も、後悔する事も無い。ずっと恵那をドキドキさせてくれるだろう。

だから、恵那が取る行動は一つだけだった。

「不束者ですが。未永く宜しくお願いします」

この世のどこでも無い場所、人ではない存在達が集う場所、生と死の境界、幽世。

其処に集っているのは古老と呼ばれる老人達。

「さて、御老公。こ度の羅刹の君ですが如何なさいますか？ おなごに対していかなる振る舞いを見せるか。それ以上に巫女を送り込むべく動いた訳ですが」

「あの発言は気負いはねえが脅しでも何でもないな。有り得る選択肢の一つとして上げてやがる」

厄介なガキだよ、本当に。そう呟く須佐之男に異を唱えるは玻璃の瞳の媛。

「私は、かの君は十分に善き方だと思われませんが」

「おいおい、あんな虐殺予告をしておいてか？」

「媛。正直、同意しかねますな」

「王の、勇者の行状に関してその程度で善悪を問うのは無意味だと言わせて頂きます。そも殺めた人の数に関しては御老公も御坊も言えた義理ではありませんまい」

殺人を犯すからではなく、己が想いを貫き通すからこそ王だとはつきりと告げる媛。それはかつて勇者に仕えた経験からくるものなのか。

「いてえトコを突かれたな」

「それがしも確かに多くの人を死に追いやりはしましたが。昨今の世の中であそこまで言える人間というのはどうかと思われれますな」

「だからこそ。羅刹の君と成り果せたのではないでしようか？ そもそも、あのような仕儀を行い、かの君の逆鱗に触れたのは我らです。最悪の事態にならずに済んだ事を喜ぶべきではないでしよう」

「媛、其処まで後押しする理由はそれだけじゃないだろう。其処だけなら他の神殺しも同じ筈だ」

「女としてはあそこまで愛されるといいうのも羨ましいものですから」「それが本音か。だがまあ、あの迷惑なガキ相手に有効だということも確か」

「成程、確かに不躰でしたな」

「さてな。夜行をでっち上げて試したは良いが。夜行の権能を手に入れるのはともかく、俺の暴風まで盗んでいったのは目端が利くと

「いつていいだろうが」

「あの羅刹の君、竜蛇の神格を色濃く受け継いでおられますからなあ。正直そこが不安では御座いますか」

「神殺しは最初に倒した神格が基になって権能を手に入れて行くからな。せめて牛頭の種類が最初だったらよかつたんだが」

「そちらなら御老公とも近い。」

皮肉なものですな。末世　　羅刹の君が群雄割拠を為し世界そのものが乱れし時現れ、地を均す神。

幾多の地母の神力を奪い、貶めた末に闘いに倦みこの東の果てで眠りについたというに当の端女自身が未だ動いてるとは」

「さて、あの傍迷惑なガキが眠って人の暦で千年だ。神殺しはあのガキで7人目。正直潮時かもしれんな」

「かの神子と縁深き地ではその事実すら忘れ去られ救世主の伝説となり変わっているそうですな」

「あのガキの力の予備を詰め込む大釜が聖なる杯にすり替わるたあな。迷惑な話だ」

「かつてあの方より離れこの国で幽世に隠棲したというのに。この国の若者があの方と縁深きかの島で羅刹の君となり縁を持ってしまっうなんて……結局、私とあの方はどこかでつながっているのかもしれません」

「それにだ。くく、聞いたか？　なんとも俗物というか小さい望みと言っべきか」

「ええ。王になって望むものが普通に暮らす為、それを邪魔する神が邪魔だと言いつちられましたな。いや、その傲慢さこそが王の王たる証でしょう」

「そんなものの為にかの羅刹の君は命をかけられると仰られています。それは人の素晴らしさかと存じます」

「さて。『現世の事は俺がやる』と宣言してくれたんだ。隠居爺として高みの見物とさせて貰おうぜ？」

かくて。新たな7人目の王の名は世界に認知された。

「成程。それは確かにまつろわぬ蛇らしい。グイネヴィアとやら。わたくしの配下を送り込みましょう。かの大聖を復活させるのです」

其れは新たな火種の嚆矢かもしれない。正義と言う名の争いかもしれない。

「こんな王が誕生していたとはな。しかもこんな傍で暴れてくれたとは。ヴォバンの所領で好き勝手な真似をしてくれた物だ」

全ては糾える縄の如く吉兆を呼びこむのかも知れない。

「メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァールです。後一年程するとメアリー・ルイズ・オブ・ナヴァール・高松になる予定です。宜しく願います」

一つ言える事。それは『始まる』という事。

r!
t o b e c o n t i n u e d . . . N e x t c h a p t e

初めに。はい。まるまる一回空いてしまい申し訳ありません。事情として言い訳を許して頂けるのなら分量が増えてスランプだったとか9月末に期末の監査があつてそっちでいっぱいだったとか境界線上のホライゾン4（上）、（中）が出たとかアニメで境界ホラとFate/Zeroが始まったとかバーサーカーかつこいいよバーサーカーとか色々理由がある訳ですが誠に申し訳ない。

その癖、文自体は量が二話分にも及ぶ癖に各々の動きばかりで口々に進んでない……是でやつと次に行ける（苦笑）。てーか。人数が多すぎて処理が追いつかん。もとい、処理しきれなかった。

ぶつちやけると。ラスト、古参の二人はちゃんとそれぞれ1シーンづつ用意する予定だったんだが 限界だったんで端折った（苦笑）。

さて、謝罪を述べた上で。

C a u t i o n !

以下の文には作者の恣意的な発言が多量に含まれており、気分を害す可能性があります。それでも構わない方のみ、スクロールして下さい。当方では一切の責任を負いかねます。論戦は大歓迎です。

では、どござ。

後書き：俺達の戦いはこれからだ……！

もとい、是で終わってもいいよね、的うちきりエンド（おい）。よ
うやっと思で「カンピオーネ！」に介入するだけの条件を整え終え

たと言っべきか。

「高松翼、アザゼルガンダム。目標を駆逐する（おい）」

さて、冒頭は「赤い蛇」における今のイギリス情勢。後、アリスとアレクの翼に対する評価、かな。今までちよくちよく出してた行動基準をカンピきつての知性派による評価（説明）。ぶっちゃけ、マスターシーン。その所為で翼が全くと言って良いほど出ていなかったり。

書いててなんだが、スパロボのエンディングみたいに只管、各勢力が出張ってるよ、おい。といった感。

本編で述べてますが。祭り上げられるのも動かされるのも「どーでも良い」から聞いているのですな。で、序章が終了。次回より『カンピオーネ!』の時間軸に突入します。長かった……。

と、言いつつ構造はFFTのラムザとディリータというかメガテンのロウとカオスというかで「表と裏」的な構成にしたいんだが……できるかなあ、ちと不安といえば不安だ。ぶっちゃけ、カンピなんて同じルートをなぞるなんて出来る訳がないんだよな。基本、蹂躪にしかなんねーんだから。

で、馨達の現状を上げてみましたが。

・正史編纂委員会（馨）の獲得物。

? 今回の事件解決の功績

? 権能の命名

? 魔王への連絡窓口（権利）

是にプラスして今回の失態に関しての対上司用アイテム

免罪符：「魔王様の仰せだから仕方がない」

言っちゃなんだが全部メアリに総取りされた上、更に筆り取られても文句を言えない状態だった訳で。只でさえ、愛人を輩出してるのは清秋院なのでそうなたら沙耶宮の権勢が危なかつたり。

口撃されたというか嫌みは散々いわれてますが。其れ位仕方がないでしょう。前回と今回で馨が『彼女とはやっていけそうだ』と言ったのはそこらもあつたりします。

メアリーにしてみれば日本、というか馨達と敵対する気はないのは是で貸しというか今後、基本上位で交渉できるのなら安いものでしよう。現実は一泊コって終わり、ではないのでWin-Winに持っていけないといけないんだよね、という。

恵那に関しては今回やつてるように「愛人だし常時居られないんだから」といった所ですか。「ペルセポネ」は是ですな。

作者的には「メアリーの言と翼を使った高圧的な態度のお陰で気づかれずに済んだか？」と言った所。

で、今回の総括。

神格のコンセプトは「（本編ででないだろう）妖怪を神として権能を手に入れる」事。

の筈だったんだが、10巻でアレクの全権能が判明しこちらもまた零落した神々（妖怪悪魔）の類だという事が判明してしまった。

ラミエルも墮天使だし結局、全部まともな神格がいねーってどんなひねくれ方だよおい。メリユジー又が有りだと『鶴の恩返し』も有りって事になりやせんか。

ミノスによる『同権能による相殺』が明確に公式化したのは有難いが。寧ろ一カ月一回の為に今回の描写を後で盛大に書きなおさんとあかん……。

まあ、ぐでつたのは事実だが。どの神格を選定するかで悩み、夜行さん……というか塵塚怪王を出すと決めあまりました。

にしたのはモレクの権能に関して描写する必要があった為でもあります。魂を焼いて火力を上げる、というシークエンスの為にどうしても「雑魚キャラを大量出現」させる必要がありました。

ぶっちゃけ。本音としてはどっかの竜神を斃して大百足召喚、とかいう和風な伝奇系の権能のが良かったんだけどね。召喚して頭部に腕組み、仁王立ちするなら怪獣メカユヅラよりもかっこいい。

閑話休題

後は高松翼、メアリー・ルイズ・オブ・ナヴァールという人間の性格その他を確定させる話とも言えるかも。公式に馴染ませる為でもありませんな。

てか、メアリー。書いてて気づいたが疑問符が多い気がする。

後、翼のスタンスも。護堂は7巻や9巻、10巻で方針を言ってますがあれはあくまで『草薙護堂のスタンス』なので他の魔王は当然違う、といった意味合いも有ります。

諸に正面から向かい合う形になるのは別に護堂を意識したわけではない、というか私の演るPCや書く話のスタンス自体が基本的に護堂自体とはフリクトする、というのが正確な所だったり。

しかし、あくまで『勝利』をキーワードに持ってくるのはウルスラグナと絡めているのかな？

是に絡んで。なにやら感想欄で祐理と護堂に関する意見が多いので一々感想を返すのも何なので此処で纏めて。

・草薙護堂

まず、前提として。「私の個人的解析資料」でプラス面の書かれるキャラは基本、いません。なんで、只管ヘイト一直線に見えるのを失念していた事。

要素だけをそぎ落とす形で分解していっただけなんだがまだ登場していないキャラに対して此処まで意見が来るとは正直予想外だった、というのが正直な本音。

そんなに、作者の恣意で護堂をストレイボウがオルステッドを容赦なく叩き潰すかのような展開（Orナノハ、薬味アンチ）になると思われているのだろうか（苦笑）。

その辺りは少なくとも本編に出てから改めて感想を頂ければ何より。

ぶつちやけた話『カンピオーネ同士』がであってナアナアで仲良く進める、というのが俺には疑問なのでぶつかりますが。アンチにはさせない、積りでは有るがこの辺のメモ書きを見た上で書くとうしても補正が掛る気がする。

後、耳触りのよい言葉の羅列だけでキャラを分析できないならそれは只の自慰でしょう、と。この辺りは一時期流行った(?)『〜の真実』の類でのキャラ分析の影響を受けているのも有ります。

・万理谷祐理

『一部のキャラの扱いが悪すぎる』という意見がありますがぶつちやけ、是は彼女に対する意見で間違いないかな、と判断。というか多かれ少なかれ

『万理谷祐理に対する扱いが酷い』

という感想は皆様持たれているようで。まあ、扱いが悪いのは否定しません。

逆に疑問なのですが『原作の展開でキャラを変えた』だけで何故其処まで仰られるのかな、と。

護堂の性格で目立っていませんがそれでも大和撫子と連呼して誤魔化しているだけで5巻までは基本、ウザいキャラだったと思うのだけれども。

前回書きましたが（と言うか、感想でも書かれています）、「直訴」は魔王「ヴォバンの為に発生するイベントなので。

原作で最初に接触するのも有る意味、沙耶宮馨に生贄にされた、ともとれます。

それが護堂では上手く生き、翼では文字通り『生贄』になったというだけで。馨なら少なくとも媛巫女を一人犠牲（と言っても実害は現状無し）にするだけで王とワタリが付けられるなら行うと思いません。

そしてもう一つ。万理谷祐理と和解するにせよ、敵対するにせよ、垂らしこむにせよ。基本、彼女は殴り合う、というか本音を引きださないとそれが個人の意思か判別できないので（是は5巻で恵那や馨が言っている）。

ぶっちゃけ、耐える隠すしそれが出来る程度に強いので。翼にしてみれば

『上滑りする綺麗事はっか言ってるようで気持ち悪い』

ので一度叩かないと展開を次に持っていけないというのが有りません。それが本音だと判っても

『なんでそんな綺麗事を本音で言えるのかわからない』

天童翼氏のように先に暫く祐理は酷い目に会う、と書いておくべきだったかな。というかこのまま一方的にヘイトって扱い悪くするだけに見られていたという方がショックと言えばショックではある。

寧ろ、ナデポニコポではないのだから適当に仲良くする（十把一絡げ）より余程、正面から向かい合っていると思うのだがそれを「扱いが酷い」と言われるとそれこそどうしようもない。

ぶっちゃけ、委員長キャラの『堅苦しい所で反発』イベントだったり。

尚、公式で『深窓の令嬢だから決定的に察しが悪い』とあるが同じ深窓の姫君でもアリスは交渉できるし単純に生まれた環境かと（苦笑）。

この辺り、『世間知らずな一般出身の御嬢様』な彼女と自分が跡取りで有る事に関して自覚的な清秋院恵那、跡取り（女）で有る事を否定している沙耶宮馨と比較してみると面白いかもしれない。

結局、5巻まで察しが悪いというか10巻現在でも本質的にズレている点はそのままでしね。

リアナに関してはちと考察不足だったので、感想で書いた「中途半端」はちと訂正。その内、彼女がでてきたら書き直す。

極端な話、万理谷家は『典型的な幸せかつ裕福な家庭』であり『職業：巫女の一般人』なので。家柄そのものが組み込まれている四家や貴族の姫と較べると、まあそうなる。

しがらみをどうにかして選択肢を手に入れようと思うとどうしても腹黒くならざるとえないというか。

ぶっちゃけ、本来の意味で『大和撫子』というのなら恵那になるしね。祐理はあれ、ただの『お嬢さん』でしかない。

是に関してはキャラにとっても作者にとっても実に「都合のよい」キャラである清秋院恵那を同時に出している為、余計にそう見える節があるのかもしれないが。

本来、物書きならば全て本文で描写しろ、という話なのだが。まだ其処まで書いていないし結構先なので此処で弁明。情けない次第だ。

まあ上の言い訳というか、構成上の都合。以下、今回の一件に關しての本音をぶっちゃけると。

『ヴォバン公爵をオリピオーネが俺TUEEEの踏み台にする』のが最早デフォ扱いで。

『万理谷祐理の扱いが悪くなる』だけでなんでこうなるかなー？

てか、オリピと接触するなら普通にあり得る可能性だと思う、というか俺個人としては前者のがやりたくない。この辺、感覚の違いなんだろうか。

手段は選ばないけど筋は通すし誠実だと思っただけだね。言峰並に約束は守るし……ああ、グレゴール・クライシスの系統なのか。別にヴォバンに「ああ、あれ（祐理）なら要らないからあげる。とっととカエレ！」とかまでいけば否定はできないんだが。つーか、翼なら普通にそういう選択肢を取りそうだ。

愛人というか好きでもない女を嫌がらせで抱くタイプじゃない、というか抱いたら嫁が怖いしねえ。是が恵那なら抗戦するんだが。そういう意味で微妙に他人事というかやはり王としての基盤が英国なんだな、と思ったりした。

それと、本編介入、ないし再構成型だとうやってもエリカが割を食うと思うのだがそこからまた「エリカ嫌いなんですか？」という感想がくるのかな、と先に言ってみたり。

言いたかないが。リリアナファンからすればエリカは利益を横から掻つ攫つてる形になると思うんだけどね。一時期（4巻頃）、エリカが叩かれてたのに絡むが。

護堂とエリカができてるのは確定事項というか実際、そうしないとあの話は廻らないのは確かだが。リリアナはピンで別の誰かに就いた方が輝くよな、と前回の感想とは別の事を言ってみる。

で、戦力関連。スサノオからコピった権能はある種典型的な「風、雷の複合攻撃」的な嵐の権能なので特に追記する事は無し。ウオバン公爵のと同じと言いきってしまったのがアレだが。

寧ろ、是に関してちと思う所があると云うか……多分風の聖痕の影響だと思うが。広範囲複合攻撃を「力が集束できていない無駄なモノ」と誤解する風潮がある気がする。

故人に対してどうこう言う訳でもないし私も風の聖痕は好きだったしKAZUMAに対してどうこう言う気はない（私もアレをネタにしてPCした事あるし）。

だからこそ「力の制御ができない事」と「複合広範囲攻撃を行える事」を一緒に考えたに考える人間が増えたのは問題ではないかと思う。広範囲になってしまふもの、と行えるものは其々全くの別物なんだけどね。

ぶつちやけ、カマイタチ気流刃の制御ミスでできたプラズマ入り竜巻と嵐はまったくの別物なのだ、という話。こういう言い方はなんだが重火力アタッカーへの軽視、神凧アンチも含めて山門氏の遺した負の遺産ではなからうか。

神風アンチは『圧倒的な個体が集団に対しての生殺与奪を握る』
の実例という点では負とは言い切れないんだが。むしろああいう展
開自体は好きだし。

まあ、何時だって表面だけを見てそれらしい事を嘯く人間は出る
ので一概には言えないのだが。

巨体の物理的な性能と広範囲殲滅と言う意味合いをもちよつと
考えてほしいなあ、あつちだって三巻の是怨みたいなのもいたんだ
し。

人間で、明らかに上位存在と戦うのなら間違いではないがカンピ
オーネはそも別物なんだよねえ……と愚痴る日々。

念の為言っておきますが私は風の聖痕（八神和麻）は好きですよ？
まあ、オリピオーネというかオリ主つてぶつちやけると基本的に
ステータス傾向が『竜の騎士』だから其処らはある意味当然なのか
もしれないが。対ボス特化で物量戦はその余技でしかないというか。
ダイ大は偉大というべきか。

夜行の権能は本編で大体述べたので言う事は無し。まだ、習熟し
vが低いので完全に掌握はしていませんが完全掌握した場合、都市
圏では広範囲殲滅系権能になるとだけ。早く書きたいねえ。

戦闘に関して言うなら百鬼夜行とそれの集合形態ちりづかいかいおうの使役、切替が
出来るのでかなり使い勝手が良かったり。とりあえず、三柱どれが
メインでも戦いぬける程度の汎用性と単純さは持っている筈。

で、是で権能三つを手に入れた訳ですが。正直、権能増えすぎた
かなあと思ったり……過去編でアゼゼルやアレク、ドニや人間相手
にアゼゼル一個で智慧と勇気で立ちまわってる方がプロット書いて
て楽しいというのが。

『混沌の多頭蛇』だけで移動、攻撃、防御と有る程度揃っている
ので過剰武装に思えてきたり（苦笑）。

その内、スーパーレアメタル*255投入済7・7m機銃x5を

装備したパトカーの如き装備をだすからなあ。

さて、次回より新章突入。と言うよりようやっと本編突入です。ではまた次回に。間に1・2話程度で間奏を入れるかもしれんが。

執筆時BGM：創世のアクエリオン、TERMINATED（境界線上のホライゾン）

fragment? / 01・寵姫と英国と諸問題（前書き）

うん、3話に突入かと思いきや短編を挿入する羽目になったよこ
ん畜生（苦笑）。

上下編程で収まる筈なのでお待ちいただければ何より。上中下の
後に完結編1、2、3とか行かないといいなあ。

青い空。何処までも澄み切った空。

窓の外には雲が見える。四発のジェットエンジンが低い唸りを上げ空気を喰らっている。鋼鉄の翼は大気を切り裂き大空を悠然と進む。

ジャンボジェット旅客機の中。メアリー・ナヴァールは現在、機上の人となっていた。

「はあ、面倒です。翼に送ってもらえれば済んだものを」

日本から英国の時差は凡そ9時間。飛行機に乗るとなると半日以上かけての大事だ。『ブラックライトニング電光石化』を入手した翼が権能を使うのも当然といえる。

費用的にも格安のチケットを使ったとて一往復で10万弱、仮に9月から毎週末往復していたらと仮定すると二百万を優に超える。重い出費とは言わないが経費として見るなら浮くのは有難い。経費節減で助かっている、というのは冗談でも何でもなく（勝手に造った）翼の口座に振り込んでいる。メアリー・ナヴァールは良妻賢母を地で行く女性なのだ。

何より、招聘　　召喚ではない事が今の立場を示している
された先で何を言われるやら。

ディオゲネス・クラブ　の面々だから無茶な要求はないだろうが又猫可愛がりされるのかと思うと気が重い。他の時間は社交の場で造り笑いを浮かべなければいけないのだろうし。

左手の薬指に嵌まった指輪を見つつ日本の住居を思い出す。

メアリーの脳裏に浮かぶのは日本の小さな兎小屋のような屋敷。自分と翼（と、清秋院恵那）が暮らす小さな小さな、しかし暖かい

彼女の城。

彼女にとつての家が英国ではなくあの小さな家だ、という認識による物だとは彼女自身も気づいていなかったが。

手早く済ませて家に帰れば良いだけだ。その頃にはあの巫女も人里にいるタイムリミットの筈だ、ならば暫く甘えても構うまい。そう14の輝きが彼女を後押しする。

何はともあれ。

「さて、本国の老人達は何の用件なのかしら」

カンピオーネー（赤き蛇の魔王fragment）

fragment 01・過去からの声 / 01・ゴタゴタと寵姫と英国と諸問題

「次元連結システムが欲しい」

唐突な言葉が静かな空間に響き渡る。

「王様？」

「太陽炉でも波動エンジンでもS2機関でもアンチプロトンリアクターでもティプラーシリンドラーでもディスプレイス・レヴ……は似たの持つてるか。まあ、何でもいいから欲しい」

スアリー正妻が英国への出張で此処には居らず折角の二人きりだと言うのにいきなり妙な事を口走る翼に恵那は困惑した。

二人が今いる所は鶯谷、ナヴァール邸の庭にある工房　実質、工場である。外からみた高さこそ精々少し高い程度だが入ってみると。地下に掘り進む事で高さをスペースを確保する形となっておりその深さは底が見えない。

各階ごとにスペースは区切られているのだが。その中心部は地階

からの吹き抜けとなつてゐる為、地の奥、地獄の底まで続くかのよ
うな恐怖を感じさせる。当然ながら一般人が落ちたら間違ひなく即
死であるう高さだった。

その吹き抜けとなつたスペース、工房の中心に存在するのは骨格^{フレーム}
のみが存在する巨大な何か。遠くから俯瞰する事で“それ”が辛う
じて人型だと判別できる物のその巨大さ^{おおき}と外観からヒトガタとは判
別し難つた。

基礎となる骨格に内部部品が一部取りついてゐるその様は、頂垂れ
たよつな姿勢と合わさりまるで骨格標本か縊死体の様な何かを思わ
せる。

否、よく見ると至る所では徐々に完成へと近付いてゐるのが判る。
早回しで映像を回せば判るだろつ範囲で徐々に各部位に部品が形態^{イシグ}
変形のように生成されつゝある。理科の時間に細胞分裂の映像を見
た事があればその様子を思い出す者もいるかもしれない。再生する
かのような。否、まるで誕生するかのような様に。

それが鋼鉄の身体でなければ、だが。

作業の中心、先程から骨格^{フレーム}にとりついて作業を行つてゐるのがツ
ナギを着込んだ男　赤き蛇の魔王こと高松翼。清秋院恵那は何
時ものブレザー服姿で少し離れた所から其れを面白そうにみている。

「次元連結システムつて？」

「永久機関。俺の場合は直接、百鬼を憑り依かせて動かせば良いけ
ど魔力で動かす場合、結構燃費が馬鹿になんない」

何時もの人形程度ならともかくね。そう呟く翼と背後の人形を交
互に見やる。

作業が一段落ついたのでか、手を止めて恵那の方に歩いてきた。そ
の手に握られてゐるのは円筒状の物体。近いのは商店街のくじ引き
等で見かける手回しの抽選台だろつか。円筒形の回転機という形の
みを見るなら粘着テープを使ったコロガシ掃除機や子守あやしのガ
ラガラ辺りを連想するかもしれない。

円筒の表面をよく見ると見慣れぬ言葉と樹の絵が銀色の金属で装

飾されている。みる物がみれば其れが生命の樹だと判るだろう。指で軽く弾くと音を立てずに回転し、暫くの後停まる。その出来に満足したか笑みを浮かべると視線を骨格に向けた。

「どっかに有れば良いんだが無理だよなあ。増幅スケリューで使えそうなのは4軸内2個つてとこか。徹底的な増幅と無駄をなくす次善案ダイソンでいくか」

「王様王様、一段落ついたならどこか行こうよ。青竜先生や玄武先生も王様に会ってみたいっていつてたし」

「あー、帝都流とやらの師範だっけ？」

此方の様子を見てか清秋院が話しかけてくる。四聖獣の名を冠する武術の師範達。純粹な武術の熟達では清秋院恵那よりも上らしい彼らが東京界隈にそれぞれ居るといふ話は翼も以前、聞き及んでいた。

此方から関わる事はないかとも思っていたのだが

「うん、そう。恵那が此間道場にいったら青龍先生や御弟子さん達に『嫁入りの準備はできたのか』とか聞かれちゃった。あつてみたとか」

恵那の言にそーいや、この子も裏社会的には俺のところに嫁ぐの確定なんだよなー、というか貰いますと言ってるしな、メアリーと言い俺はこんなばつかなだ、等と脳裏に様々な思考がよぎるも目の前で美少女が初々しく恥じらい、己への思慕を明らかにしているとなれば否は無。返答は決まりきっていた。

「此処ここからだここと京浜東北一本で行ける王子の白虎先生とやらの道場が一番近いかな？ 青龍先生とやらの浅草でも良いが」

「うん、それじゃ青龍先生の所でいいかな？ きつと皆も歓迎してくれるよ！」

「『歓迎』だといーけどな。んじやいこか？ メアリーの方は御守も持たせてるしあいつがいればまずどうにかなるし」

恵那に手をひかれ工房を出る翼の視線の先、其処に佇むのは身の丈7m程の漆黒の巨人。

直線的と局面で構成された四肢と胴体。頭部は鳥の意匠が入った兜、各部には簡素な鎧の様な装甲を配され、背中には棺桶の如き筐を背負っている。両肩には翼状可動肢ウイングバインダーが取り付けられ関節部を布で覆ったその姿は勇壮な騎士の様な、しかしどこか禍々しい空気を見にまとっていた。

「さて、こうして来たはいいものの。相手を探し出す所までしてくればいいのに」

カカツと時間と場所は飛んでイギリスはダブリン。正確にはアイerland共和国の首都である。イングランド人　ぶっちゃけ、ザクソン系他侵略者の子孫　であるメアリーにしてみればなにげに難しい所だったりする。

やる事は言ってみれば殺人事件、もとい『妖精の悪戯』の解決。英国にとってはそれなりにありふれた、厄介な事件。

問題は同時に神獣“らしき”存在が確認されたというだけで。

神獣。先日モレクが呼びだした眷属もその類だし、本来ならば大騎士ではまず惨殺されるだけの存在。単騎で彼等相手に勝ちを拾えるのは彼女の知る限りパオロ・ブランデッリ、サー・アイスマン、聖ラファエロ。それに清秋院恵那位か。

カシオネ翼にとつては十把一絡げの雑魚であれ、本来そういった相手なので。英国では『暇つぶし』、『経験値稼ぎ』と言って勝手に狩ってくれる魔王様がいるので忘れがちではあるが。

「手がかりはこの辺りというだけ。自分で探して倒してくれなんて随分と無責任よね、あの老人方も」

自分の発言に苦笑する。今までは自分がその獵犬まへしゆんびを望んでなっていたというのに。たった半年で世界が変わったかすっかり墮落したと見るべきか。恐らくは両方だろう。

そも、彼女が此方に招聘されたのも様々な事情が絡まった結果だ

った。

「メアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァール。君を今回招聘したのは他でもない」

自分を呼び出した デイオゲネスクラブ の面々と自身の後見人^{サー・キング} 彼等を前に頭を垂れたまま相對していた。

顔を上げるよう言われ席に着く。どうせまた翼への繋ぎだろうと思つても渡された調査書類を見て顔色を変えざるを得なかつた。

顔写真に移っているのは昨年、半年前、翼が英国の魔王となつた後の一連の事件の首謀者。彼女自身を攫つた男だ。

「彼が生きていた？」

「そうだ。かの魔王は気にもされないだろうが。しかし、生きていては色々と問題があるのも事実。其処で君に一任する事になつたと
言う訳だ」

「私のみとして。我が王の出陣についての判断は如何なさいますか？」

「其処の見極めは任せる。我々としては王の勘気を買いたくない」
赤い蛇の魔王は誠心誠意、頭を下げた相手を戯れに殺す程残酷な人間ではない。しかし、虚偽のあつた依頼を赦す寛容さとは無縁の存在でもある。後に聞いた所。

『騙して悪いが、とか消えなさいイレギュラー！ とかされたら大本から潰さないといけないよね』

との事。畢竟、不確定要素の大きい状況な上、事は彼女にも関わ
る為、下手に手を出せなかつたという事だ。

詰まる所、彼を即座に召喚しても怒らせる事なく、単体で有る程
度の行動力と戦闘力を持つ人材。それが彼女の立ち位置だつた。

かくてこの都市ダブリンに派遣されてきた訳だが。使い魔を放つて探すにせよ今暫くは『待ち』だろう。聖アンの薔薇園の一つ、ノースブル島の見える位置に腰を落ち着け、反応待ちだった。

緑に囲まれているものの相手が相手よっせいでは此処は敵地だ。ゆつたりしているようで気は抜けない。ジリジリと忍耐を削られる中、彼等は現れた。

真つ赤な帽子を被り手に刃物ナイフを持った醜い、幼児程度の大きさの小人。

邪妖精アインシリーコート。最近では血塗帽子レッドキャップという名も単体でも有名かもしれぬ。基本的にケルトの妖精は源流をケルト神話の神々に求められる。

有名どころでは妖精の王と女王となったオベロンとティタニア辺りだろうか。此方はシェイクスピアの『真夏の夜の夢』に出ているので知っている人間も多い。寧ろそれでしか知らない人間も多い。

有りそうな所では猫妖精キャットシーだと追いかけていたらタムリンだった、といった所か。

余談だが上記オペラは最近では『夏の夜の夢』と訳されるらしいが筆者は此方が馴染んでいるので御容赦頂きたく。また、零落した神格については詳しくは拙作『妖魔夜行 2 - 05 / 蛇と骸と妖魔夜行』をご覧ください(宣伝)。

閑話休題。

何が言いたいかというと。彼らもまた、神々としての己を取り戻し得る存在だと言う事だ。元来ならば丁重にお帰り願う所だが。別に気にする気はなかった。

魔術師では本来こんなものは準備できないしするメリットも無い。今回の裏を大方悟り溜息をつくと思いを固めた。

こんな茶番劇は早々に済ませて帰ろう、と。

「久方ぶりの出番よ？ 災厄落子。フエیتالチャイルド私を護り、敵を地に墜としなさい」

一、二、三、四……数えるのが馬鹿らしい数、何処からともなく否、『召喚』の魔術で呼び出された幾多の、ピンポン玉程度の大きさの漆黒の球体。

先走り小柄なナイフで斬りかかってきた邪妖精のナイフをその球体が受け止めるとその攻撃の勢いのまま他の球体にぶつかり更に廻りの球体へと運動エネルギーを伝えて行き、一周して元の相手に球体の直撃という形でそのまま返す。

増幅する形で己の攻撃を返された邪妖精はマミるともとい、頭部を吹き飛ばされ、体のみが地面へと倒れ伏した。

『フエیتالチャイルド災厄落子』、只の球体にしか見えないが是も歴とした彼女の形であり礼装、攻防一体を誇り、剣などよりも恃みとする武器だった。

「正直、私の剣技だと大騎士に斬り伏せられない程度が関の山。そんな姫君わたしが単独行動を許されていたのが是。さて。出て来たらどうですか？」

此方を待つてくれていたのだ。演出過多、メアリーが予測する相手ならば此処まで来て今だけです。ぱりを決め込む事はない。そう思つての問いかけ。

問いかけに応じ現れたのは如何にもエリートぶった、優秀そうな顔の西欧人。実際、そういった人間ではあつたのだが。

アベル・アダムス。名前から見て判るように元英国貴族にして賢人議会所属。そして

「さて。久しぶりと言うべきかな？ 我が花嫁」

「元です。家諸共しつかりと潰れてまだそんなホラを吹きますか貴方は」

彼女の元婚約者だった。

アベル・アダムス。ゴドウィン公爵家への婿養子が約束されていた男だった。半年前までは。

新たな魔王とその顛末、その後の行動の結果家ごと取り潰され皆殺しにされ。事実上、いなくなった筈の男。

調査書類を見た時でも信じ難かったし、正直な所二度と顔を見たくない相手だった。

「此処で出て来たのなら好都合です。滅びなさい」

それはかつて呼ばれていた彼女自身の名前、人形姫という字に相応しい冷徹な目。話し合う気など微塵もない。そう全身で主張するメアリーに対し余裕を持って言葉を投げかける。

「ふん、男ができて人間らしくなったと聞いていたが其処までとはな。ああ、今の貴女なら好意が持てそうだよ」

「良くいいいます。貴方は私を見てすらいなかった。確かに私を見ていたのかもしれませんが。しかしあくまでゴドウィン公爵家の利権が目当てだったでしょうに」

「貴族社会において自由恋愛がどこまでできると？ ならば政略の相手でも良い所を探すべきだった筈だ」

「ええ、ええ。確かにそうです。それを否定する気はありませんし駆け落ち等と言いだす程無責任ではありません」

だが。この男はメアリーを見ていなかった。あくまで添え物だった事を隠す気も無かった。貴族として生まれたのならそれは義務だったし仕方がないのかもしれない。

それを理解できないメアリーではなかったしその程度の義務感を持つていたからこそ感情を表にだす事は無かった。

諦観していたというべきかもしれない。『どうせそうなるのだ』と。

だからこそ。

「ならば。魔王メイジ以上の政略婚メッセが貴方相手にあると？」

逆説的に。魔王の庇護と黒王子に対する賢人議会の対抗馬。更に

本人同士の意向。是以上の物はないと言って良い。その上であの騒ぎを起こしたのならば放逐されて当然。寧ろ

「あの御老体達は害虫駆除とウエディンググマーチを共に奏でただけですよ？」

メアリー彼女にとつてはこの男が翼の目を掻い潜り生き延びていた事が驚きではあつたが。だからこそ最早この男は排除の対象でしかない。

否、それどころかこの男と同じ空気を吸っている事すら不快だつた。何故生きていたのか。そんなものはどうでもよい。大事なのは

「最早貴方は私にとって汚点以外の何物でも有りません。未だ生きていた事には敬意を表しますが　私の幸せの為に消えなさい」

「そうだな。最早、交わす言葉は必要ないだろう。君をあの東洋人の元に送り届けてやる、死化粧をした上でな！」

最早、お互いに和解はあり得ないと言う事だ。

立ち止つていた無数の邪妖精レッドキャップが一斉に此方に向けて走つてくる。捕まつたならあつという間に切り刻まれるであろう凶悪な妖精だ。

アリス・ルイズ・オヴ・ナヴァールは天の位を修めた魔女ケルトの叡智や神殿騎士団系の魔術結社の叡智を学んだ。

その一方でメアリー・ルイズ・オヴ・ナヴァールは魔女術ウィッチクラフトも嗜んでいるとはいえ恃みとするのは賢人議会で学んだカバラがベースの近代オカルト魔術体系だ。

魔女の叡智を学んでいるが、彼女にしてみればそれはまつろわす存在なのだ。彼女の守護神格アザゼルからしてからに。

そして、彼女もいつまでもそのままではなかつた。

一対多の処理に難がある災厄落子フェイタルチャイルドでは防ぎきれない事を見越して用意したのなら大したものだと言う所だが。

「何処でそんな邪妖精ユクを仕入れたか等聞く気もありませんし早々にお引き取り願いますよう　　穿て、永遠落子エターナルチャイルド」

メアリーの手から放たれ、空中に打ち出された2レペットボトル大の角柱。それは目標の真上に辿りつくとボスツと気の抜ける音と共に爆発する　　自身から無数の杭を吐きだして。

打ち出された金属製の杭は放射状に飛びつつも良く見ると目標に向けて進路の微調整を行い、その全てが邪妖精モブに命中する。

本来、この手の攻撃は魔術を嗜む者には通用しない。騎士ならば強化した肉体で避けるなり剣技で打ち払うだろう。魔術で防壁を張るかもしれない。

魔物にしたとて似たようなものだ。彼等の肉体はそも、そういった存在なのだから。

“コレ”はそういった連中に対抗する為の武装だ。一発の運搬殻スキルトから飛び出る数は72発。其々が自律的に判断、目標へと殺到、魔術の防壁を突きぬける、いくなれば使い魔の特攻兵器。

自己鍛造弾頭宜しく空中で弾頭を形成、鋭い鎌となり、対象に突き刺さった後、爆散。結果として当たった部位が抉れ落ち人間の子供程度の邪妖精は身体の大半を喪い絶命した。

更に二つ、続けて投じられたそれは先程と同じく空中で爆ぜ、無数の杭を打ち出した。

それは戦闘とは言えず最早虐殺、作業の様な一連の工程。

「うん、魔槍ではないですが上手くいきました。良い感じ」
ゲイホルグ

朗らかに微笑む。成功した実験結果に喜ぶ研究者の様に。

『永遠落子』
エターナルチャイルド

美しさすら備える騎士の剣技や魔術ではなく純然たる殺傷、破壊のみを目的として造られた魔術と道具。
レッドキャップ

血塗帽子はその名の通り赤く、紅く全身を血で染め上げられた。

その被害者は彼等自身であったが。

魔力で編まれた肉体はその生を失うと同時に消え、消えてゆく。その凄惨さすら感じる渦中に佇むメアリーは悠然と口を開く。まる

で己がこの場の支配者だと確信するかのよう。

「それで。貴方の部下はお亡くなりになりましたけれど。まだ手品があるのなら早く出して頂けますか？」

「ふん、神獣を態々見せてやったのに今だあの東洋人がでてこないとは思わなかったがな。まあ、良い。後悔すると良い！」

叫ぶと同時に背後の海から下半身が魚の馬が現れると背後に飛び乗った。

^{ケルビ}海馬、旧くはエツヘ・ウーシユカ。

馬の身体に魚の尾、藻のたてがみを持つ幻獣で臆病ながら気が荒いという複雑な性格持ち。

道端で歩き疲れた人を手綱をつけた若い馬の格好で待ち受けて、背中に乗るとそのまま川をめがけて疾走し、水深が一番深いところまで潜って喰ってしまう怖い妖精だ。

上手く懐かせられればどの馬にも劣らない名馬になるといっが是はホラだろう。少なくともあの男が従えられる訳がない。

しかし神獣と言えど所詮は神獣。この男はカンピオーネをいう物を今だ舐めているのか。それとも己が力で対処できると思っっているのか。此処まで度し難い男だとは思わなかった。

^{ケルビ}海馬とは英国らしいと言っべきなのだろうが。こんな英国河童如きに負けてやる気は更々ない。

「ではこちらも同等の相手を用意させて頂きます。さあ、出番よ？
我が愛し子」

朗々と響く詠唱、異界への呼び声。其処には単独で神獣 大騎士がパーティを組み綿密に対策を練って尚、生存するには絶望的な可能性しかない存在 と相對する事への悲壯感はない。あるのは必勝、必滅の意思のみ。

「つくられしモノ。息吹を吹き込まれしモノ。王の名において汝を

铸造します。赤き蛇の名において汝を産み落とします」

同時に彼女の足元に魔法陣が描かれる。紅の光で書かれた二重の輪とその内の六芒星、そしてその中に細かな幾何学模様まじゅつげんこ。緩く回転するそれは放つ光を徐々に増して行き、光の陰から顕れる影。

「巨大なる存在ものの末裔すえよ、我が血肉を分けし愛しき子よ」

優雅に、しかし何処か気怠げな仕草は、まるで情緒溢れるままに指示棒タクトを取るオーケストラの指揮者の様で。

「現世うつしよにそのあるべき姿を顕現し、打ち砕け、貪り喰らえ 滅ぼしたまえ！」

「ヴオオオオオン！」

咆哮と共にメアリーの召喚に応じ現れたのは漆黒の巨人。騎士の様な、と称されたがどこか禍々しい人形。

今まで モレク戦までの様に その場で『創り上げた』
のではない。召喚の魔術で呼び出された存在。

基本的な意匠デザインはモレク戦までに創造していた人形と同系統だが各部がより洗練されている。

大雑把な例えを言うなら粘土でその場で捏ね上げたか、前もって造っておいた模型か。素人目に見てもその程度の区別はつくであろう精密さ。

背ポールウエボンに長柄武器や戦棍等メイスを背負っているが徒手空拳だと思える頑強
そうな四肢。

「ゴリアテ級人形1号機『半天使』ネフィリム、翼の助力を元に造り出した新
型で強いですよ？ 負けてもめげない悪役タイプですから」

召喚した人形ゴレムの肩に飛び乗ると、主を肩に乗せた半天使ネフィリムも海馬ケルビトとの戦闘に入るべく駆け出す。

「神獣を乗騎にするなんて神話の英雄か、と言いたい所だけれど下駄履ヒシダとは情けないものですね」

「魔王の愛人に収まった貴様には言われたくないなあ！」

「女ですから。まあ、英雄は死ぬまでが役割。貴女の役割は差し詰めアクシリオス。もう出番は終わっています 飛びなさい。大

空は貴方にとつても望む所よね？」

彼女の指示に従い、背から光の翼を生やし大空へと飛びあがろうとした所で、メアリーは自身の違和感に気づく。

「なっ

」

メアリーが信じられない、と言った表情で自分の腹を見る。其処には赤い血を滴らせた刃が生えていた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

さて、そんな訳で始まりました。本編突入と期待された方々、本当に申し訳ない。ぶつちやけ、英国^{メアリ}関連を追加で出す必要に迫られて急遽間奏として入れる羽目に。こいつは前後か前中後辺りで終えたいです。うん、マジデ。

時間軸的には3巻の頃かな？

てーか、2話で恵那との対戦とか英国のゴタゴタまで初期プロットにはいつてやがるし。1話分のネタじゃねえだろ……と言う訳で2.5話ごと短編という形で追加に。

早く次の話いきてーんだよー!? と叫んでおいて軽く解説に。

恵那と翼の会話はまあ、今後のパワーアップフラグ以外の何物でも有りませんが。ぶつちやけ二号ロボ販促話だよな。

んで、今回出て来たのはまあ、で落ちというか使い捨ての敵ですが。今だしておかんとあかんという事に気がついた。

いってみればズーマかザナツファー、^{クレアバイブル}異界黙示録系統の敵ポジなんだよな、こいつ。寧ろ、今後（本編、過去編）への布石か是。

ぶつちやけ。最初は『百鬼夜翔』は想定してなかった（アザゼルとモレクだけで最期まで戦い抜く予定だった）ので、私的には現状、かなり過剰武装^{ダイテレンジン}。

人形もその場で普通に作成する予定だったし鎖と剣&アザゼルのサブパイ扱いの筈だったんだが。恵那をヒロインとして取り込んだ為、ヒロインズオンリーの戦闘が想定に上がる&作成チートが手に入ったんで剣を棄てて本格的に道具使い方面にパラを偏らせる事に。なまじ恵那が剣戟で作中トップに近いので完全に後ろに下げる必要とその為の装備（特性）を追加する必要が生まれこのように。

そんな訳で落子達とソルディオスを礼装として追加。つか、エタ^{チャイルドシリーズ}

ーナルチャイルドはサンダーボルトの弾頭も混ぜてるから実にエグい仕様に。うん、メアリー。何処に行くんだ、君は。

ネタの引用元で軽く出しましたがゲイボルグはあれ、原典相当エグい。ルー関連だけでは説明が足らるのでまあ、機会と要望があればその内に。

そして空中戦の布石。護堂が飛べないからだろうけど魔女も飛べるといふ割に描写がないから。尚、別に羽がついてるのはかっこいいからではありません。元ネタがついているからです。元ネタといつてもネタ的な意味じゃないよ？

尚、ケルピーの戦闘を妄想するに辺り売ってしまった上、記憶も曖昧なDOD2の記憶を掘り起こすべくニコ動の世話になったりする。ストジャのDVDはまだ持つてるんだが。ACLRPの特攻兵器は関係ナイデスヨ？

実の所、無印ZOIDSでてきた杭を空から降らすのがイメー
ジソースだからなあ。

つい10kb弱の上下の筈がなんでこんな分量に……正直纏め
きれいでない感が強い。

では、また後半にて。

PS：『神威招来』って。女神時代の眷属と言ってるグイネヴィア
からしてが実質『神獣なら何でも有り』だよな。烏賊クラッケンなんて出てる
時点で。

後、神獣関連ですが。公式7人だと楽しく倒せるのはヴォバン、
羅翠蓮、ドニの三人だけじゃないかな。アレク、護堂、JPSは多
かれ少なかれ『決戦用』に特化されすぎている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4259r/>

カンピオーネ！～赤き蛇の魔王～

2011年11月7日03時15分発行